川柳塔

昭和十九年九月一日印刷
昭和五十九年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六八九号

日川協加盟

59年度二賞発表

No. 689

十月号

59年度 同人総会と 二賞発表本社句会

日　時　昭和59年10月7日（日）午後一時開場

会　場　なにわ会館
地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車南
電話　06・772・1441番

▼同人総会　午後2時～3時30分
〔議事〕①会計報告・高杉鬼遊　②事業経過報告―樫谷寿馬　③役員改選　④質疑応答

▼二賞発表句会　午後5時30分から
おはなし　西尾栞
路郎賞・川柳塔賞表彰
兼題「手段」　板尾岳人選
「ぴったり」　西田柳宏子選
「新鋭」　大坂形水選
「道」　西尾栞選

席題　当日二題　各題三句
会費　五百円

川柳塔社

一本の自由を、

人って、さみしかったり、うれしかったり、いろいろあって。一本のボトルをキープする。それはつまり、自由な時をキープする、ということで。いい酒だから自由になれるのか。自由だからいい酒になるのか。心開いて、いつものオールドにたどりつく。

今夜も・会う・憩う・酔う
サントリーオールド
キープする。

製造・販売　サントリー株式会社

遊印

西尾栞

恥ずかしながら、遊印という言葉を知った。

「遊印」というのは、姓名、あざな、雅号以外の文字を刻したもので、自分の思想、芸術観、人生観、有名な文章や詩句の一節などを刻した印象のことである。

遊印は明代の末期から、銅印や石印に始まって、清代に於て盛んに作られるようになった。あの個性のひらめきのある立派な篆刻の妙味は、何時まで見ていても、あきないものである。前にも述べたように、遊印の言葉には色々あるが、私の何時も使っているのは、

「夏炉冬扇」というのである。

即ち、時節に合わない無用の長物のたとえで、役にたたない言論や才能のことである。これは芭蕉翁が好んで使われたのを、無断借用しているのである。その外、

「温故知新」

「万古清風」

というのをよく見かける。

今度、九月の末に東野大八先生、薫風副主幹等二十四人と共に中国へ行く。中国へ行くと遊印を彫った石や、又それにすぐ彫ってくれる石印が沢山あるそうである。それで私は記念に遊印を彫ってもらってこようと思っている。それは

「酔心似大空」

というのである。路郎先生の

酒とろりとろり大空の心かも

から盗作したものである。

蘇州の寒山寺の鐘の音も、墨絵のような桂林の景色も楽しみであるが、文字の国で出来る筆、墨、硯等買いたいものが沢山ある。ただ如何にせむ、資力のなきことを。

◇

主人みずから出すは冷蔵庫のビール

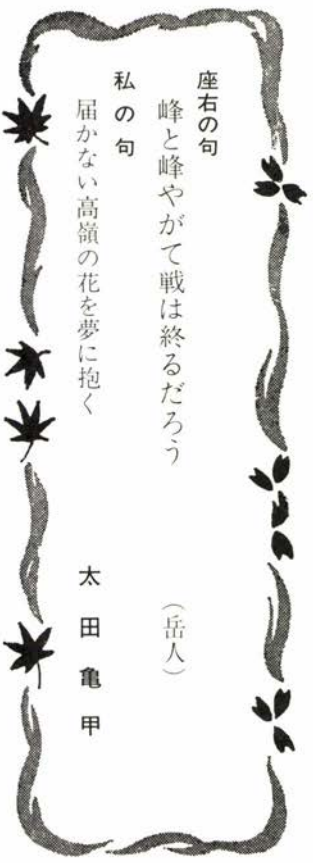
真面目人間が新聞に今日も載り

インタビュー

しょうむないことをきくものぞ

くっしゃみの出かける顔を見たりけり

スケッチの見上げる空は既に秋



座右の句
峰と峰やがて戦は終るだろう
（岳人）

私の句
届かない高嶺の花を夢に抱く
太田亀甲

川柳塔　十月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

遊印……西尾栞…（1）
川柳馬鹿……高杉鬼遊…（2）
川柳塔（同人吟）……西尾栞選…（4）
自選集……（30）
■川柳太平記(77)　川柳の群像　鶴彬……東野大八…（34）
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（十七丁～十八丁）……（36）
上方前句付集の雄編「明石人丸大明神三万句集」(1)…阿達義雄…（38）
59年度路郎賞・川柳塔賞決る……（40）
秀句鑑賞
　同人吟……川口弘生…（33）
　水煙抄……柳楽鶴丸…（61）
水煙抄……黒川紫香選…（44）

川柳馬鹿

高杉鬼遊

川柳中興の祖、井上剣花坊（一八七〇～一九三四）の墓と句碑〝咳一ツきこえぬ中を天皇旗〟が、鎌倉五山の第一刹、建長寺にある。

九月九日、同寺において剣花坊五十年忌句会が柳樽寺川柳会の主催で開かれる。

橘高薫風、古川覚然坊の両氏に同行して新幹線で早朝に大阪を発つ。新幹線は高くつくので嫌いだが時間的制約があるので致し方がない。それほどまでにして何故出かけるのか。ケンカボウというひびきに不思議な魅力を私は感じるのである。

井上剣花坊は近くて遠い人である。しかし氏が提唱した新興川柳運動の実践行動は、遠くて近い問題である。偉大なる先覚者としてだけでなく、ご先祖としての血のぬくもりを感じるのである。当日、次女の大石鶴子氏の選もあり、肉親の温かさに接する唯一の機会だと思ってもいた。氏の挨拶に「川柳を、人をひきつけるものにして頂きたい」と話されたのには、深い感銘をうけた。

松尾柳思郎氏の懐古談の後、尾藤三柳氏の「新川柳の最初の夏」と題する話があり、新聞日本に〝新題柳樽〟欄を設ける経緯が詳しく述べられ、新興川柳のめばえと剣花坊の気

愛染帖……橘高薫風選…(58)
回天の夢……仁部四郎…(62)
新岡回天子氏を悼む……浜本義美…(63)
「揺れる」……鈴木節子選…(64)
一路集「身近」……佐々木裕選…(64)
「若い」……井上柳五郎選…(65)
初歩教室……本田恵二朗…(66)
柳界展望……(68)
本社九月句会……(69)
各地柳壇（佳句地10選／小林由多香選）……(73)
編集後記……薫風・鬼遊・史好…(85)

座右の句

一歩出ずれば我れ旅人となる心　（栞）

私の句

ちょこまかとするから旗を持たされる　氏林洋敏

概のほどを伺い知ることができて有意義であった。

剣花坊には多くの評論がある。たいまつ社の『新興川柳選集』によれば、「革新の心掛無き者は川柳家に非ず」「川柳革新論」「プロレタリア文学とブルジョア文学」「川柳王道論」「川柳裸体論」「新川柳に現れた社会の顔」「冷刺的洞察の裸体詩・熱愛的共感の社会詩」等、題を見るだけでも難しく、今あらためて読んでみるが部分的に理解はできても、その大きな理想と深い哲学的思索にとまどいを覚えるのである。

当日、会場には多くの軸が飾られていた。

高殿の方へかみなり先へ落ち
剣よ詩よお吉の夢を揺り起す
地上権蛇はどこまで這って行く
咳一ツきこえぬ中を天皇旗
蟹の眼に人間みんな横に這ふ
百人の九十九人を敵にとり
ひきかへる石をのせると目をつむり
風早の三保にきれいな忘れもの
駿河にも甲斐にも附かず雲に入り
池の鴛鴦見ても一羽に一羽なり

揮毫の筆勢は鋭いが、書を識らぬ私にはずいぶん乱暴な文字に見えた。聴くところによれば、二王の一人と謂われた東晋の書家である王羲之の筆法によるらしい。慌しい一日だったが、高い旅費を忘れるほど収穫は大きい。偉大な先覚者は、小さい存在の私にそれなりの自覚を植えつけた。

西尾栞選

今治市　矢野佳雲

ショベルカー山の痛みが窮する
金網の破れを犬も子もくぐり
空っぽになると丼鉢も浮き
絶望の二字を知らないから化粧
二二ん が四そこで善人安堵する
トンネルを抜けても同じ雲にあい
妊娠をして当然をうろたえる
優勝を地元商店街も待ち

松原市　谷垣史好

日曜も五時を過ぎれば淋しくて
カリフォルニアの空は無縁の挫折感
良妻賢母だからお誘いしたいなり
うとましや内閣総理大臣たる個人
夏の咳止まず今夜も犬が吠え
団子屋に団子に似たる子が二人

気まぐれの恋にはあらず転轍機

米子市　八木千代

白桃の傷から秋が深くなる
触れられたことではじまる桃の傷
桃の皮いっそ崩れてみたい日も
ご近所へ気兼ねがすぎる桃の種
みつめるとかすかに桃の血がにじむ
涙から熟れたとしても桃の芯
桃の皮逢うて死にたい人がある

大阪市　小出智子

ご無沙汰はお互いさまで秋の風
ふる里を想いトマトは丸齧り
ほどほどを許そうとせぬ秋の皿
棚の上で埃まみれの妻の欲
見る人が見ている駅の未生流
洗濯のない日は少し張り切ろう

熟年に人も羨む森がある

岡山県　嘉数兆代賀

電卓が妻の切り札握ってる
古傷を背負うおとこが絵にならぬ
生き恥のひとつふたつは隠しもつ
ビデオ見る枕は涙もろくなる
意地ひとつきっと咲かせる返り花
節くれた指にドラマを秘めて老い
退き際の美学を夕陽からもらう

和歌山市　浦野和子

御先祖に三日まみゆる身を洗う
猫族と犬族どうにもならぬ溝
旅人となさけ分け合う水飲場
風待ちの港おんなを置き去りに
語り部になろうなろうと夾竹桃
この溝を越えれば修羅と知りながら
君が代を何憚らん夏の雲

新宮市　川上渓水

避暑に行く隣の留守を頼まれる
脱ぎ捨てた暑さへ妻の客が来る
物売りが来てから近所の和が出来る
ワンパクの寝顔非行の非も知らず
父親のそれより期待される孫
オリンピック始まり誰も愛国者
ゴキブリへ妻のスリッパ負けていず

倉吉市　渡辺菩句

最後のひとはな咲かさん立葵
岩盤の貌して敵も席にいる
「静物」になると水蜜桃澄ましてる
糞真面目な姿勢崩せぬ青蛙
野に座すと浮雲の心臓が見える
みんな無名青柿のまま落っこちて
げじげじとどんどんふえるおとしより

岸和田市　高橋操子

その技と共に人柄したわれる
放映の座談の庭にせみの声
釣られても鯉は口髭ピンとはね
世の中の義理へ可愛い子を叱り
血ぶくれた蚊よ感覚のない足に
無縁仏になろうひとりの娘を嫁かす

桜井市　岩本雀踊子

母の背のぬくみに流れている月日
哀しみが深くなるからふり向かぬ
借り傘のぬくもり善人干している
秋茄子を買うチッポケな反抗よ
愚痴ひとつこぼさぬ父を信じよう
妻だけが信じてくれてる弁当箱

八尾市　高杉鬼遊

朝顔を気ままに咲かせ自適たり
きっぱりと言うことがあり紅蜀葵
ビール売る子の父としてビール呑み
ピアノ鳴る坂の家から秋が来る

風干しのカマスを焼いて九月なり
通夜に来て仏の歳を訊いている
美祢市　安平次弘道

真実を追うと政治家にはなれぬ
手品師をハト派と決めていた誤算
満員車少しエッチな紳士面
紫陽花を責める女も移り気で
花束を贈り仮面を確かめる
王手飛車流れの変る音を聞き
大阪市　川口弘生

派手やとは言わずべっ甲すすめられ
免許証の写真は齢をとらぬまま
今日を生く出口は見ない事にする
行く行くと前触れだけの人憎し
茶柱が立ってやっぱり人恋し
突然に踏み込む人を待つグラス
兵庫県　遠山可住

ふれあいの楽しさどえらい奴が居る
自動車を洗うときっちり雨になる
君悟り給うな六十やないか
再会の握手花火を聞きながら
一米八十蜘蛛の巣にかかり
来世も御一緒滅相もおへん
倉敷市　藤井春日

見栄張って心淋しき団地妻
捨てられてばかり拾う神には縁が無い
商売に裏道があり浪速っ子
「草枕」ほんとにそうだ詩が生まれ
禁酒禁煙主治医邪険な見立てです
更生の道幅狭き齢となり
岡山市　川端柳子

夢をみた分だけ悲しみ多くなる
夏休みまんがの主人公に馴れ
蜂ならばここでただ逃げしはすまい
人情に飢えて動物村を訪う
エリマキトカゲ如きに日本の国がゆれ
赤トンボ君の消息やっといま
富田林市　岩田美代

エリートな老人ホームのネグリジェ
佗びしさよ他人の心ばかり読む
きりきりと悔いのある日でまだ暮れず
ちぎれ雲私ひとりのかるい旅
きれい事ですます話のむし暑さ
原色に疲れた海が今眠る
八尾市　宮西弥生

この暑さ虫の声がきこえぬか
知恵の輪にすがっただけの敗けである
炎天下に着た背広に睹けがあり
魚帰る川ただ今盆休み
冷房の部屋でゴキブリ思案する
夏を語る首相を囲む蟬しぐれ
吹田市　藤村〆女

影法師不倫も一しょに従いてくる
中年の情事を雲に盗まれる
亡母の灯が胸でもえてる今宵また
少しずつ母に似てきたほろ苦さ
秋祭今年は鯖寿司もう来ない
ほんとうに来てねと道順書いてくれ

大阪市　津守柳伸

しあわせになれる呪文を聞いている
本音だけ素直に聞ける象の耳
忠実なノラが噂についてゆく
身ぐるみを盗られて敵は智能犯
独り身の気軽な悔いを嘲笑う
ついてくるヒヨコ可愛ゆく哀しくて

竹原市　小島蘭幸

郵便屋さんも素通りする暑さ
八月や我も労働者の一人
匿名にせねば返せぬ恩もある
血液型どの子も妻の味方する
マラソンの最後のゴール子よ見たか
珈琲館妻と何年振りだろう

奈良市　森田カズエ

浮き沈み沈む演技は妻のもの
木のたらいなどは知らない嫁と住み
黒い金詰めた鞄がひかってる
アイドルと言われてからの失語症
年金の生活へ香奠多くなる
満塁へ夢でなかったホームラン

今治市　越智一水

ベレーから飛び出す白髪美しい
嫁がせて早寝の夫おきている

長良川にて

火の波に鵜は勇ましくまたあわれ
鵜飼待ち文句言わせぬ風が吹き
長良川古典絵巻の火が燃える
鵜飼舟ピールの浴衣糊が利き

堺市　高橋千万子

血のさわぎ十年ぶりの封を切る
ジョニ黒の味も値も知り酎ハイを
アッパッパ腰のあたりが物足らず
女五十笑うてすます噂なら
詫びている方も押えている怒り
汗の金だから利息の事に触れ

米子市　小西雄々

お隣も金庫を買って近づけぬ
愛冷えて急に活字が重くなる
老いこみを叱られそうな針の穴
ラーメンの一杯位で騙されぬ
海の部屋冴えぬ話は明日にする
美しく老いたい素顔で陽を愛す

倉敷市　小野克枝

正直な秋人間が好きになる
皺を取る化粧品など無いのだが

信用の嬉しさ伝票だけ残し
迷信の力を借りて起ち上り
宿命に翻弄されて試されて
娘を送り柱時計がよく止まる

岡山市　時末一灯

母なるや鬼なるや川溢れたり
信じきる深き眠りよ鼻の穴
三段に顎をうずめて罪に哭く
同情をしてからプレーボーイ老ゆ
ファンファーレ新車誕生兇器売る
愚者ここに風化させてはならぬもの

諫早市　原田明春

すすり泣く女らしさへ又未練
柔らかな手だと握って見るも恋
宿浴衣下駄履き男のもつ邪念
睨み合い知らず隣の南瓜蔓
音符のようにごろ寝している子沢山
あのときの不孝をわびる墓参り

大阪市　黒田真砂

あきらめた夢ためて居た涙壺
母さんの視角で廻る風車
公休日の怠惰倖せだと思い
落ちるより他にせんない砂時計
水中花のロマンはかなく人を恋う
泥靴に今日のノルマの顔があり

松原市　玉置重人

苦労する話は嫌な鳩時計
性は善遠い絆を恋うる夜
水かける仕草も粋な法善寺
廻り椅子幾つの罪を積んだやら
家計簿の枠でシナリオ書いている
花時計待つ喜びと悲しみと

松江市　恒松叮紅

ゲートルを巻いた足です神経痛
老妻のやっと昼寝へ不意の客
トカゲの噂下火になって夏終る
あれ以来電話口では騙されぬ
国道渋滞ガラ空きの特急車
チュウハイを大正邪道だと思い

松江市　柳楽鶴丸

「終戦」の言葉ごまかしに聞え
洗い髪水玉模様がよく似合う
核と心中する気か政治屋よ
恐しい会話Aの次はB
下手くそ下手くそと素人の目
「痩せたソクラテス」を座右に生きてます

松江市　小林孤呂二

もう役人ではない言葉に気をつかい
役人の讃歌はだれにも好まれず
サイレンが鳴り防衛論も昼にする
革新党わが身を抓ることが無い
自在鉤ふるきを好む温さかな

年金ぐらし餌皿の数は決めてある
松江市　舟木与根一

雨蛙保護色忘れている日照り
おしゃぶりへもう欲求不満出る
公務員でかい活字で叩かれる
豪邸を謳歌している蟬しぐれ
言論は自由さ八月十五日
古里は秋です上り宅急便
米子市　林瑞枝

棒グラフひとりの若い樹を揺する
森林浴しがらみ抜けた風となる
季を持たぬ愛がトマトを狂わせる
あやとりの梯子をのぼる白い毬
天気図よ秋の音譜が踊れるか
縞のパンツ帆を巻き上げてどこへ向く
米子市　林荒介

走馬燈果てまで続く鬼ごっこ
カーテンの襞から何時か秋となる
血縁をたずねて林檎の芯を剖る
向日葵のその儘果てし秋天に
絵馬堂の杜で指切り繰り返す
バリトンのロシア民謡聞くグラス
米子市　石垣花子

才女では無いけどぬくいおかみさん
女の線すこうし残る上布の背
絹糸を紡ぐ女の人生譜
一人独楽廻す女の底力
三面鏡の一つが元の顔を知り
終りまでたたむ暇なし母の羽根
米子市　菅井とも子

五分と五分今さら夫も気にしない
定年が無くて女は安まらぬ
胃カメラが見つけたポリープの話
ビーチパラソルの中は子が居る孫が居る
姪逝去（二句）
散りいそぐ蕾よ弥陀の掌で開け
おばあちゃんに浮世の話してあげて
米子市　雑賀美世

空白を埋める漫画が見つからぬ
男四十そろそろ的を絞らねば
打明けて父の答を待っている
留守番も小さなおごり鯛茶漬
大漁のいわしテキストまで売られ
今日の汗吸うて綿シャツ満ち足りる
米子市　青戸田鶴

陽にいどむ向日葵なりの一途さよ
ひっそりと炎えて蛍の闇になる
すっぽりと帽子かぶろう四面楚歌
木綿針太い絆を縫い上げる
流されてもやがては浮ぶ父の舟
浮き草をときにはうらやむにらの花
米子市　田中亜弥

ヘソの緒のまん中へんで母の声
目のとどく離れで老母の唄を聞く
老いてから悪書ばかりを読むわたし
毒虫の餌人間でことたりる
信じてた字にんべんから崩れ出す
気の強い鬼も童話に負けてやり

米子市　澤田千春

ふとん綿入れると亡母が呼びかける
長い川毬がぽっかり浮いている
母の影うつしてゆれる水たまり
大漁の唄だけのこる故郷よ
底ぬけに笑う女の泣きぼくろ
忘られぬ人に逢えそな裏通り

島根県　松本文子

風鈴の何事もなく鳴っている
手を握る度細くなる老母の指
字余りの別れことばを書き綴る
笑うても泣いても時間もう足りぬ
どん底と思うていたに又堕ちる
月見草誰にも約束などしない

七尾市　松高秀峰

栄転の椅子へ敵意の目が光り
墓参り帰りの車で事故に合い
居眠りが上手に出来る母達者
民宿の能登の訛に棘がない
貧乏の頃自慢する程儲け
貸す金がないと知恵を貸してくれ

豊中市　安藤寿美子

えらい声出すおばはんと蛇も知る
阪神が負けたと風呂へ言いに来る
中年の頸に四つのエレキバン
今朝の秋もうコーヒーは冷やさない
喜んでくれる人居て薔薇が咲く
この二人恋仲やったてうそみたい

大阪市　江城修史

原爆忌
夾竹桃永久に語れよきのこ雲
落丁に似た人生の傷を抱き
限りある命よ一善残さねば
セールスの追われてリズムのない歩幅
逃げ道を残して裏切る絆だち
執念に生きた命が積む積木

大阪市　藤田頂留子

万歩計ノルマのように歩く人
商魂と手を組む行事のハデな声
此の庭のどこが良くてか虫の声
刃こぼれのない正宗のような愛
昨日今日年寄りになったわけやない
口答えせずに私もそう想う

平田市　久家代仕男

見え見えの野望素顔は写さない
地球儀のはてに富む国飢えの国

湧き水に放てば弱い泥鰌の子
是々非々を折衷案で酒にする
表情が豊か羅漢と瓢箪と
向日葵と老夫に入陽拝まれる

八尾市　内海幸生

勝ち誇る亀が本気になりかける
きりぎりす悔いなき声を振り絞れ
旅に出て領収書を貰ろている
友がいて酒あり望むことのなし
飢えている国を横目のダイエット
ダイエットさすが瑞穂の国の民

大阪市　清水健司

仲間から火を消すように言われてる
爪の垢今日いちにちを知っている
踊るのは好きではないが抜けられぬ
正面にあいつがいると眠くなる
泥船が好きで乗ってる訳じゃない
墓参り酒は嫌いな亡父だった

大阪市　西出楓楽

自縄自縛ちっとも取れぬ肩のこり
教材にならぬ親だと自認する
夕茜地球不滅と信じたし
若者の美学が理解の域を出る
曼珠沙華恋は多きを良しとする
勝っているから仕返しは考えぬ

藤井寺市　児島与呂志

残りもの片付け平静さをつくり
矢が当りそうな席にはもういない
よく食べてよく寝る男でいやがられ
相対の戦さに詫びてばかり日本
いや味など言うなと嫌味言うて去に
秋という食べ歩きがある婦人会

大阪市　西森花村

お地蔵さんへ廻って来ます医者通い
猛爆の文字が未だあるスポーツ紙
お土産を妻と二号と取り違え
すだれ越し月は頭の上の方
高速路動かざれども衝突す
葬式をうっかりしてた阿波踊り

伊丹市　樫谷寿馬

夫々の角度でみんな生きてゆく
頂上はどうであろうと踏む一歩
本当に今年だけはという暑さ
夏祭アロハを出して誘う妻
桃源の水でソーメン流れくる
生れくる者へ優しい名を用意

島根県　堀江芳子

悠悠自適ぼけの始めと心して
魚屋は好みも家計もみんな知り
用もない蠅せわしそうお茶にくる

苦しみは無駄でなかった合掌す
こんなこと喜び分かち合える幸
飲まんでも飲んでも夫のいい寝息

島根県　堀江正朗

手伝いの出来ぬ両手を何処に置こ
若さまだ見つけてくれた聴診器
一合の酒に勝つとき負けるとき
まだ欲があってついつい独り言
口開けて口からも聞くヘリコプター
人想う情には負けた差し向い

兵庫県　辻文平

円芯がずれると夜叉となる女
狂いたい心に鈴をつけて寡婦
夢一つ掴むまばたきの中にいる
苦しみは九つまでの数え唄
残像のかけら母です女です
深情けあなたを浅くしてしまう

羽曳野市　塩満敏

ギャルみこしカメラアングル低くなる
五百号あの顔この顔すでに亡し
盆ぐらいお休みなさい定期券
ケロイドの腕をかくして長い夏
妻の化粧金剛石もみがかずば
さり気なく核心をつく取材記者

出雲市　原独仙

この一糸取れば裸よ海水着
釣れぬ竿トンボつるんで来て止まり
ジャンボ金庫据えて下請企業とか
漁具直す赤銅肌が陽を弾き
読み差しの頁を風が繰り昼寝
こそばゆいとこへ聴診器が移動

大阪市　本間満津子

又ねと軽く地球の裏へ孫は去に
静けさが戻り時計ゆっくり動きだし
汚れない三日掃除を怠けても
弱音吐きそうゆっくり話すことは避け
又という日は健康が呉れるなり
虹の色異状なし一合炊き炊飯器

大阪市　神夏磯道子

いい顔を見せてあとから疲れてる
いちにちの重さ忘れて癒えてゆく
退院の出口へ鳩も寄ってくる
青トマト暑さの足らぬ顔でなり
離婚した女優グラビアのいい笑顔
英霊にすまぬブームのダイエット

和歌山市　西山幸

炎えつきた花火きのうに戻れない
寝ころんでわたしを責める鞭を打つ
見舞から帰り一気に水を飲む
一念発起新約聖書読み終わる

もつれ話にかかわりのない白桔梗
下手だった今日を内緒にしておこう

和歌山市　福本英子

ひまわりの拗ねた一花北を向く
二人目の母となる娘に甘えられ
ニューモラル親孝行のいろはから
夕立ちが掠めただけの待ちぼうけ
玄関に父より大きいズック靴
豆台風去ねば気抜けの老夫婦

和歌山市　内芝登志代

子に残す道を真直ぐ泳ぐ日々
美しく老いて小粋な博多帯
平行線一歩ゆずってよく眠る
温かい風寒い風にもなるこころ
粧いも新たにライバル開店し
順番がいつかくるだろ宝くじ

和歌山市　坂部紀久子

表彰台温い握手が国越える
上下の差つければ水は動き出す
正確な駅の時計の憎らしさ
紹の着物着れば背筋がしゃんとする
偽りの粧い鏡に見ぬかれる
踊りの輪皆底ぬけの善人で

岡山県　土居耕花

地球ならどえらい事だ流れ星
ご先祖が動物園の檻に居る
ケダモノの読む本がある店の奥
辜丸も出てみたくなる涼み台
歌手よりも家鴨上手に尻を振り
指し金の様に大工が角を折れ

唐津市　久保正敏

兎小舎飽食窮民中意識
役持って女房がはめる腕時計
銀行振り込み益々寒い父の影
妻にばれ暫く続く素直な日
バナナ程上手が言えねザボンの実
一枚のラベルに伝説生きている

唐津市　浜本義美

痩せ細り〝死んでもよい〟が恐くなり
咳こらえ治療五分の長いこと
病まだ癒らないのか影法師
退院が間近くなった腹が減る
人が泣き白んだ窓に蟬が鳴く
起こされて喰って又寝る馬盗人

富田林市　藤田泰子

傍に居るだけで豊かな風が来る
待ち人に宵から冷してある西瓜
ローマには通じないかも知れぬ道
生きている証にときめく胸がある
良心に忠実すぎた虚しい日

絆ない愛の脆さよ氷柱花

松原市　北野久子

四十五年振りの同窓会（二句）

澄ましてもどこかに残る幼な顔
よく出来た頭は今も輪を組んで

一日がこんなに長い夏休み
とは言うが出れば両手に孫のもの

五十坂の男は離婚考えず
つづくりのこれは私の針でない

松原市　佐藤藤子

タイムスイッチきっちり入れて焦げつかせ
本心が見えて言葉がかけにくい

浜っ子に約束がある土用波
喜びを小さい靴はふれ歩く

涼風をさそう娘の藍ゆかた
悪女にもなれます可憐な花のひだ

西宮市　奥田みつ子

艶やかな闇に白磁となる乳房
朝からの思案朝顔受け止める

黒白をすぐつけたがるのは女
平担な道を曲がれば急な坂

クーラー嫌い姑の団扇はゆっくりと
思惑をすぐに気にするリトマス紙

尼崎市　春城年代

志なかばで満腹してしまう
艶っぽいはなしの方に向いた耳

狙うならどこからでもと薔薇匂う
思い思われ花占いを信じます

日焼けした汗が男の顔作る
藪入りの娘と味見する台所

高知県　松岡三吉

八月の高砂やには訳がある
押されたら出る外はなしトコロテン

寝ころんだ所で朝になるあなた
やがて還暦まだ六十と答えます

水着の美女へすこし理性が遠ざかる
せんせいも小言をもらう夏休み

高知県　赤川菊野

花束を受けて姑の顔になり
人を差す指でやがては裁かれる

初声へ姑との距離が近くなり
人相をほめて器量にふれず去に

灯を消して誰にも見せぬ顔をする
片べりの靴で謀反など考えぬ

名古屋市　越村枯楠

新婚旅行隣の席は逃亡者
天に祈る子にせめてもの肩車

Uターン都わすれの咲く村に
甘言のどこまで溶ける角砂糖

窓際にゴマメの歯ぎしり見てしまう

コーヒーの飲みたい頃に友は来る
尼崎市　角野かず子

ある日から親を見る眼が敵になる
幸せか聞かれてハイと言っておく
悪魔にはなれぬまあるい小さい耳
包丁で釘を打ってる独り者
むらさきが好きで暗示にもろい女
女易者美人の顔を覗かれる
島根県　松本はるみ

振り向かぬ男の背の泪地図
そむかせたこれも一つの妥協策
一本の歯がぐらつけり夢の底
ワイングラスに心の内を見透かされ
イミテーションほめられすぎて言いだせず
虫供養かぶとくわがた化けそうで
島根県　錦織文子

アリランの思い出も外国という運命
八月は無色燦死の友還る
烈しさにも優しさにもある雨の情
ゲートボール童顔に返る安らぎが
黒蝶よ舞うなひん死の友がいる
町並のガラスが嗤う老醜よ
尼崎市　西村かすみ

秋を描く子の画用紙に雲動く
さりげなく嘘を言わせているカルテ
逃亡者母の住んでる駅に降り
現実に戻ると虹が消えている
思春期が母の雑誌をそっと読む
傷つけた言葉酔えない距離にいる
西宮市　草刈堕駄

木食の鬼ふみつける微笑仏
円空の浮き名もありて仏生き
披露宴政治家おらぬさわやかさ
素粒子のそのまた先は釈迦が知る
止まり木はいつも如来と二人連れ
獣めく心にひそと栖む祖先
島根県　小砂白汀

法則の証明松ぼっくりポトリ
鮮血を噴き上げそうなカンナの朱
自燦する時限装置がはたらかぬ
エレベーター知らぬ人と二人きり
指紋型神の図鑑は無尽蔵
倉吉市　奥谷弘朗

もらい子の親に成り切る遠い道
冗談にした忠告がよくこたえ
道だけは貧乏県でないみたい
年輪が光る無口の父が好き
汗すれば答えてくれる夏が好き
熊本市　有働芳仙

いつからか背を向けてねる妻になり

先生は笑っていない盆おどり
ゴミを出すついでに出したい人が居る
老人ホームなどかさこそと調べてい
色々あって玄関の戸が軋み

綾瀬市　大山と金

片陰に寄れば歩道がなかりけり
日本趣味浴衣と団扇と盆踊り
物不足耐えて倖せしかと積み
結婚の場も制服で押通し
終戦日爾臣民御名御璽

大阪市　中川滋雀

風鈴のささやき旅愁が深くなる
濃く淡くコピーの色で暮れていく
よくある話で答えが出しにくい
コーヒーでよいかと話を見抜かれる
ミニバイク女の肩の幅で切り

奈良市　宮口笛生

一しょに寝てもいいよと言う女
それなりに写る写真へ笑顔する
女狐になって一人の女生き
八月の床の間花が枯れている
早ようから烏が鳴いて訃の報せ

柳井市　弘津柳慶

週刊誌うつろに診察の順を待ち
音痴にもマイクが廻る団体車
人生を達観尼僧の背のぬくみ
荒波を耐えて巌頭の松強し
ややこしいことをごちゃごちゃ母並べ

京都市　松川杜的

石臼に御先祖の唄が未だ残る
ほっといても育つ花だから貰ろて来る
半径がだんだん小さくなる余生
豆腐屋のラッパ場末の京に住む
私には三色あれば足る絵具

京都市　都倉求芽

ひとり立ちできぬ朝顔の花の媚び
ハイヒールだから女かと思う
天然記念物というワル役が田を荒らす
マスコミにとっては福の神「三浦」
枕ひとつあれば熟睡するたちで

京都市　山本規不風

秋風は左右の耳へ違う唄
籠の鳥気配感じて慌てだし
訴える術は羽搏きしか持たぬ
きっとお帰り千分の三へ雑魚放流
もう逢えぬ別れを赤い百日紅

鳥取市　小林由多香

飢えに耐え暑に耐えた日よ原爆忌
目の前の餌に真面目な芸をする
馬鹿騒ぎしたツケ給料日を悔いる

濡れ衣を干すあたたかい風を待つ
思い出をたぐれば突撃ラッパ鳴る

倉吉市　渡辺独歩

粗酒粗肴なれどと鼻毛動かせて
精魂が尽きたと和議の帆を立てる
美人薄命そんな女はもう居ない
泣き面に自問自答の雨が降る
靴の紐ゆるんでからの凡夫です

笠岡市　松本忠三

風向きが変り足許だけを見る
受売りがそろそろぼろを出しはじめ
考えることがあってのけちである
てぐすねを見破られてか回り道
末席がひらきなおった顔を見せ

大阪市　天正千梢

目には目を人は悲しい事思う
札束を見れば古傷うずき出し
日まわりが大きく咲いて予言者よ
言い分を聞く物差しを用意する
向う所敵なしお面かけかえる

倉敷市　小幡里風

熱帯夜臍の形を比べ合い
シートベルト洒落た女へ脇見する
ウインドがあるから妻がよそ見する
赤い服嘘つき女によく似合い
ライバルも着ていた服で考える

東大阪市　斉藤三十四

ゆたかさに慣れてしあわせ忘れてる
猿石の民話飛鳥の里で聞く
国宝という仏像を刻む皺
愛情のスランプ家裁の世話になり
古希の夏昼寝をせいと言うてくれ

大田市　藤田軒太楼

ネクタイを替える相手があるデート
落選のポスター雨に晒し首
先客に待つセールスの落ちつかず
顔ぶれに胡散臭いのが一人居て
家長とは名ばかり恩給あてにされ

米子市　政岡日枝子

O型のクリーンヒットは大きいぞ
九回の裏のチャンスは神の慈悲
忽然と砂にのまれた綿の花
ストーリーの通りにマンガ終らない
このままでいいのか神に逃げられる

米子市　寺沢みど里

新月が星の一つを打ち落す
蛍籠むかし話がしたくなる
レース編む今日一日が軽すぎる
未知数が合わせ鏡の中にある
子を寝かせ女に戻るしまい風呂

和歌山市　若宮武雄

俺だって爆発したくなる暑さ
二等兵の墓に惜しまぬ蟬しぐれ
野暮だからまだ諦めぬ話し合い
六尺の孫が可愛いことを言う
疵痕に触りともない風呂嫌い

和歌山市　堀端三男

ともかくも今日の幕だけ引いて置く
主役ではないがかかせぬお漬物
負けん気がまだあり祝儀弾んどく
生きている喜びがある朝の水
お隣の嫁と比べてはなりませぬ

和歌山市　松原寿子

銃口を波打つ胸になぜ向ける
門灯に熱い抱擁さばかれる
紙人形愛の証しは消えやすし
罪な門おとこおんなにある舞台
さりげなく避けて女の修羅を生く

寝屋川市　江口度

二番目に居る幸せを君知るや
マンションで蠅を知らない子を育て
黒眼鏡あなたはきっと逃亡者
笑みをたたえて雄きりぎりす食べられる
定年間近笛の音は澄んでいる

神戸市　仲どんたく

句集恵贈夏涼しくと装いて
薄命へ子猫泣いてる熱帯夜
永眠の出発点でもめている
春の風大仏さんの膝のごと
大胆な子のクレヨンが合唱す

寝屋川市　稲葉冬葉

愛された証がほしい歯の痛み
片肌を脱いだ愛なら信じよう
石ひとつ投げた波紋に悔いている
ラーメンの伸びかげんまで愚痴になる
老妻の漬物石と塩かげん

大阪市　河井庸佑

法的にどうのこうのと身構える
いつの日かもしやと思う宝くじ
運のない男の打つ手こんなもの
人の口待っておれない自画自賛
挙げた手をどうおろすかを考える

呉市　槇田英詩

涙もろい男でいつも貸し倒れ
一言が過ぎると絆細うなり
悪女とは俺になびかぬ人を言う
のろわれた八月六日は火の暑さ
禁酒禁煙少しさみしいお祭りで

福岡県　横地雅風

ただ今に趣味の日ですと妻のメモ

濡れ衣をとった判事は神様か
捗らぬいらだち原稿で蛾を叩き
歩くのは夜だけマイカーそこにある
台湾が安いと居候して歯医者

橿原市　岩井本蔭棒

アフリカに聞かせてならぬ胃腸病
錠剤とカプセルそこへ粉ぐすり
日本の漁船撃たれてばかりなり
保険金受取人は他人だよ
両親に似てない才を訝かられ

桜井市　河合茂雄

捨て石になる運命の星の下
保育器へささやいてやる親心
三割を打って七割打ち損ね
カラオケを歌うても五線紙は読めず
隣より背伸びしたがる妻の見栄

大阪市　北勝美

夏休み高二の外孫もう来ない
旅先の孫の便りは山のこと
十条を残す柳へ秋近し
金木犀今年も咲くか熱帯夜
冬夏も体重変らぬ倖せよ

大阪市　欄蘭

船渡御をテレビで老人拝んどき
ゴキブリが住んで居ないと言い切れず
うまい水パックで売っている世相
値切られてねぎられ西瓜売れ残る
銭湯で小耳に狭んで来た噂

貝塚市　行天千代

隣組喋り女が一人居り
客の前貞淑そうな妻であり
真夏日へしばらく墓参無沙汰する
おくれ髪パラパラ乱す扇風機
日の丸を仰ぐ涙へもらい泣き

岸和田市　福浦勝晴

妻（二句）

糟糠の妻なり文句も愚痴も出る
文学にかかわりもなし妻強し
サラリーの運び屋として貰う扶持
正論を吐き末席にほっとかれ
戦争に恨みつらみを言うたとて

岸和田市　清野こう

ロス五輪・山下泰裕

ハンディを克服金の柔道着
オールドミス翔んでるかっちり貯めている
雲一つ地に落ちている水たまり
老夫婦時折り孫の事でもめ
条件が良すぎて迷う求人欄

岸和田市　古野ひで

えらそうに皺を伸ばせと両替機

負けても勝っても涙は美しい
雨の日の参道神様に会えそうで
条件がからむと愛が寒くなる
秘密抱く疲れだんだん胃にたまり

岸和田市　原　さよ子

方言がでて武勇談に熱が入る
声までが似てきて嫁も家の人
親しさへつい一言が過ぎた悔い
上品に食べて西瓜の味がせず
行き先を告げずに出たい時もある

唐津市　浜本久仁於

炭住へ世帯番号だけ残り
番号の末尾へ夢の当り籤
自販機の切符へ旅情見失い
人生はドラマセーフと行きずりと
ストレスを喉で吐き出す田の蛙

浜田市　中川幸一

パンダで騒ぎ次はトカゲで騒ぎ
雨も漏らぬし女房もいるし酒もある
聴く耳は持たずにくらす深海魚
パン食の農家が愚痴る米離れ
育てたと言えぬ親にも血の絆

大阪市　中西兼治郎

孫出来て風呂に金魚が泳ぎ出し
入院に言わず退院日を選び
公平と言えぬ車内の扇風機
四五本の枝が隣の庭へ咲き
高津宮民の煙はもう見えず

姫路市　松浦輝月

とことん言っては駄目だと息子言い
どう生きてみても所詮は凡夫にて
会の世話くたびれ儲けで喜ばれ
死期を知る病人見舞って励まされ
待たされた方が嬉しい夏季バンク

藤井寺市　吉岡美房

日本だけ何赦か懺悔の原爆忌
反核のプロが平和で何故もめる
泣きながら軍歌歌って逝った戦友
戦友に借りを残して生きている
絶対の平和ひたすら祈るのみ

羽曳野市　榎本吐来

馬鹿になるだけを人様ほめてくれ
妥協することに疲れた風見鶏
善人が好きで出世に遠くいる
団欒を巨・神で割れている家族
潮どきをまた見落とした頑固者

宇部市　平田実男

見てるほど着れば涼しくない浴衣
似て欲しくないとこが似る苦笑い
乳児室もう特長のある欠伸

背番号もらい仲々寝つかれず
参観日今日先生のいい匂い
唐津市　仁部四郎

冷房で背広でストの案を練り
ギャンブルもクジも標語で護衛され
のし袋妻よサイズを間違うな
のし袋楷書で住所書いてあり
新しい軍歌でしょうか野球場
唐津市　田口虹汀

回天子を送る
七色の橋を川柳塔へ架け
回天の業なり名遂げ梅雨に立ち
子育ての母に条件などいらぬ
子の方が母に条件つけて来る
松風に富樫の苦衷偲びけり
唐津市　木塚素石

嫁った娘が電話して来た料理メモ
我が家でも台風予報の出た昔
国鉄も切符配達するプラン
追伸に親しみ増して返事書く
オリンピック金銀争うタッチの差
大阪市　大野武太

突きあたる壁がだんだん厚くなる
保証印性善説を信じよう
私生活のぞく不埒な胃カメラよ
ご近所が駐車禁止の札をたて
過去帳のような記録が人事部に
羽曳野市　中村優

二次会でやっと本心知る徳利
同文の経木を読む右派に左派
自画像に口髭を画く日の虚勢
煙草一本貰って嫌な話聞く
擦り切れた音盤捨てず過去慕情
出雲市　板垣夢酔

正座した妻にあぐらがあわて出し
足腰にただ酒立てぬほど呑ませ
新品も型が古くて威張られず
いたんではいないかと妻に試食させ
特急の窓は手話しか許さない
姫路市　大原葉香

幾百年忠勤はげむ鬼瓦
極楽の入口として法話聞く
点と点結びか細き今日暮れる
音痴とは思えぬ読経の声が冴え
健康食品で買える健康なら買おう
西宮市　野呂鵜汀

日が暮れて捨て子と分かる迷子室
停年は寂しくもなし旅ができ
平社員嘘と知りつつ盃を受け
たとえばの話が他人を傷つける

抜き足で妻のうれしい掛けぶとん
岡山市　井上柳五郎

いいことがありそう北の旅
ひとり言聞いてくれたか花のゆれ
熟年の女房に勝てぬやきあい
言い勝って戻るひとりの帰り道
おない年の友の訃をきく蟬しぐれ
寝屋川市　堀江光子

家事こなすロボットじみた確かさで
食欲のない日の好意りんごする
心ぶらに娘時代の声になり
涼み台ここにも判官贔屓おり
原案の骨抜いた手で手打式
倉敷市　斎藤通風

借景をマイクで呼ぶは寺の庭
折込みのチェック凡てが無駄遣い
宿の下駄鼻緒の固さ他人顔
指定席無くとも待ちますあの世でも
地獄へはまだ遠いぞと縄のれん
出雲市　園山多賀子

一歩退き自我を枉げれば四囲平和
ドライバー腕を信じていろは坂
渡る世に鬼はわたしに棲んでいる
旅愁ふと白樺林の中を行く
蜃気楼女は夢の続き見る
西条市　片上明水

補聴器を外しあと一球に眼を据える
裏向けて被ると仮面にも涙
ヘチマの水母には母の艶があり
挨拶が少々長い程の仲
雨漏りを父が繕してひどくなる
岡山県　岩道博友

隠し味政治の中へ秘書が入れ
年功を語る履歴を持ち廻り
勉強に新しい機種用意され
印象を残したい気の意地を張り
定年が過ぎて短気な角がとれ
羽曳野市　佐野白水

何話しているのか手話笑う
七人の敵を八人にする強気
夏日続き昨日最高今日も最高
どこもみな故郷があって盆の留守
同じ日に胃潰瘍手術という義弟
守口市　羽原静歩

神様に借り物心臓も手も足も
病院で待つ時と税務署で待つ時と
灰皿に昨日の罪が捨ててある
ロボットにいのちの限り踊らされ
丸木橋を渡るに似たり昨日今日
寝屋川市　柴田英壬子

雑草も髪も茫々熱帯夜
銅メダル米ばなれした足で獲り
地蔵寺かき入れ時の墨をすり
十月のことなど思えない渇き
十月の史跡に触れるパンフレット
豊中市　田中正坊

労働歌軍歌と同じ曲だった
零戦に人だかりする炎天下
鳳仙花待ちかねていたプロポーズ
雨の日も傘はささないジャン・ギャバン
ロボットは思う私は孤独だな
竹原市　森井菁居

飛び越えてやるおそまつな落とし穴
手につかぬまま非番日の蟬しぐれ
先輩のおごりへみんなついてゆく
戦争を知らない鳩が増えつづけ
少年に敢えて要らない変化球
西宮市　杉浦婦美子

食欲が少しでてきた河豚茶漬
納豆の粘りにいつも負けている
外国ツアー理性は家に置いてくる
そむかない小指と誰が言い切れる
言い訳はおよしよあれは夏のこと
姫路市　丁坪サワ子

熱帯夜眠れぬ思い亡夫に寄せ
立秋が炎暑に押され後ずさり
主婦の座が戻ってしんどい嫁の留守
孟蘭盆に迎える亡夫へ紅を引く
自惚れで余生楽しく送ろうか
島根県　栂みどり

だまし舟折って現実ふりかえる
亡夫の時計十年ネジを巻き続け
空を切るむなしさ歯がきしむ
熟年の趣味に追われて夢やまず
染めかえて尚あかず着る母形見
島根県　石田清泉

土用市花火も空し過疎の町
涼をとる樹陰借りれば蟬しぐれ
操行乙が淡々として成功談
脚下照顧ぬがれた靴のゆき違い
アレルギー妻で蜂にも見抜かれる
東大阪市　森下愛論

すきやきの膳にスプーンの子が一人
ふるさとは何処へビルが建ちビルが建ち
玄関のチャイムいい音月給日
花火終れば背の子の重いこと
乾杯のジョッキも花火の色に映え
大阪市　長谷川春蘭

似顔絵に母をえがいて一等賞
歩道橋息切れもせず老い達者

親は子の子は親の墓蟬しぐれ
誘蛾灯罠とは知らず寄るさだめ
カラフルな昭和浴衣に鯨尺

八尾市　山下みつる

国籍はどうであろうと美人です
ヌード過多太陽だって熱くなる
馬も又百姓ぎらいふえている
旗振りの妻が弱音の更年期
家計簿が大型余暇をゆるさない

鳥取市　両川洋々

もう未練断てと蟬しぐれが叱る
香焚いてピカドン風化さすまいぞ
妻の手の中で踊っていた誤算
セコンドの妻がタオルの機を狙い
誤算です作意の涙もう乾く

鳥取市　森田熊生

大ジョッキ一気に夏と勝負する
信じ切る瞳に倖せが描いてあり
煩悩を捨てると山に秋が来る
ビールの泡消えてゆるそうかと思う
夢中でしたと本当の汗流す

鳥取県　川崎秋女

会話なき夫婦が見ている天の川
来し方を語りつぐ夜の揚げ花火
小心な男と話す揚げ花火
揚げ花火鯛焼綿菓子かき氷
貧しさが素直に言える年なるか

鳥取県　金川満春

冷夏予報酷暑になった稲の出来
湯上りの浴衣日本の夏を着る
老妻の甘い呼び声今朝は晴れ
鈍行の道連れ出来た缶ビール
眉引いて老妻今朝はバス旅行

寝屋川市　宮尾あいき

人類よ酷暑に負けるな月が言う
クーラーにあまえています熱帯夜
富も名も捨てた昔を悔いぬ恋
袋帯豊かなバスト邪魔になり
そのうちに迎えに行くと亡夫の夢

岡山市　行吉照路

言い訳は二度の職場に書いてない
雑言にアンテナ必死のもがきよう
平和への願い核にはジンマシン
背を向けたポーカーフェイス鬼が棲む
野獣の道は男にだけ臭い

高石市　牛尾緑良

泣けば済む若さを過ぎた星の下
嫁がせて明日の夫婦を考える
空き缶と一緒にモラル捨てられる
コツコツと妻ボツボツと僕

制服を妻へ女へ母へ脱ぐ

守口市　野呂右近

カレンダー一字ずつ消し今日を生き
選挙カー遠のき廃品回収車
忘れた頃バラ一二輪咲く垣根
どちらでも良いから返事煮え切らず
拝む気で妻断りの使者に立て

兵庫県　藤後実男

乗り換えて又乗り換えて職に生き
退院の日には明るい彩を着て
月給がローンの利子に追いつかず
故郷が一つ増えてる父の墓
心電図親の心配子は知らず

西宮市　津山冬子

踊りの輪浴衣の夫若く見え
草木染の趣味ほめられるものが出来
点滴を見守る窓が白みかけ
寺参りもう人生も老いの坂
流れ星命燃やした地の果てに

吹田市　西川景子

闘志満々尾骶骨が伸びてくる
妻になる冒険ならば喜んで
数の中の一人で黙ってついていく
女丈夫とも言われ後家性とも言われ
真剣になるほどピエロ滑稽で

大阪市　鈴木節子

入道雲来年もお米が食べられる
夏休みフル回転の冷蔵庫
お仏壇もクーラーの部屋が好きらしい
ベランダに他所の倖せ見てかえり
十月のカレンダー十月の詩がある

浜田市　佐々木裕

女房に素手で一本また取られ
独り子が親の期待を逆手とり
働いた金は化粧と服に化け
梅干しの種を含んだ孤独感
合い鍵も錆びて来そうな倦怠期

河内長野市　井上喜酔

特上のうなぎで贅沢したつもり
ボーナスへ狙い定めた店じまい
しゃべられて悪い話やおまへんで
賞められて自己満足の笛を吹く
パトカーの無線で獲物が挟み撃ち

島根県　藤原鈴江

視力日々におとろえる（一句）

お日さまに必死にすがる私の目
目薬をさす一刻のもの思い
聞きあきた愚痴そのまま聴いておく
萩の露亡母の涙想わされ
頼られていると思えば日々楽し

島根県　岸本輝水

禁煙節酒また女房の一苦労
不景気をステテコのまま寝間の愚痴
合掌の功徳をにぎる孫の数珠
核と核の狭間で赤い旗を振り
各駅停車ロマンスグレーの一人旅

島根県　北川民子

イヤリング息づかいのまま揺れる
鈴蘭へ雨ころころと雨の詩
孫去んで夕顔咲いた月が出た
順風に乗れば他人の目が冷える
生真面目に生きて疲れた曲り角

出雲市　吉岡きみえ

逢うてはいけない距離で町に住む
還暦の女がもらう月の暈
庭石と語る孤独な父の背
倖せなことに職あり友があり
カタツムリ今日のノルマを急ぐ足

大阪市　吐田公一

石垣の栄枯は知らず草紅葉
子の背丈伸びて親父の座がずれる
母の遺産からだに残るしつけ糸
ライバルの対談にある落し穴
ジョーカーの通りになった四面楚歌

大阪市　鍛原千里

紙一重人の心も壁一重
野の花も風もいとしい道祖神
種なしのぶどうお前の意志でない
おじぎ草いつか戦う夢を見る
子の為に不発弾は抱いたまま

尼崎市　奥山美智子

星空へ気ままに書いている手紙
愛憎のドラマが坂をころげ落ち
なんでもない他人行儀が気にかかる
爪切ってみたが自我だけ捨てきれず
終戦日空の青さと蟬時雨

和泉市　岡井やすお

防衛と防衛ぶつかり戦いに
祇園祭宵々々と山ひろげ
天神祭たった二日の潔さ
東側不参でやっと銅メダル
外孫の背丈ののびた夏休み

出雲市　石倉芙佐子

花言葉忘れた頃に来る手紙
菩提樹の陰を憩の場にしよう
足枷が女の足にはめられる
中心が少し狂った真昼時
蛍火の愛とは知らず寄っている

尼崎市　春城武庫坊

孫曽孫同い年なり母達者

良心に麻薬かけたい刻を待つ
白旗の裏に赤色塗っておく
草笛をよく聞けダムになる部落
夏休み孫の家来になってやる

和泉市　西岡洛酔

踏み出した一歩男だから引けぬ
三十年萌やしの儘の父で良い
コンタクトそれから女喋り出す
友の死が背中をポンと押しそうで
この平和君何故急ぎ死に給う

倉吉市　野中御前

おやすみのキッスをくれる孫帰る
齢ずばり当てた男を許せない
そして朝許す心をとり戻す
栄光の花道おりる背番号
輪の中に強気の魔女がいて困る

八尾市　宮崎シマ子

牛乳が気になる隣留守らしく
日曜の外出嫁に先越され
三猿で通せぬ事もある都会
犬が呼ぶ餌呼ぶ今日は盆休み
男のエゴ反芻しつつ米をとぎ

交野市　山本テルミ

バイバイをする手にしっかりポップコーン
孫増えて気楽な予定狂わされ
暑かったね労りながら花に水
遠い娘の幸せ祈る茜雲
服をぬぎすてて吾家に涼がある

東大阪市　崎山美子

遠雷へ急いでまわる市場篭
美しい女で噂がつきまとう
物忘れくるべき老いを意識する
求人欄中途半端な年齢と知り
一本の虫歯が男をなやませる

岸和田市　芳地狸村

老母逝く（二句）

米寿へ十日残して逝きにけり
お寺さん迎えてからの銭勘定
糖尿の妻の料理が薄い味
倖せは信ずるものに向いてくる
念仏を日課でくらす女部屋

町田市　竹内紫錆

プラカードガールも祖母となる球史
一声で安堵成田の黄電話
子らはまだ悲しき蟬の声知らず
大部屋は黙禱しないビルとなり
ローテーションで来たと上司が若返る

神戸市　山口美穂

汗ふきつつ米研ぐ平和木槿咲く
真夏日の続く予報がはずれない

朝寝などするなと忙しい蟬しぐれ
五十路への知恵の輪解けないまま寝よう
同窓会体の不調もなぐさめて

和歌山市　細川稚代

岩清水あふれ故里盆に入る
ワンテンポおそい正直買うてみる
ビル街の風ストレスを溜めて吹き
枝豆の食べる早さに見惚れてる
窯元に値段なんかは聞かぬよう

大阪市　山根いつを

ええ話一夜ぬくめるええ話
否応の頓着なしに陽が沈む
雨降って地はかたまらず土砂くずれ
六人の誰かが心配かけた亡母
裏切って出た娘一番役に立ち

島根県　木村はじめ

すたれ行くものふんどしと頬かむり
理髪料いつもすんなり値上げされ
政治にも子にも逆かれ老いの私語
曽孫出産これから旅の始まりぬ
老いてまだ子に従えぬ鍬を持ち

西宮市　西口いわゑ

虫干しは亡母の紋にもふれてみる
行くべきや思案の髪をくしけずる
稲びかり思案打ち切るかの如く
本心を躊躇してるはボールペン
原爆忌体験談は悲しけれ

豊中市　上田登志実

夏休み遊ぶも稼ぐも忙しい
君が代に涙こらえた世界一
子を抱き香を焚かせる若い母
傷心の男影までたよりない
長電話井戸端会議は生きていた

鳥取県　新家まさる

元気です鉛筆ポキポキ折ってます
マンネリの筆箱に舞う綿埃
縮尺の異なる人と平行線
すぐ溜まる涙色のスクラップ
秋風が突然めくる訣れの賦

仙台市　川村映輝

八十になっても美人には揺れる
安い米輸入に反対むしろ旗
日の丸と君が代五輪で甦る
自慢気に二〇〇キロ出して来たという

羽咋市　三宅ろ亭

スイッチを入れればロスか甲子園
水中花美事に咲かせ銅メダル
キノコ採り人に知られぬ穴場持ち
雉一羽足もとから発ち山は秋

兵庫県　河原みのる

ロス五輪（一句）

お家芸あとさき光る意地を見せ

一切の米役人よ退いてんか

2・2%はじいてみればこれっぽち

農機具を水着の美女で売りに来る

加賀市　細呂木　魯　木

大人の物差しへ挑む子等の目

道連れに慾を選んだ裏街道

吾が家にも風の道あり猫が知り

走馬灯廻り始めて孫誕生

芦屋市　竹　中　綾　珠

雲の色微妙に写して秋の海

白服の汚点ぬぐうて独りごと

家計簿の黒を囲んだ嫁姑

看護婦の笑顔患者を勇気づけ

大阪市　杉　本　智慧子

ロサンゼルスオリンピック

日本が忘れたものを持つお国

高校野球

九回裏応援団も泣きながら

可愛がり過ぎていじめている仔猫

盆休みゆったり一日暮れていく

大阪市　岡　田　ふ　み

年老いて祖母の言葉が今わかる

大統領女の力を当てにする

辻まわし祇園まつりのハイライト

国訛りつい口に出る夏休み

枚方市　稲　葉　星　斗

参加賞手拭一本という情

待ちぼうけ汗拭く顔におこられず

母校より手紙が来れば寄付のこと

鈴虫を貰い日課が一つ増え

岸和田市　吉　水　照　江

なるようにしかならぬ浮世と知っている

孫相手五色の玉のシャボン玉

幸せの日々満腹で感謝する

うらぼんの今日から三日二人膳

奈良県　宮　川　古都路

忘れ物あきらめていた届物

宮仕え悔いなき日日の足のたこ

富山から旅を重ねた置きくすり

奴凧つながり切れた躾糸

大阪市　坂　本　仙吉郎

まだまだ若いつもりが腰押え

自信なく右に左に揺れ動く

若そうでもいつしかゲートボールの仲間入り

這入り易く出口で油絞られる

岡山県　直　原　七面山

影見せぬ父の愛

分の悪い方が吠え

自選集

悪人の善意善人真にうける
この母にしてこの娘あり口げんか
放電の為の充電とは憎し
約手おちる約束守る為でなく
養老院ここの時計窓の外

大矢十郎

煩わし位置で耳目を外らさない
ひねくれた自惚れを斬る袈裟懸けに
黙想のひととき木の葉舞う音も
静謐を大切にする刻を持ち
一刀両断藪は静寂とり戻す

野村太茂津

八・六忌今年も鬼灯トマト熟れ

山内静水

缶に詰め水が売れてる平和かな
先生は一人迷わず様と書く
一寸休憩横になったら寝てる妻
おかめでもよかったならと離れない

藤井明朗

満月へ虫いっせいにしゃべりだす
満月へわたしも恋の詩がある
盆の灯を送りふる里は人送る
豊作をよそに政界の騒ぎ過ぎ
中年の気力ロボットに見すかされ

米沢暁明

不幸せ黙って置いて去った友
他人には言えて家では言えぬこと
落日へいま廃船の心汲む

喜びの余り言うてはならぬこと
退院の母を迎えるガラス拭く

水粉千翁

また来ます来てねの傘を貸しました
何事もなかったせわしい箸の音
相槌を打つ美しい友となり
飛び越えて見落す溝の深さです
日暦をめくりふり向くまいとする

金井文秋

クーラーの部屋でもったいなく独り
疲れだけ残るが用は片付ける
物忘れ続いて齢かなと思う
納得の出来る答が欲しい辞書
よい知恵はないかと探り入れてくる

市場没食子

平均寿命とうに越してる野良仕事
米寿までことの序に生きんかな
年寄りがありうす味に一工夫
盆踊り賑わう頃は寝て団扇
夕立に避くべくもない場で降られ

信号が橙となり深呼吸
背を向けて小さい抵抗爪を剪る
風呂敷を抱いて系図をだいじがり
盆灯籠肌を見せない母だった
頬杖をついて貧しさから逃れ

月原宵明

バス停を離れて地図を出して見る
ひとすじの川あり雲が流れつく
髭剃って初秋の旅を考える
草抜けば虫が這い出る秋の風
ふり向いて笑顔の主をたしかめる

黒川紫香

知恵の輪の出口でお喋りまだ続く
暑がりな人と連れ立つ花氷
ひと言が素直に言える子に育つ
子育てが終った浜を子と歩く
台風へ港の戦意しずかなり

正本水客

秒針の音神経のたつ痛み

若柳潮花

浜木綿の一輪誰を待って咲く
酔覚めの水の味さえ知らずすみ
引退の舞台ひかえて医者通い
ロス五輪メダル握った気で出かけ

工藤甲吉

防衛費角出し槍出し目玉出し
肩書がとれて洒脱な人となり
諸行無常きょう穿く靴はきょうの靴
離婚騒ぎがおさまってまた孕み
紋白蝶ではたわむれる気になれず

橘高薫風

怖いもの知らずで五十八になり
木の実食う栗鼠とボーロを食べる孫
われ老いしか耳たぶ噛みにくるは孫
名月の今宵は灘の生一本
名月へ六十階のコーヒー店

昭和59年度 大阪文化祭　第36回川柳大会

日時　昭和59年11月17日（土）　11時開場

金場　大阪府中小企業文化会館14号室
地下鉄「谷町九」下車南へ徒歩7分東入る
又は「四天王寺前」下車北へ徒歩7分東入る

宿題
「時事雑詠」　柏原幻四郎選
「或る日」　久保田元紀選
「亀裂」　神前　阿字選
「美」　定金　冬二選
「こころ」　岩井　三窓選
「顔」　野村太茂津選

席題　当日2題
各題2句・締切1時
（出句は出席者に限る）

賞　大阪府知事、大阪市長、大阪府・市教育委員長から「川柳賞」贈呈
五百円（作品集代を含む）

会費

主催　大阪府
大阪市
大阪府教育委員会
大阪市教育委員会

今年度は会場が変りましたのでご注意下さい。

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

川口弘生

夏の海少し若さが残っていた
小出智子
少しが利いてます。日焼けを気にしながら一泳ぎされたのでしょう。うれしい句です。

月見草私ふつうの女です
八木千代
竹久夢二の世界。良妻賢母も仮面かも。

半分のレモンと痛み分ち合う
林瑞枝
レモンの丸さ。半分の切口の味。

もう一人のわたしを縛る私の手
西山幸
悪い私が居らねば息がつまります。

約束をしたのは小指あなたです
福本英子
あなたごめん。私生きねばなりません。

わる酔いがいっ気に治る電話ベル
津守柳伸
お酒の飲める妖精さんの面目躍如。

リーダーにされて喫茶で昼寝する
宮西弥生
ああよく寝た。この図太さが無くてはリーダーは勤まりません。ごくろうさんです。

顔洗うだあれも知ったこっちゃない
本間満津子
友手術の後の句。嬉し涙になりますように。

旬の味賞でて梨むく午後三時
野呂右近
二十世紀から晩三吉まで、梨の句は強い。

参観日うちの子ほんとに知らんのか
河井庸佑
たしかに貴方のお子さんですよ。ね。

全身麻酔暫しこの世とお訣れか
浜本義美
看護婦さんが天使に見えた事でしょう。

終章やここに候うものは風
浦野和子
祇園精舎の鐘の音がひびいて来ます。

私のあしたに母の今日がある
藤田泰子

ひとり来て海岸線が他人めく
森井菁居

あほらしい筈の松茸買うてくる
内海幸生

兼農やがて嫌農になり土亡ぶ
河原みのる

薬湯をたててほのぼの老夫婦
岡田ふみ

妻杖に喜寿の席
直原七面山

生物をとらえて得られた秀句たち。

ひのまずは逃げて野良犬考える
安藤寿美子

切られても動く愛想のいい尻尾
谷垣史好

冷凍の鯛が韓国語をしゃべり
高杉鬼遊

エリマキトカゲドジな男に似ておかし
高橋操子

ノルマなどないがサボらぬ蟻の列
安平次弘道

退いて見るとずるかしこい狐達
小林孤呂二

おしゃべりの鳥が森をもめさせる
石垣花子

秋の虫タクト振るのがいるらしい
西村かすみ

出陣のカラス鏡で羽繕い
野中御前

蝙蝠の楽しき恋の超音波
草刈堕駄

ごきぶりよお前も単身赴任かい
春城武庫坊

選ばれた鶴が悪さをして困る
江口度

頬杖をこっそり猫が覗きこみ
柳原静香

蛙にもリーダーがいる鳴き競べ
森下愛論

ゴキブリのひげ淋しさが少しある
小島蘭幸

川柳太平記(77)

川柳の群像

鶴彬

東野大八

―的を射るその矢は的と共に死す　鶴彬

鶴彬十七歳の作。この一句は二十九歳で獄死した悲惨な彼の生涯をよく象徴している。

鶴彬、本名喜多一二(かつじ)。明治42年元旦石川県河北郡高松町生れ。高小卒後大阪に出て町工場の労働者となる。川柳は十六歳からで「影像」(古屋夢村)、「氷原」(田中五呂八)に投稿。両誌上で森田一二の革新川柳の評論に刺戟され、その主張に傾倒。文通ののち彼に連れられて上京、柳樽寺の井上剣花坊と会い、柳樽寺派との因縁が生じ、同派の機関誌『川柳人』に投稿を開始した、時に昭和二年。その翌年、全日本無産者芸術連盟(ナップ)に加盟し、「戦旗」にもプロレタリア川柳を投句する。昭和五年21歳の適齢で金沢七連隊に入隊し隊内で日青共機関誌「無産青年」を配布し反軍赤化の主謀者として大阪衛戍監獄に収監された。問題の無産青年のスローガンは11項目より成りその主目的は次の通り―

「一切の帝国主義戦争に反対し、戦争の元凶天皇制権力に向って労働者、農民、兵士、青年、婦人は団結し襲撃体制を組織せよ」

一年八ヵ月の刑期は義務兵役外とみなされ結局四ヵ年軍隊にあって昭和八年除隊した。

鶴を少年期から獄死するまで強烈なマルクス主義的プロレタリア川柳に駆りたてたものは、大正期から昭和初期にかけての悲惨な時代環境にあった。米騒動と東北大飢饉による婦女子の売買。第一次大戦後の大不況による世界恐慌のあふりをくって労働争議の頻発、結党直後の日本共産党への大弾圧、関東大震災の天災下に大杉栄の虐殺事件。そして満州事変の勃発から日中戦争へと突入する。

鶴の残した九百句のプロレタリア川柳は、軍国主義的ファッショ化の為政者側への呪詛と、暗黒の時代環境に喘ぐ庶民たちへの惻隠鎮魂の心情に彩られていた。

―凶作を救へぬ仏を売り残している
―もう綿くずも吸えない肺でクビになる
―稼ぎ手を殺し勲章でだますなり

ナップの詩人森山啓や槇村浩、竹村和夫らは反対制、反軍の叙事詩を必死にうたいあげたが、鶴のこの種の批判川柳作品は鋭利なメスのように寸鉄風刺の冴えを発揮した。

「当時の僕はまだ十七、八歳の文学少年であり、この年頃は誰でも一度はかかる人生や宇宙に対する哲学的懐疑にとりつかれている最中であった。そこへいきなり田中五呂八の神秘主義的な哲学的評論や作品が現れ、僕はわけもなく参ってしまった」(「火華」昭12・4)

しかし十六歳で上阪し大阪のどん底の街四貫島で零細工場の工員となって働く彼は

「パンを得ずして何んの文学があろう。僕は頭脳で考えるより胃袋で直感した」(同上)

当初、五呂八から注目され実作理論上の指

導をうけた鶴は、僅か三年後には五呂八の神秘主義と烈しく現実主義で対立した。加えて森田一二は「氷原」25号で「わが同志に対する挑戦」と題し「不生産的神秘主義的イデオロギーを清算し現実的な社会批判の短詩で再出発すべきだ」と主張し、鶴は双手を上げて森田説に賛同し、森田主宰の「新生」五呂八主宰の「氷原」両誌上を賑わせた。

晩年の剣花坊は彼自身の特色たる反骨精神に森田一二や鶴彬の無産者川柳が大きく影響したことは否定できない。この剣花坊の死後柳樽寺を夫の生前から支え通した信子未亡人が、昭和十年「蒼空」を発刊、鶴はその編集同人となり信子の庇護によりうずらの卵の飼育販売人となる。昭和十二年応召したが内臓疾患により即日帰郷、木材業界の業界紙木材通信記者となったものの、反戦川柳で特高に検束され、東京中野の野方警察署に留置され、昭和十三年留置場内で赤痢にかかり、豊多摩病院に入院、同年九月十四日死去。享年29。

鶴がその死を招きよせた導因は

―手と足をもいだ丸太にしてかえし　鶴彬

の一連の反戦川柳を掲載した「川柳人」(昭12・8)である。これを注目した「三味線草」の森鶏牛子が、同誌11月号で「川柳は諷刺詩であっても断じて叛逆詩ではない」と裏表紙一面に掲げ誌上告発した。このため特高は、「川柳人」を発禁処分にするとともに鶴を検束、発行人井上信子を四日間の拘留処分に付した。この「川柳人」事件によって後に俳壇を席巻した〝京大俳句事件〟に引継がれた。

剣花坊亡きあと柳樽寺が発刊した「蒼空」(井上信子主宰)を最後に鶴は、生涯百七篇におよぶ現実的社会主義リアリズム、軍閥と民衆を対比し熱情溢れる反体制的評論をものしているが、鶴に先んじて死去した五呂八への悼文は「氷原句集」「新興川柳論」における五呂八の業績を賛え、その死に対し惜しみなき痛哭の想いを綴っている。

しかし晩年の五呂八は、鶴の掲げる現実主義路線に対し「鶴のいう翼あるリアリズムとは革命ロマンチズム、あるいは社会主義リアリズムを踏まえてのものであるが、もしリアリズムに翼が生えたらそれはリアリズムではない。詩を現実の中で考えるのは詩の本質から遠ざかるばかりだ」と鶴の評論実作について攻撃の手をゆるめてはいなかった。だが鶴はこの好敵手の業績を讃えてやまなかったのである。鶴は強烈な反軍思想の底の民衆を限りなく愛したのと同時に、死に誘われた論敵にも深い理解の眼を心情的にそそぎかけていた。人間鶴彬の真実の姿がそこにあった。

ここに大石鶴子の筆者あて書簡の一通がある。本人の承諾を得て紹介する。

「昭和37年刊の「ふあうすと」に〝鶴彬のこと河相す、む〟(江森盛弥著「詩人の生と死について」より)の中に〝鶴彬というペンネームは鶴子(井上剣花坊次女)の万能にあやかるためだ〟と書いてあるので愕き呆れています。「万能」とは鶴彬自身の持っているものであり、甘ったれの文学少女でありました私などは鶴氏とは別世界の人と考えていたのです。一緒に食事(家族と)をした思い出もありますが、鶴氏の真価を見抜く眼もなく議論の好きな青年、そして特高がつけたりしていましたので気味の悪い人ぐらいに考えていました。剣花坊や信子はこの青年を高く評価し不快な態度など少しも示さず遇していたようです」(大石鶴子)

昭和11年の作で句碑(高松)になっている鶴彬の文芸的作品の代表句がある。

―暁を抱いて闇にいる蕾　　鶴彬

★次回は「**楊元紋太**」

誹風柳多留廿六篇研究（十七丁～十八丁）

八木敬一・鈴木　黄・石田晋一
南　得二・小野真孝・本多正範
石田成佳・大屋六郎・多田　光
故岡田　甫

281　**不二の雪あてに川越シ壱分かり**

八木＝「川越し」は川越しをする客と、川越人足と両方考えられるが、「川越人足」の意味らしい。

句意はちょっとはっきりしないが、雪解けの時期、暖かくて富士の雪が消える頃は、よく増水して川留メになる。寒い日で、消えかけた富士の雪が又増えるような日は、明日も川留にはなるまい。そこで人足も一分借りてバクチに精を出す、ということか。場所は大井川。

石田晋＝『川柳膝栗毛』には「雪解増水」と注する。はっきりしないが、やはりバクチか。

南＝右同。「雪解増水」となれば、川越料金が値上げで収入増となる。

川越しの女房は雨をうれしかり　誹諧あづまからげ　一二三・75

本多＝増水説賛。

多田＝同。

岡田＝同。

282　**雪見にハ馬鹿と気のつく所迄**

八木＝いざさらば雪見に転ぶ所まで（芭蕉）をふまえていよう。

主題句は吉原へ雪見に行くのではなかろうか。

吉原ハ雪見にころぶところなり　三八・19

石田晋＝吉原雪見説賛。

南＝吉原はあまり気にしないでいいと思います。単なる芭蕉の句の文句取り。

本多＝南説賛。芭蕉の句のもじり。

多田＝同右。

岡田＝同。

283　**かんなくづ蛙と同気相もとめ**

八木＝能因法師はあるとき、錦の袋から一片

の鉋屑をとり出し、「これは長柄の橋を作ったときのものだ」といった。これに対し、藤原節信は井手の蛙の歌に詠まれた蛙のミイラと称するものを示し、ともに珍らしがり意気投合した、という句

南＝賛。「同気相もとめ」は『易経文言伝』の〝同声相応、同気相求〟による。

大屋＝賛。

かんな屑すこしながらの土産也　四五・14

井手御覧あれと頭陀から出して見せ　四五・1

多田＝賛。

岡田＝同。

284　**高うハ御座りますと出る鳥と魚**

八木＝時鳥と鰹であろう。「高うハ御座ります」は、何か物売りの口上であろうか。

高うハござりますれども初鰹　笈一・15

石田晋＝賛。「一座高うはございますが」は芝居などの口上か。

多田＝同。

岡田＝「高うは御座りますれど」は、石田晋氏のいわれたように、芝居の頭取（或いは役者）が舞台の上から客へ挨拶する折りの常套語です。例えば役者の襲名の時など。

285　**ぬかるみへ娘を入レて蛍にけ**

八木＝蛍狩りの句。蛍に気を取られ、足もとお留守、それに足もとは暗い。それでぬかるみに入りこむこととなる。そのすきに蛍は逃げてしまう。

多田＝賛。

岡田＝同。

十八丁

286　**逃なから高まんをいふ一チのもり**

鈴木＝寛政十年五月一日、品川沖に鯨が迷い込んで大評判になったハプニングを詠んだ句である。

捕鯨には銛が必要であるが、江戸の漁師は鯨を見たこともなく銛の用意もない。そこで大声等を出して鯨を追い込んだ知恵をこのように詠んだのであろう。

南＝柳多留廿六篇は、寛政八年の発刊でありしたがって、寛政十年の品川沖の鯨とは関係なく、一般句と思います。

一の銛は、一番に鯨に近付き銛を打込むのであるから危険が多く、漁師仲間の勇者であり、熟練者であろうと思われ、見事銛を打ち込めば高慢もいうであろうが、逸早く手負の鯨から逃げなければ危い。本句は逃げながら高慢をいう矛盾がおかしいのかと思います。

本多＝銛打ちは互いに競いあったわけで、一の銛は名誉あったものである。主題句は、向こう意気ばかり強い一の銛手を詠んだ句。

一のもり仁田か突いた山鯨　六四・5

多田＝南説賛。一の銛はかなり注目されたようです。

岡田＝南氏説のように一般句に賛。

287　**黒木売呼とやんわりふり返し**

鈴木＝「黒木売」は、京、八瀬・大原の黒木を頭にのせて売りあるく女。大原女とも。

大原女のそのままの姿を詠ったもので、京都女特に大原女のもの静かな容子をよんだもの。もっとも頭上に黒木をのせているから、急にふり返える事は出来ない。

黒木売大事に跡をふりかへり　一・12

多田＝賛。

黒木売京一ッ見ンの一つなり　明五・松2

岡田＝賛。

上方前句付集の雄編

『明石人丸大明神三万句集』(一)

阿達義雄

大正十三年に刊行された宮武外骨の『変態知識』という雑誌は、読んでみると、内容は江戸川柳が中心となっているから之は一種の江戸川柳の解説雑誌である。

この『変態知識』の第十二号を見ていたら、次のような一文に目を惹かれた。

＊　＊　＊

近き頃獲たる上方前句集

大阪永田文庫の売立本中にあった関西の雑俳書二十五部を近頃入手した。意外の獲物として喜んで居る。（中略）

又、延享四年の『明石人丸大明神三萬句集』の勝句九百番は、堺の瓦竹堂撰であるが、それを半分ほど通読してみた。こんな句が数十ある。

おひはぎも褌ほどのなさけあり
夢ばかりでは出来ぬ告子（うこ）
畳へもれし日を取りに這ふ
起せは膝をつゝむうたゝね
文字に皺よりし病後の入痣
肩くまがきんかあたまをあぶながり
龍宮の女子あたまの上に蛸
道理片よれ無理が御通り
折々前も見たる後見
丁稚がおもふ奥様よりはわるいのに
又折もあらうと腹を立残し
短気者釘打で釘たたき込む
松とも仏ともよむ十四日
わけもないとこ剃るまいと出してかす
人参代のないも天命
歌人居ながら節季には留守
俵ふまへぬ白い大こく
足を合して拝む女房

＊　＊　＊

宮武外骨が他の雑俳書からは唯の一句も書き抜かず、『明石人丸大明神三万句集』か

らだけ一八句も引用しているのは、これ等の句に特に興味を抱いたからであろう。

私がこれ等の句に惹かれたのも、面白そうな句が幾つも見えたからであるが、それと共に、半数は七七の短句であって、短句にしても一句立になっていたからである。即ち、上方にも延享の頃に、既に江戸の武玉川調のようなものが発生していたように思われるからであった。例えば、

○夢ばかりでは出来ぬ告子
○畳へもれし日を取りに這ふ
○起せば膝をつつむうたたね
○折々前も見たる後見
○人参代のないも天命

などは明らかに武玉川調的な句である。

長句（五七五）にしても、例えば、

○文字に皺よりし病後の入痣

などは川柳点の「母の名は親仁の腕に萎びてゐ」などに劣らない句であり、

○又折もあらふと腹を立て残し

などは、内容表現とも川柳点にも見られないような面白さが感じられる。

ただ「短気者釘打で釘たたき込む」という句は、これでは意味が変であるから、「短気者釘抜で釘たたき込む」の誤記又は誤植ではないかと思った。

それにしても、何とかして私も右の『明石人丸大明神三万句集』を一見したいと思っていたが、宮武氏は既に故人になっているので、その方法がなかった。

＊　＊　＊

ところが、鈴木勝忠氏が翻刻刊行の未刊雑俳資料二十八期刊行の中の一冊である『仮題前句付初桜』の巻頭の解説を読んでいたら

○作者名が『心の種』の寛保二年李坡評

と重るのでこの頃の刊と見てよかろう。

○巻末発句により、赤石人丸社奉納興行

と分るが、書名も明らかでない。

とあり、書名がなくては不都合なので、巻頭の最初の句「片乳ぶさにぎるが欲の初桜」という句に因って、仮題として『前句付初桜』とつけたものであることが分った。

この「前句付初桜」（仮題）の扉を見ると、「前句」として、（すなわち前句題が）四十六もずらりと並べられてあるのを見て、「これは上方でも容易ならぬ前句附集だ」と考え、句風を見当づけるために、秀逸句や注目すべき句を書き抜く作業に取りかかった。

それで、先ず驚いたことは、武玉川調の名句が多いことであった。次に驚いたのは前に宮武外骨氏が『変態知識』第十二号に引用した一八句が、この「前句付初桜」（仮題）の中に悉く存在しているということであった。

なお、私が不審に思って問題にした「短気者釘打で釘たゝき込む」が本書にどうなっているかと調べてみると、

◎短気者釘貫で釘叩きこむ

とあり、「釘打」は「釘貫」となっている。

即ち、短気者であるから金槌を取りに行って、それで釘を打ちつけるのも、もどかしく、今、釘を抜くのに用いた釘貫でその儘我武者羅に釘を叩き込んでいる——それは傍目で見ていると実に滑稽だというのである。

（つづく）

59年度路郎賞受賞作

エトランゼ前もうしろも風が吹く

西宮市　林　はつ絵

林　はつ絵　柳歴

昭和49年10月　川柳えんぴつ（富山）誌友
昭和51年6月　川柳えんぴつ社同人
（昭和55年6月富山市から西宮市へ転居）
昭和56年3月　西宮北口川柳会、愛宕山川柳同好会などに入会、川柳塔及びふあうすと誌友
昭和57年5月　多久志、薫風、紫香先生の推せんで川柳塔社同人
昭和58年7月よりローズカレッジ（西宮北口）で薫風先生の講座を受ける

路郎賞候補作品

正　本　水　客

日々好日　菊の白さが極まれり　高杉　鬼遊
〈推薦句〉
エトランゼ前もうしろも風が吹く　林　はつ絵

橘　高　薫　風

結び目が解けたら切れるかも知れず　若柳　潮花
横穴遺跡ビジネスホテルの跡ですな　西森　花村
墓まいり外しなさいよサングラス　妹尾　春江
黒い金束のまんまで数えられ　工藤　甲吉
音痴とはいえ念仏は澄みわたる　大矢　十郎

路郎賞準優秀作第一席

現代の落人かくれ里がない

大阪市　西　出　楓　楽

同第二席

ぼんぼこ山の月は狸を眠らせぬ

米子市　林　瑞　枝

つまようじリンゴに立てたまま帰り　西森　花村
真白い紙に日の出を描く自信　妹尾　春江
アスファルト転んで握るものがない　松岡　三吉
朱の椀に何満たしても人恋し　西山　幸
内へ内へ自分を捲いて行くも秋　安藤寿美子
なまけ癖　十日戎へ捨てにゆく　福本　英子
孝行を少しさせて母が逝く　藤村　〆女
五分五分の夫婦で日々をゆるしあう

庭石にすえると見える裏表　恒松　叮紅
ライバルの頃をお寺で語り合い　土居　耕花

〈準推薦二句〉

裏話書いて乱れた世を稼ぎ　田中　正坊
うまいもの分けてるらしい咳をする　林　はつ絵

〈推薦句〉

現代の落人かくれ里がない　西出　楓楽

推薦のことば

上五に「現代の」とある通り、現代を詠んでいるのが良い。日本には平家の落人部落というのが意外に多いのであるが、昔は落ちのびて身を隠す余地が十二分にあったのである。

今は、情報過多、文明の利器で、隠れることの天才的なゴキブリですら逃げおおせない世の中となった。現代の余裕のなさ、核時代の焦燥感が句の裏面に色濃く出ている。

ただ有難く

林　はつ絵

夢にも思わぬ路郎賞受賞の知らせに仰天いたしました。嬉しいなどと申しては不遜だと思うほど、もったいなく恐縮いたしました。

老年になって初めて故郷を離れ住むようになった私ですが、下手ながら川柳があったからこそ、尊敬する師、こころ温かい多くの柳人に巡り逢えました。おかげで今日の喜びとなり、心から感謝申しあげます。

なお、今後もよろしくご指導くださいますようお願い申しあげます。

黒川紫香

横穴遺跡ビジネスホテルの跡ですな　西森　花村
三台のテレビ孤独を深くする　堀端　三男
妹を叱ると姉が先に泣く　奥田みつ子
黙ってた父がどなって事が済み　森田　熊生
鉄瓶のさむいジョークを聞いている　西山　幸
骨壺の軽さにことば見つからぬ　奥山美智子
人恋しリンゴの皮が長くなり　杉浦婦美子
小芋煮る再婚話あれっきり　竹内すみ子
寝返ればそこにいつもの顔がある　春城　年代

〈推薦句〉

ぼんぼこ山の月は狸を眠らせぬ　林　瑞枝

若柳潮花

銀行が来て定年の気にさせる　遠山　可住
しあわせな枕は一人しか知らぬ　八木　千代
保険屋の言う万一が気にさわり　高杉　鬼遊
おだてにものろう鞭にも打たれよう　小出　智子
堂々と地下タビを干す天がある　土居　耕花
むつかしいお顔暦は四月だよ　谷垣　史好
弾まない毬へ日長をもて余す　福本　英子
親の愛つっかい棒をみな外す　江口　度
警くのは出る杭を打つ音だろう　西山　幸

〈推薦句〉

漬物の味がしみてる母の石　栂　みどり

野村太茂津

おだてにものろう鞭にも打たれよう　小出　智子
大根が満足そうに煮えている　西山　幸
雪月火　夫の記憶を埋めよ画布　堀江　芳子
許された場所で釘が一本抜けている　坂口　公子
妥協せぬ女ふわりと煙吐く　西村　早苗
わら灰の温みは母のふところか　春城　年代
ひとりになるときっと転んでばかりいる　鈴木　節子
謝ってすむ話なら謝らぬ　岸本　輝水
老いの夢どこかでプツンと切れている　柳原　静香

〈推薦句〉

子に貰うこの嬉しさと口惜しさと　若宮　武雄

59年度川柳塔賞受賞作

不器用な　夫婦で植える柿の種

羽曳野市　吉川寿美

吉川寿美柳歴

昭和55年9月　朝日なにわ柳壇初投句
昭和56年7月　羽曳野市民川柳会入会
昭和57年6月　川柳塔誌友
昭和57年7月　電波新聞投句
昭和58年7月　昭和川柳クラブ会員
昭和58年9月　天守閣投句
昭和59年1月　水煙抄投句
羽曳野市高鷲十―二―十一

川柳塔賞準優秀作第一席

目の鱗みたいに外すコンタクト

和歌山市　福井桂香

同第二席

正面に山ありゴミを焼いている

弘前市　田中叶

川柳塔賞候補作品

高杉鬼遊

わからんか何か言いたい女の背　古川美津枝
お互いに一つ叩いて仲直り　木村貴代子
ほかに知恵がないので竹を踏んでみる　津山　刀水
矢面に立つと男が生き還る　月原つくし
妻という安全地帯であきたらず　福井　桂香
落葉寄せ虫の褥を厚くする　笠嶋恵美子
ロールキャベツ一部始終を喋り出す　後藤　正子
真実は一つしかない梅雨明ける　満仲きく子
四月馬鹿いちど嫌いと言ってやる　前川千賀子

〈推薦句〉

子に縋るつもりはないが子を思う　松本　一郎

谷垣史好

おそろしき色の一つに鳥居の朱　小林　一夫
目障りになるから僕の妻にする　中原　諷人
悪友をワンクッションにして和み　前川千賀子
先生が言うてたと言う口ごたえ　伊沢　午郎
降ってくる火の粉払えば敵が出来　杉本つゆ草
割り切った筈をつり銭なぞ数え　藤井　高子
父代り兄の大きなめし茶碗　舟渡　杏花
クラス替え岸をはなれてゆく小舟　中尾まゆみ

頬ずりの痛さで父の日が終り　寺田　裕美

〈推薦句〉

正面に山ありゴミを焼いている　田中　叶

河内天笑

啓蟄や軍艦マーチ鳴り響く　笠嶋恵美子

頬ずりの痛さで父の日が終り　寺田　裕美

新しい医者へためしに妻をやり　矢野　佳雲

なにもかも聞いてしまったロバの耳　田中　晴子

投げやりな言葉だけれど温かい　有働　芳仙

余生とやときれときれの笛を吹く　舟渡　杏花

二賞雑感／西尾　栞

毎年、路郎賞、川柳塔賞の決定日は九月一日であるが、今年は九月三日であった。両賞とも受賞者は御婦人の新人であって、前途洋々たる感じである。昨年も両賞とも女性であった。女性の進出、進歩は瞳目の至りである。男性の活躍を祈るや切である。

昔から受賞されると、我が事なりという気持になられるのか、その後の活躍が停止される場合が往々にしてある。どうど何時までも川柳発展のために、忘れずに、ご活躍されんことを言い添えておく。

ギャルなどと呼ばれて女軽くなる　丸山よし津

楽天家などと他人は言ってくれ　八塚三五島

〈準推薦句〉

割り切った筈をつり銭なぞ数え　藤井　高子

〈推薦句〉

目の鱗みたいに外すコンタクト　福井　桂香

板尾岳人

少年の答えに海をもっている　木本　如洲

また逆になるのが怖い砂時計　矢野　佳雲

発想が少し違った夫婦の絵　高杉　千歩

肩書が或る日ポロリと落ちる音　山本　玉恵

名刺入れにかくせるほどの金を持ち　紀市　郁栄

海底でつぶやく貝の意気地なし　満仲きく子

なにもかも聞いてしまったロバの耳　田中　晴子

引き潮の砂一つときの空を見る　野瀬　昌子

燃えつきたあとは無口な影法師　福井　桂子

〈推薦句〉

不器用な夫婦で植える柿の種　吉川　寿美

西田柳宏子

てんごくのでんわばんごうしりたいな　七歳　寺沢たかし

自分との闘いきびしく今日を生き　稲本　凡子

飛びたくてペンペン草が背伸びする　笠嶋恵美子

太陽と瞳が合いやる気湧いてくる　足立由美子

雑草に育って太い指の節　松本ただし

子育てを終えて再び妻となる　奥　礼子

精一杯生きて続編など要らぬ　高杉　千歩

〈準推薦句〉

下町の血が野良犬に味方する　日阪　秋子

野に咲いて雨も嵐も覚悟する　寺田　裕美

〈推薦句〉

今日もまた幸せだった皿洗う　小玉　満江

喜びの言葉

吉川　寿美

この度、川柳塔賞受賞の報を頂き余りの思いがけなさに、いっ時は茫然とし、そしてこみあげて来る喜びと共に、半足の私を温く、時に厳しく見守り続けて下さいました薫風先生はじめ川柳塔の皆様の御指導の賜と唯々感謝の心で一杯でございます。私の人生にこんな大輪を咲かせてくれました川柳との出会いを大切に、栄ある受賞を重荷に感じる事なきよう一層精進して参ります。今後共よろしく御指導お願い申し上げます。ありがとうございました。

黒川紫香選

採れたてのきゅうりを噛る小さい幸　和歌山市　後藤正子
気疲れを承知で母の一本気
気配りが過ぎると帰り仕度する
髪を切るそんな刺激で足る不満
ひと雨で駄目にしました白い靴

恩人の忌が重なりぬ秋の蝶　八尾市　高杉千歩
ひざがしら抱えて合わす銭勘定
修羅くぐる女に負けるのもおんな
返事まつ日暮れが早くなりました
赤電話お国訛りへ風も秋

髪型を変えて自分の道を行く　尼崎市　福田礼子
神さまと話せる席を探してる
裏側を見せて味方に引き入れる
横丁を曲ると人情もろくなる
その日から白紙が続く日記帳

金にならない原稿で名が売れる　西宮市　紀市郁栄
暗算の下手な男が嘘を言う
亡父の歳こえて華麗な恋をする
完走の近くで虹が見えてくる
駆け落ちもできぬ男と花火見る

六根清浄まだ五合目の杖をつく　尼崎市　田中晴子
いくつもの答が出せる万華鏡
敗けた背を叩いてくれる影法師
飼猫の行方を探す女文字
その結果握っていたのは秋の風

ひと膝を寄せた話がもれている　熊本県　大川幸子
小さな嘘の波紋がつくろえぬ
左手がこう不調法とは知らず
遠ざかる足音さみし夜の雨
友達でいましょうねへ熱がさめ

藤井寺市　赤木和子

歳時記とあそぶ人間に疲れ果て
天に唾吐いて戻らぬ橋渡る
ひそやかに来た秋風を身に纏う
忘れもの取りに来たのか秋の蝶
包まれた愛にリボンが掛けてあり

東予市　小山悠泉

陽炎がゆらゆら島が浮き上り
裏切りの罪幾度か紅を引く
コンニャクが悲鳴上げそう針供養
誇る子は居ないがみんな親思い
悪友に打診を頼む片思い

長岡京市　木本如洲

企みへすっかり涸れた井戸覗く
風船の遠くに飛べぬ空もある
ふだん着の色気人妻らしくなる
浮世絵に似てきて舞妓の床うちわ
トイレにも青磁の壺のある生活

富山市　舟渡杏花

二度蹴って財布の中味たしかめる
下手な気休め言うた自分へ腹がたち
半分はわかって欲しい鼻の汗
芯のないおとこを頼る泣きぼくろ
なんの種蒔いたか花を待ち焦れ

熊本市　宇野昭代

階段に手摺りもつけて孫を待ち
客去って一人の夜が静かすぎ
冗談をまともに受けるのであわて
肩車パパとお話はずんでる
さりげなく別れた胸が疼き出し

寝屋川市　平松かすみ

いつみても同じ齢です定期券
風船のしわがとっても気にかかり
一人なら後れた時計でも暮せ
方向音痴へとても大きな地図をかく
おしゃべりが過ぎてお国がばれました

尼崎市　山田保蔵

幼稚園ママがくるまで泣いている
床柱役人さまの座るとこ
五十年添うた妻にも距離がある
ショックです俺より若いヤツが死ぬ
職安へ行く洋服は別にある

和歌山市　福井桂香

直線でよいと信じている男
笛吹けばタップ踏み出す人がいる
逢えぬ日のグラスの色は濃いライム
月の雫落ちてひそかな花が咲き
紫の花の色なら盗みたし

尼崎市　丹下玉子

曲げられぬ約束事で期を逸す
熱帯夜オーデコロンをふって寝る
子を生まぬ女が寺の坂登る

女ごころ全身泥の美容する
裸天国入道雲が顔を出す
高槻市　竹内花代子

寝ころんだ指が植木を指図する
団地騒音補修工事と蟬の声
冷房のスーパーで主婦の長話
血圧が安定すれば手が痛み
ロス五輪見たい番組くるわされ
吹田市　井上照子

梅の実の雫も青い雨の庭
初恋の手紙少女は花を入れ
ラブレター顔を見たいと書くばかり
三回忌義妹のような花開く
高槻市　笠嶋恵美子

受話器取る方に耳垢よく溜り
聞き役に回れば風もやわらかい
蟬時雨般若心経続くなり
掌にころがす風の噂かな
名古屋市　藤井高子

昂ぶりを鎮めて夜半のかねたたき
失った己を探すカメレオン
人肌の嘘に抱かれて病んでいる
案の定兎の耳はピンと立ち
岐阜市　市川鱗魚

ビル真昼ドラマの中の人ばかり
秋の絵になろうと母の小むらさき

男一匹堂々踏んで通る釘
追いつめるずるさが秋を深くする
熊本市　永田俊子

四捨五入しても許せぬことがあり
孤独ある時西瓜の種かぞえ
人間の分別悲し袋下げて
記憶つなぐ糸が悲しく風化する
米子市　茂理高代

ハイカラな病名もらう更年期
ガラス器にふれた冷たさ秋が来る
人形で死にたくなくて笛を吹く
若返る見込みはないが赤を着る
大阪市　上田柳影

背の皮が一枚むけて夏終る
北向きに寝かされるのも旅のこと
空白の日日に向日葵ぐんと伸び
方向音痴の妻は辻辻道を聞く
今治市　野村京子

帽子深く女が罪を抱いた時
妻子のために裸足で渡る丸木橋
廃船に貝を宿してもう浮かず
童話からぬけでた月は美しい
尼崎市　鈴木良征

誤解にはいつも慣れてる赤いバラ
山椒は小粒でギャルに嫌われる
甚平が板についたか老いの坂

不倫の恋汚れた足袋をそっと脱ぐ
川西市　野村静雄

面白いとこへは少し酔うて行く
貧乏のリズムに乗って靴を履く
借りられる方もあわれな声を出し
責任を持てと机がでかくなり
吹田市　栗谷春子

この窓には入れば風の旅終わる
秋風が枕の端を通りぬけ
つつましい汗は握った手の平に
来客に素早く変わるひと間あり
鳥取県　羽津川公乃

浮かしても嘘が重たいだまし舟
タオルケットクーラー程よく利いている
のろのろとせかせか老いの身に同居
銀婚に悪妻の顔少し変え
唐津市　浜本ちよ

師の喜寿を祝って（二句）
喜びはわが師の喜寿に逢う絆
喜寿にしてああ青春の噴火口
息子言う母さんの句は暗過ぎて
火あぶりの刑が欲しいよ放火魔に
吹田市　茂見よ志子

草野球上手が一人いて目立ち
スーパーで一円玉がやっと生き
天気予報半分位は当てにする
心づけはずんだ付添すぐ変り
尼崎市　吉永伊三郎

山一つ越えて池田の猪を買う
分らない顔して解る抽象画
散った戦友よ見てくれこの日本丸
カルテには胸の痛みと書いてある
愛媛県　石手武

女系家族父さん一人宙に浮き
熟年の息切れがする正義感
窓ガラス割れたまんまの無人駅
エライコッチャうちのかみさんアイシャドー
八尾市　鷲津章

戦跡の雲に佇むサングラス
ベレー帽河内訛りが出る不覚
山田寺ドラマ埋めた連子窓
鍵っ児の母が居る日は拗ねてみせ
和歌山県　寺田裕美

たのしみの西瓜をタヌキが味見する
隠居から起床ラッパが起きてくる
先頭がだんだん遠くなる疲れ
これからの戦さへ開ける化粧箱
和歌山市　神平狂虎

泣き黒子も秋には艶を増してくる
絵の中で秋は静かに深くなる
伝説を辿ると秋の樹に当たる
プログラムに秋は主役になっている

豊中市　満仲きく子

生きている証しへ蟬は鳴いている
そして誰もいなくなった燕の巣
乗り心地良いものでなし救急車
最高の笑顔をつくる金メダル

西宮市　山片紀雄

避暑旅行いつまで居れるワケでなし
あん蜜で語った夢はもう来ない
籐椅子のきしむ窓辺に秋が立つ
出かけても納涼という人いきれ

兵庫県　森脇和子

孫去んで拍子抜けしたかき氷
久々に物干にぎわう子の帰省
震度三家が倒れるかと思い
片思い又ダイヤルへ指迷う

寝屋川市　岸野あやめ

誤字あて字恋文サマになって居ず
肉付きの面を心にかけて見る
六十歳だんだん派手な服を選る
陽を吸うた布団を叩く幸もある

高石市　浅野房子

言訳を考えているイヤリング
影を持つ男に惚れてまだ独り
気おくれが男女の仲を遠くする
朝顔が咲いているのに秋の虫

熊本県　高野宵草

帰る足引越す前の家に向き
あの頃がよかったなァと流行歌
尻馬に乗っている間が面白い
眼鏡越しユーモア解せぬ目が怒り

倉吉市　淡路ゆり子

母という鏡を抱いて狂えない
故郷を発つ日の風を道づれに
手拍子をずらして束をゆるくする
逢うまではこの掌の蛍離すまい

宝塚市　丸山よし津

贋の歯を入れる仕掛けの多い椅子
天気図を当てにしないで見て出掛け
仕掛花火燃え尽きたあと川流る
嬉しさが綿菓子のよう沸いてくる

西宮市　松本一郎

きっと来る窓あけて待つ青い鳥
枕辺に眠りぐすりの本を置く
職退いて中身の変わる住所録
年金で生きる工夫がまだ足らぬ

大阪市　古川美津枝

北枕しても浮世は暑おます
変身がとても上手な夏の雲
あたたかい言葉が添えてある土産
好きだとは言わないけれどお月様

弘前市　田中叶

ふうふうをして半分は父が食べ

子と写すいつもこれしかないポーズ
冷蔵庫勝手に開けて飲んでいる
赤ん坊どこかで泣いてむし暑し

出雲市　落合正江

天人の持つ羽衣のほしい夜
まん丸な穴より出でて蟬が鳴く
天の川女の岐路に白い風
中傷の矢尻女の背にささる

尼崎市　児玉歌子

駅裏で泣かれ決心鈍らせる
涼しげな席を陣取る水中花
早いとこめくって欲しい覗き読み
致死量に女の賭けが隠される

和歌山市　桜井千秀

暇らしい妻古傷へ触れはじめ
値下げする度そり返る叩き売り
一張羅が半値になっていたショック
なで肩の男ですぐにすねてくる

姫路市　人見翠記

亡夫十三回忌に当り偲ぶ会に招かれて（二句）

十三回忌亡夫の渾名聞く笑い
亡夫の語録今に生きてるクラス会
屋島寺へつづく遍路のバス降りる
蓮の橋シャッター押し合う知らぬ仲

羽曳野市　田中隆二

方向音痴が運転免許取り
ああ中年妻はバイトで子は塾へ
人生の真ん中辺でシコを踏み
気がつけば折り返し点を走ってる

芦屋市　上田佳秋

夏祭り母待つ故郷のちらし寿司
噴水が訣れ話をきいている
やりくりの妻は妥協をして呉れず
真夏日の昼間に逢わねばならぬ人

大阪市　松本ただし

使わない方の手の爪延びている
靖国に友あり古稀を前にして
たまにウソついて欲しい三面鏡
爪切れば虫が秋風持ってくる

西宮市　秋元てる

鍵っ子の鍵で身許を割り出され
吟行の女で占める屋形舟
どう見ても思案の浮かぶ顔でない
よい思案ないが飯だけ済ませおく

羽曳野市　吉川寿美

四つこはぜ一つ外れて出る噂
錆びてまだ弱音は吐かぬ姑の釘
姑として打てば斜に見える釘
老いの一徹曲った釘の人嫌い

鳥取県　灘尾民子

鳩の出る帽子欲しがる子供の眼
道順を変えて思わぬ罠に落ち

帰省客もてなす梨の初ちぎり
愚痴一つやさしく聴いた母の海　和歌山市　玉井豊太
キスまでのムード女にそつが無い
出し抜けに言うからシャックリ又始め
新鮮な魚ですよと午後の店　和歌山市　山川克子
お互いに手頃な相手だと思う
にげ道を知っているから慌てない
要領の悪さにげるのいつも下手　滋賀県　安田志津
家中の帽子が揃うハイキング
痛い程の太陽を背に梅を干す
山彦もあなたも少し焦らせ癖　大阪市　長岡周太
妻に病まれ料理の本を買いに行く
豆で鳩誘って孫の守りをさす
親の墓建てずペットの墓を建て　新潟県　高野不二
冷房の職場へ喜々と出勤す
暑い暑いと書いた日記がもう十日
先ず土産買うてそれから旅の味　大和郡山市　岡田すみれ
紀の川の川の流れは釣り人で
一番茶手もみの味も香りよく
炎暑の日孫のやさしさ犬も避暑　和歌山市　森敏子
噂とは違った人でほっとする
てのひらを離れて毬は自我を持つ
言い訳を聞かない母の眼が怖い　山口県　高崎雀声
来客の去って扇風機だけ廻り
料理本カバンに単身赴任する
スタミナの夜食がとどく母心　岡山県　松本元江
秋のバラ浮気な風にふとなびく
虫の声女をさそう月あかり
一人寝のほろり淋しい夜が更ける　尼崎市　佐藤美代子
素朴さに加えてほしい案内図
クーラーバス一服しないで早く来て
朝市で立喰いをする旅の人　田辺市　染道佳明
本心はノートの隅に書いてある
朝顔に犬の散歩が通り過ぎ
台風が来るぞ来るぞと向日葵も　大阪市　日阪秋子
ある日ふと鴉の足跡見た鏡
中年の兆しネクタイ曲ってる
知り合うてみればちょくちょく出会う顔　八尾市　葛幸子
病室の窓の向こうの幼稚園

ぶらぶらと散歩のつづく星あかり
縫いたてのゆかたの藍の香りまき
唐津市　山口高明

誕生日ローソク吹く息貸してやる
骨董屋狸と並び無愛想
峠道影が重なる老妻を待つ
益田市　里本たかし

揺れ乍ら女一つの孤を画く
自転車で夫婦が植える畑残す
同居する決意に守宮窓を這う
岡山県　千原理恵

枯れすすき先祖の墓を撫でてくれ
待つ人が来るまでバラよ散らないで
機械化が職人という名を忘れさせ
岡山県　小林妻子

明日の陽に続く親父の小休止
ひっそりと咲いていたのが目に止まり
下の孫エリマキトカゲに似た走り
岡山県　山本玉恵

どの部屋も模様替して夏と居る
定年で妻と歩調が合うて来る
ふくよかな女色気と間違われ
岡山県　戸田種子

ジョギング夫の足に追いつけず
頼りない母を過保護は頼り切り
目の前の蠅も追えずに人泣かせ
吹田市　山田里子

ギャルみこし見ている人の暑気払い
ロボットよ愛情弁当作れまい
バラのある部屋でタンゴを聞く孤独
泉南市　坂根流水

山の宿蚊取線香取り揃え
鐘の音に比叡山上雲の峰
団地にも提灯つられ盆踊り
岡山県　矢野山人

秋晴れの山菜とりに親子連れ
みかん狩り孫の日記もたのしそう
割り勘ときいて嬉しくなる男
守口市　森川まさお

金魚すくい浴衣に襷がけをして
散歩するコースにゆるい坂えらぶ
ちりちりと灼けた車で海へ行く
守口市　結城君子

白ばらがうっかり棘を忘れさせ
リボンフラワーにしても紅薔薇中心に
誇らしく生きて現世に悔いが無い
大阪市　亀井円女

幸せを人に上げたい年になり
年輪の数だけ恥じる罪深さ
老夫婦つとめて避ける愚痴話
大阪市　今西静子

宮参り無邪気に眠っている主役
実行力もたぬ男の負けおしみ
枚方市　二宮山久

耳よりな話へ悪人ついてくる
ラブレター切手をしかとなめてはる
一人では何にもできぬ台所
大阪市　稲本凡子

飲まぬ客だから箸がよく動き
白い靴はけば夏の陽がはじく
ベランダで亡夫の星を探してる
兵庫県　奥野テル

相槌を打てば無心をほのめかし
子育ての私に父母のいる強み
老いて尚誰に会うかも薄化粧
青森県　波ただお

鳴呼「むつ」廃船への道のり長かった
浜辺ではみな大胆にポーズとり
天国に上る階段造ってる
熊本市　黒田緑

逆算をしても歩止りたかが知れ
ご機嫌は如何とコーヒーが匂い
影二つ揺れるガラスの裏表
今治市　月原つくし

三面鏡喜劇役者に仕立てあげ
愛つめるポッケを探す十五歳
影踏まぬ位置を保っている歩幅
桜井市　前山美恵子

信号のようなバラ寿司まぜている
咳をするひとり暮しに秋さみし
佐度に来て金山のすみを掘ってみる
竹原市　岩本笑子

一生を海にお墓も海へ向き
ゆうゆうとトンボ墓碑を詠むように
打ち上げて波は背信許さない
貝塚市　池田寿美子

送り火を待ち焦がれてる京の宿
古稀過ぎてなお女とはうとましき
定年後本当の人生知るわたし
米子市　本吉宗光

車道にカマキリがじっと動かない
ロス終るくらしの夏はまだ続く
ひょっとことおかめ登場の句がほしい
広島市　望月晴彦

一心に虫は生命を鳴きつくす
タイムトンネルの中をくぐって来た悪夢
どうにでもとれる言葉を口下手で
鳴門市　八木芳水

ガニ股の父でチャンスが逃げ続く
エリートが先乗り切符手に入らず
男には不運紫煙を吹かす蝶
島根県　深田ふさえ

向きあって寡黙な胸に小石投げ

皺のばす指にいたみが伝いくる
手すさびに紙舟折りし老い一人

鳥取県　福田あや子

夏休み六時のベルは子供部屋
里帰り敷居胯げば眠くなる
いっ時の不夜城となる盆灯籠

西宮市　朝山千世子

熱帯夜服のデザイン考える
花に水老いの日課を楽しみに
ぶらんこの揺れに童心甦る

島根県　岩佐富子

病む同士話せば芒穂がゆれる
路地裏に心ぬくもるおすそわけ
部屋に月入れてごろ寝の暑い夜

米子市　光井玲子

実直を絵に書いたよう亡父想う
手のひらの地図を見つめて迷い道
夫婦してメガネの置場探し合い

米子市　大田みさと

大女何故か小さな箱が好き
カラフルなタオル子等の服に活き
苦を捨ててそろそろ登る残り坂

箕面市　坪田紅葉

下手なりに今日までつづく川柳句
間をおいてみる人生がほしいもの
価値感が違ってしまった若い人

羽曳野市　天崎只士

素晴らしい親でありたい子の笑顔
百科辞典家具の一部に見たてられ
金婚もこれから先も喧嘩する

出雲市　小白金房子

ジョギングの親子へ交す朝の声
草笛を鳴らし下校の孫帰る
イヤリング女生き抜く夜の蝶

羽曳野市　麻野幽玄

病弱の頃飼って居た白い山羊
嘘発見器より正確な妻の勘
幸と言うべきか妻も少し飲め

高槻市　梁川吉子

天の底破れたような雨が降り
朝顔の明日咲く数で花占い
墓の前言いたい事がみんな消え

大阪市　町田達子

水の無い溝で午睡の犬の知恵
夕顔がほのかに浮いた一軒家
思い出の宿で旅愁をかみしめる

寝屋川市　立床晴風

常連が揃い八時を打つ時計
二三日置くと女房の角は取れ
未だ若い若いと父のアデランス

和歌山県　山田、久子

鏡見る十六歳になってから

疲れたなあ一寸人間やめようか
大の字になって疲れがまだ残り
大阪市　大塚節子

雨の中五位鷺立ちし竜田川
日の落ちて一枚羽織る菜種梅雨
神詣りそれから山陰出湯旅
岡山県　牧野秀香

趣味と友楽しい日日を支えられ
喜寿ですと言えば皆んなが不思議がり
宝石のウインドのぞいて見るばかり
八戸市　島田昭治

色の無い花火見ているむなしさよ
良心そんな言葉もあったっけ
顔だけを磨き心はそのまんま
高知県　小澤幸泉

湯上がりの顔が他人の顔にみえ
虫取りにだけふる里がよい子ども
おみやげと疲れが重い旅カバン
八尾市　椎尾公子

裏切った眼の酷しさを背に感じ
コマーシャルの歌を上手に唄う孫
コマーシャルの餃子が並ぶ食卓で
吹田市　西岡豊

灼熱の砂のめりこむ大砂丘
媒酌は上司にたのむ青写真
手で問えば女にっこり眼で答う
青森県　福士トキ

豊作のために鳴け鳴け油蟬
夏風邪に皿の乾いた河童です
ままごとも婆ちゃんやはり子守役
大阪市　松尾柳右子

サングラスかけてスターになる歩幅
太鼓腹同士で繁盛させる店
停滞に高速の空高く澄み
大阪市　板東倫子

商魂にエリマキトカゲひた走る
虚礼でも来ればうれしいお中元
根性はスイスに負けた女子マラソン
島根県　森山英子

幾らかのゆとり出来たか花づくり
若人がもどって町が活きかえり
愛媛県　八塚三五島

女盛りの肌をシャワーに舐めさせる
生涯の画布色を塗り色をぬり
大阪市　北山悟郎

悪友を持って居るから世間知る
此の僕を組し易いらしい孫
出雲市　河原恵美子

笑われるこんな女がいてもよい
コトコトと煮つめても出ぬ茜色
兵庫県　脇田米朝

サングラス取ったら舐めたような顔

宇宙遊泳こいつに勝る視野はない
兵庫県　平和茂一郎

廃鉱の町へ観光バスが来る
気持だけ若くて身体がついて来ず
守口市　岸野キミ

熱帯夜愚痴のかわりに風邪を引き
夏休み親も子供も先プラン
高知市　北川竹萌

表から裏へ蜻蛉の通り抜け
気持よく酔うた音痴の節も合い
和歌山県　北山凡太

お灸には勿体ないな肌の艶
遠慮せず乳房を摑む婦人科医
東大阪市　小林勇人

俺の年までは生きろと酌んでやる
お隣へ同姓入居ややこしい
大和高田市　岸本豊平次

針箱で針が錆びてる共稼ぎ
大正は生年月日もろただけ
大阪市　塩田新一郎

何話す出合い頭の蟻の髭
柔道着男の汗で染めている
八尾市　松下蕉露

リハーサルあったか拍手が揃う
追憶を買うてる夜店の飴細工
大阪市　橋本悦子

若やいで心豊かにゲートボール
病んだ目にかすかに揺れる日の光
倉敷市　赤沢沢の藤

たまさかの妻のおしゃれも目の薬
唇の色に女の賭けた恋
大阪市　堀口欣一

甲子園のテレビを国会議員室
終戦の日の青い空甲子園
鳥取県　松本みをき

喋るだけ喋って急所はずれてる
おとぼけを言って上手にまとめこみ
八尾市　向井しづ子

クーラーに興ざめ顔でいる風鈴
あさがおの紫はっとする気魄
岡山県　藤瀬比沙子

冗談をうちわで叩きすねて見せ
一言を待っていました月見草
岡山県　豆原千代女

プラモデル買ってお客の子をすかし
いたずら子ほど可愛らしい顔で寝る
岡山県　池田半仙

素人の強味は時間気にしない
新聞もチラシで重い金曜日
兵庫県　野々口ゆう也

まだ虹が見たくてメガネ買い変える
切符二枚美しい嘘埋めに行く

会う度にこうべを低くする稲穂
弘前市　真喜内　實

かどとれどまた別のかど目立つ石
橿原市　西本保夫

チャンネルを変えて忘れる事にする
さわやかな汗職安に見てもらう
大阪市　野村八重

山中に名もない花がゆれている
若あゆの姿涼しき床料理
西宮市　待田麻黄

燈明に亡母が揺れてる三回忌
若い娘の花束温い定退日
岡山県　福原悦子

野仏もだまって見ている炎天下
過疎村も声にぎやかな子のプール
泉佐野市　大工静子

素人の出来栄え一コずつくばり行く
別居され老夫婦策をねる
豊中市　小林一夫

期待したほどの花火でなかりけり
よく撮れた写真本人気に入らず
大阪市　北田秀月

若いとは何につけても気が揺れる
公園のベンチに孤独愛す人
大阪市　林　トヨ子

浴衣着て屋形船にて花火見る
連れて来た娘より息子が固くなり
岡山県　富坂志重

素人の出来たちぎり絵床の間に
背を丸めゲートの玉を追うはやさ
島根県　田中幸里

香典も知らぬ間に値上げされ
古手紙あの娘はどうして居るかしら
指宿市　渡辺伊津志

蜂を呼び集め向日葵宴を張り
蓑虫の揺れを眺める新入社
和歌山県　西村重彦

女体には悪魔がいます夏の夜
レーガンの言葉で揺れる世界です
大阪市　山脇正之

苦労した本を屑屋に縛られる
孫というオモチャを神にあてがわれ
島根県　園山世似

織姫の如き恋あり地上にも
おしゃれして大仏さんも盆を待つ
大阪市　兼松宏安

脱サラの夢破れての一人旅
スーパーが近くに出来て出費ふえ
豊中市　奥田満女

一ばんの暑さ足るかな水銀柱
涙とは上役さんに見せるもの
岡山県　二宗吟平

身売りした貨車振り方を待つ軒場
生い立ちの趣旨が違って折り合えず
大阪市　平井露芳
森林浴最後はみのおの湯で仕上げ
昆虫館蚊もゴキブリも蠅も居り
島根県　岩田三和
活力のない子に育つ冷暖房
揺れる橋で面白がる児たのもしい
大阪市　山本炉斉
朝まだき健やか取戻す老いの日日
お山へは車をかりて礼参り
大阪市　渡部さと美
まず夫の脊が入る市場かご
酢が効くと聞けばそれもまた始め
大東市　田中ヒデ子
掌に悪の道筋書いてある
返事の長さで決める台所
新宮市　船越正
女児まじり変則野球路地の奥
風鈴のひと夏だけの音を選ぶ
守口市　長谷川司
送り火を拝む古都の旅となる
ロスに咲けなにわ娘の水中花
岡山県　後安ふさえ
水府忌に句碑をさすって口ずさむ
チンチンも出した子プールの昼下り
大阪市　大倉圭介
イヤリング揺れる女のエゴに触れ
塩気ない食事で俺を生かす気か
大阪市　田中節子
若さとは恐れず行動出来ること
若い脚伸び過ぎて座席におさまらぬ
大阪市　川原章久
暑がりの仏にかける日除け傘
石畳すり減っただけ街栄え
島根県　喜島ノブ
朝早く廊下を一人車椅子
シャワー浴びナースの世話に手を合わす
富田林市　松本今日子
髪の色ツートンカラーに夏の風

ジュニアの部

藤井寺市　赤木奈々
せんりゆうにきたけどあそぶあいてなし
日本茶をのんだらきっとおちつくよ
枚方市　二宮撰子
涙にもダイヤにまけぬうつくしさ
夏の夜ロケットで出発だ!!
ひら方市　二宮正よし
大空に小さいくつがとんでいる
父さんに新聞切られてつかえない

愛染帖

橘高薫風選

蓮の花亡妻美しく化粧する　青森市　工藤甲吉
みな脱いで白い炎となる女身
ねぷた囃子川の向こうに負けていず　笠岡市　木山遠二
善人の往来繁くお盆かな
知らんかったよと寝たきりへ来て笑う　唐津市　木塚素石
肩組んだウソの楽しさハシゴ酒
死刑から無罪フィクションではないが　近江八幡市　前川千賀子
憎むより忘れてしまう青みかん
万灯で埋めると遠い河となる　大阪市　小出智子
眼鏡屋の椅子から秋は深みゆく
洗濯機わが分身と思う日も　唐津市　浜本義美
声が出た歓喜廊下へ出て叫び
生きるとは喰うことだった病んで知り　和歌山県　北山凡太
常日頃まさかの友を選っておく

表彰は辞任を暗に示唆してる　藤井寺市　赤木和子
美しく見える角度の椅子を選る
幸せを見たくば家へいらっしゃい　和歌山市　西山幸
いつか秋さてウンガロよカルダンよ
ゆったりと孤独に浸り孤独なり　吹田市　栗谷春子
稲光りしきり思案の落ちつかず
追憶は夏のものらし雲の湧く　堺市　高橋千万子
老いらくの恋胸で咲き胸で散り
尼さんのうれしい時の声おんな　島根県　堀江正朗
意地張れどスプーン握った指は老い
聞いている誰かを当てた独り言　大阪市　西森花村
テープカット外にもろもろ社長業　米子市　八木千代
川上へ流れる桃もありぬべし　唐津市　浜本ちよ
人生のからくり葬の日に明かす　島根県　木村はじめ
わが年金死ぬのが惜しいほど呉れず　岡山県　白岩文衛
鯉の目の位置から池を考える　尼崎市　春城武庫坊
菩薩の顔真似て菩薩に手を合す　岡山県　千原理恵
思慕ひとつ胸に抱いて花火聞く　和歌山市　福本英子

亡弟へ三十九を足す敗戦　川西市　野村静雄
挨拶は近所の犬とだけになる　富田林市　岩田美代
うすれゆく意欲炎天に佇ってみる　寝屋川市　岸野あやめ
驕ること勿れと撫てる孫の髪　松原市　佐藤藤子
大文字大阪娘も浴衣がけ　名古屋市　越村枯楠
ある日の亀にとても嬉しい優勝旗　米子市　菅井とも子
ゆり籠が大きく揺れて眠れない　益田市　里本たかし
過疎の街エリマキトカゲ売れ残る　寝屋川市　堀江光子
病む友の星の一途は瞬かず　唐津市　仁部四郎
少女らが声高に読む離婚記事　豊中市　田中正坊
亡妻ときた立山も空青かった　伊丹市　樫谷寿馬
薬師寺の辺りに一度住みたくて　山口県　高崎雀声
山水がきれいだけでは住みにくし　西宮市　津山冬子
窓あけて呼べば未練の声になる　富田林市　藤田泰子
カクテルの謎の甘さに酔っている　西条市　片上明水
本を読む父はきまって正座する

指宿市　渡辺伊津志
水に音あれば石には精宿る

岡山県　土居耕花
牓山が性に合うてるいごっそう

米子市　青戸田鶴
向う岸までの灯りへ蛍とぶ

大阪市　渡辺さと美
空青し叶う願いが描けるなら

愛媛県　八塚三五島
ステテコになるとがらりと粗大ごみ

和歌山市　松原寿子
恋えばなお瞳にせまる蒼い沼

弘前市　田中叶
身に覚えありて静かにたつけむり

尼崎市　春城年代
青春の真っ只中の氷菓子

島根県　小砂白汀
黄金の翼に変る朝茜

米子市　光井玲子
月だけに白い心を見せる花

今治市　月原宵明
胸張って母を誇ってはばからず

鳥取県　福田あや子
タイムトンネルに浸り切ってる里帰り

和歌山市　浦野和子
真実を曲げてはならぬ夏の雲

八尾市　山下みつる
旗振りの妻の弱音の更年期

米子市　小西雄々
息切れのバトンタッチを演技する

岡山市　井上柳五郎
半農の疲れを癒す事務机

鳥取県　新家まさる
エスケープ海辺のしゃれた喫茶店

鳥取県　さえきやえ
老いらくの夢夕顔がポンと咲く

米子市　澤田千春
押入れの帽子が街を恋しがる

米子市　林荒介
色褪せた帽子ひとつと旅を病む

尼崎市　田中晴子
ハンカチのなんと気軽く言うわかれ

和歌山市　中尾まゆみ
蹴る石もないのか在所とおくなる

島根県　堀江芳子
しばらくは妻の座ずらす川柳論

唐津市　田口虹汀
双方を丸く納めて残る悔い

鳥取市　清水一保
喧嘩にはかなわぬ相手ロボットよ

大阪市　江城修史
裏切りを振り向いて追う愚かさよ

寝屋川市　江口度
手さぐりで支持者探している憂よ

唐津市　山口高明
一刷けの子等駆けていく祇園祭

唐津市　浜本久仁於
派手を着る女がいつも幹事役

和歌山市　山川克子
九分九厘その気にさせてからのノー

愛媛県　石手武
リハビリの杖に半分血を分ける

高槻市　笠島恵美子
三ツ指をついた姿で老いた母

高知県　赤川菊野
逢うたびに生きる息吹をくれた人

唐津市　久保正敏
赴任地の祭り確かな疎外感

大阪市　兼松宏安
札束の厚みに動く生き神様

唐津市　相葉あき
補聴器も外国語には用も無く

今治市　月原つくし
角とれぬままの親父で朽ちて行く

京都市　山本規不風
頭下げて迄やることはない娘

岸和田市　古野ひで
迎え火に亡夫へ憶いの花が咲く

芦屋市　竹中綾珠
稲光り好きな女で雷を待つ

和歌山市　三谷周三
敬老の翌日下痢で医者通い

岡山県　小林妻子
履物の顔で家族が皆分かり

寝屋川市　平松かすみ
お誘いへわたし主婦ですさようなら

米子市　政岡日枝子
アドバルーンきっと足かせ外そうね

宝塚市　丸山よし津
さるすべり祖父知らぬ子のおままごと

倉吉市　奥谷弘朗
都市計画庶民に痛い税も取り

吹田市　茂見よ志子

耐えた夏菊ひたすらに秋を恋う　高槻市　田崎あき子
しあわせを躾に見つけ住む夫婦　鳴門市　八木芳水
肩書を外した男口達者　今治市　矢野佳雲
死に難く生難く曳く遍路杖　岡山市　川端柳子
夢うつつ小人が弾いていたピアノ　高槻市　久保和良
茗荷鮮女のロマン許さねば　羽曳野市　中村優
ささやかなワイフの欲を吊るチラシ　尼崎市　西村かすみ
背広着た魚屋さんをお見それし　和歌山市　神平狂虎
小細工を嫌う初秋の風である　守口市　結城君子
朝顔が八つ咲くのに寝ておれず　大阪市　大野武太
ペンキ屋ですこうし文学かじってる　西宮市　奥田みつ子
魚釣り日頃の思案捨てた顔　岡山県　松本元江
いささかな事でもめてる生ビール　平田市　久家代仕男
農政は貧打はしゃぐトマホーク　守口市　長谷川司
だんご鼻いきにはからうサングラス　仙台市　川村映輝
右顧左眄途上国にもお世辞いう　奈良市　森田カズエ
孫と行く虹よいつまでも消えないで　豊中市　奥田満女
天王寺御先祖様の連絡所　鳥取県　林瑞枝
季は熟れて性の芽生えを知る毬よ　西宮市　草刈堕駄
かずら橋ゆられて渡る何が待つ　羽曳野市　天崎只士
万歩計妻と歩けばよく動く　吹田市　西川景子
旧街道なにやら囁く木の葉すれ　和歌山市　桜井千秀
紹介はいつも愚妻と賢夫ぶり　米子市　茂理高代
羅漢さん悲しい顔は誰のため　大阪市　松尾柳右子
控え目の三ッ指にある強い性　羽咋市　三宅ろ亭
新しいネクタイ吟詠会でとちり　兵庫県　脇田米朝
よい話だけ聞く補聴器持っている　高槻市　梁川吉子
土砂ぶりも気がすんだらし星一つ　今治市　野村京子
髪型を変えて女が愛に生き　島根県　松本文子
花言葉老眼鏡をかけなおす　倉敷市　藤井春日
飄々と生きる明るさおおらかさ　吹田市　井上照子
日暮れまで洗濯続く盆の里　豊中市　上田登志実
この靴は秘密知っても黙ってる　岸和田市　原さよ子
旅鞄へ蛙のお守り入れてやる　米子市　雑賀美世
ふる里の森に昔の貌が無い　広島市　望月晴彦
生きのびた傷に地獄をかいま見る　島根県　岩田三和
幻想を盆ちょうちんにもらう夜　出雲市　板垣夢酔
年上のおんな消火器抱いている

投句先 ★〒560 豊中市中桜塚三丁目13―15 **橘高薫風**宛（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題「すし」　選者 **橘高薫風**

締切 **10月10日**（ハガキに三句以内）

投句先 大阪市東区馬場町3―43NHK大阪放送局〝さわやか広場〟係

発表 10月28日（日）ラジオ第一放送 午前11時5分から

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

柳楽鶴丸

一とすじの道より知らぬ靴のちび

野々口　ゆう也

矢印へ一寸迷うて見とうなる

古川　美津子

出世を夢見るエリート。靴のちびがくそ真面目さを表現している。

人間誰しも道草がしたくなる時期がある。ちょっと軽い表現がよい。

嘘つけぬ人で小鼻がすぐ動く

福井　桂香

真面目人間がよく現れている。このような人は口下手でむっつり型、おこったら大変。小鼻が動くがよい。

何気ない返事がかえるあたたかさ

黒田　緑

何気ない返事や会話の出来る家庭は円満だと思う。お倖せに。

ペンだこの堅さは妥協などしない

前川　千賀子

職業婦人がディスカッションすれば必ず接点がある。変な妥協をしないで。自立する女性像がよく出ている。

絵日記にやっぱりママが威張ってる

児玉　歌子

子供は正直ですね。円満な家庭が目に見えるようです。

まだ残る空地へ値踏みして通る

松川　芳子

家を持つことはサラリーマンの夢です。もったいないな、でも高いでしょうネ。

○○位か、いや××位か、色々な会話を想像すれば面白い。

門札の痕白々と過疎の里

塩田　新一郎

白々とはよい表現。一層の淋しさを誘う。

そこまでと言う労りの線をひく

渡辺　伊津志

線を引くのは大変むつかしいが、しかし、引かなくてはならない。「過ぎたるは何とか」。

矢印の先へ先へと亡母が佇つ

小林　勇人

転ばぬ先の杖か、有難いことです。

幸せも教えた姑の塩加減

高野　宵草

嫁姑はとかく仲が悪いと言われているが、仲のよい嫁姑を見ていると本当に幸せ一パイという感じがします。知らず知らずの内に沢山教えられているものです。

飛んだとて所詮夫の掌の中で

聞き流すことを覚えてよく肥り

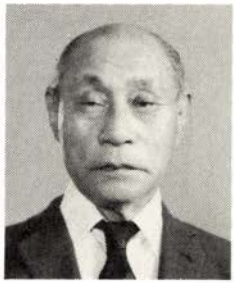
笠島　恵美子

一句目は従順な利口な奥様のようであるが二句連作として見るとイメージががらりと変って来る。どちらが本心なのかと首をかしげたくなるが、私は一句目を実感句、二句目は客観句と思いたい。

小生、この頃連歌の会で歌仙を巻いて楽しんでいるので同一作者の句を色々組立て、歌仙に巻いて見ますと素晴しいドラマに発展して行きます。楽しいものです。先日も五人程で三十六歌仙巻きました。

ビールうまし三十六歌仙巻き上げて

鶴丸



回天の夢

仁部四郎

新岡回天子（正治）は、明治四十年十一月十九日に、馬山（韓国）で生れ、昭和五十九年六月二十五日に唐津で死んだ。本籍地は淡路島にあり、唐津にはヤミ船で引揚げた。

十七歳頃から新聞等への投書を始めていたが、昭和四年頃には南鮮日報や釜山日報へ作品（小説）を寄せ、昭和七年には中央公論の懸賞小説に、朝文黎明の筆名で「監獄部屋」を応募し、丹羽文雄らと二千五百余篇の中から予選を通ったという。

川柳は、馬山で大阪毎日新聞の販売店を家業として継いだ頃から始め、「南日柳壇」の批評も担当した。「川柳塔」への参加は、引揚げ後、岡山の田村緑朗氏の仲介で「川柳雑誌」を知って以来のことである。

昭和二十四年に、唐津川柳会「唐傘」を始め、昭和二十六年には「虹川柳倶楽部」になった。川柳句集「まつうら」第一号を自ら本業の印刷業のかたわらにタイプを打って出したのは昭和三十二年である。それから昭和五十八年の第六号までの精進は、同好の士のみならず、唐津の文化を大いに刺激し、昭和五十六年十一月三日には松浦文化連盟文化賞を受けている。

この間、昭和五十五年十二月からは、唐津新聞の「唐津川柳」を主宰し、併行して毎日新聞佐賀版の柳壇も担当した。

昭和三十四年に病に倒れ、五十八年二月に再び病床の人になったが、死ぬまで川柳をつくった。

あの世見て余った夢は未だ捨てぬ

（「川柳塔」への最後の句）

この世には生きる悲しさ何がある

（辞世の句）

私の川柳の最初の先達が回天子である。おつきあいは三年あまり。情熱という言葉を目の当りにみたあの三年が私の川柳入門期の三年間であったことは、今にして思えば幸運なことであった。

何かを思い、何かを文字に託す志は、深く激しいものである。回天子の夢は、いくたびもの屈折を経験したであろう。いかなる想念で回天子を名のったかを私は知らないが、その意気の厳しさがなつかしい。

弔　句

玄海の虹を渡って男逝く　北島　醇酔
七色の橋を川柳塔へ架け　田口　虹汀
川柳を巨木に育て燃え尽きる　久保　正敏
回天の夢人間の詩となる　仁部　四郎
精根の尽き果てるまで句に生きて　田中　春子
喜寿待たず遠い旅にと梅雨に立ち　稲本みさを
亡き恩師再度の復帰勝てず逝き　白井　智子
唐津から世界へ虹をかけに行き　新岡　宣長
回天子地獄見い見い成仏し　新岡はるお

桑原喜風氏（東大阪市）より
亡妻お供養として金一封拝受
致しました。

川柳塔社

スイッチが止ったように息が切れ　向　秋子
梅雨雲の晴れるひま無き涙かな　新岡美恵子
旅に出て安らぎたかったろ回天子　森　太
執念で燃やす文化の灯は消えず　山下　勝一

新岡回天子氏を悼む

浜　本　義　美

呼吸器も何時かはぬけてかえり来ぬ　回天子

川柳塔六月号自選集欄に右の句他四句が目についた。この五句が死を目前にした悲壮極まる句で思わず慄然とさせられた。そしてちょうどその日六月二十五日、妻からの報せで他界されたことを福岡市の入院先で知った。

彼は戦後間もなく「虹川柳クラブ」を創り自ら主幹となって川柳の普及啓蒙を看板に、長い間川柳活動を続け、その努力と功績は、地元文化連盟文化賞受賞など赫々たるものがあった。

しかし彼は特異なワンマンで、句会に参加する会員の、運営へ対する意見を容れず、独裁的会の運営を強行した。そのため我々は再三意見を陳べ善処を求めたが聞き入れてはくれず、五十七年十月には、句集「まつうら」第五号の記事内容一部取消しを迫ったがこれも頑として聞かず、遂に会員全員断腸の思いで「虹川柳クラブ」を脱会、彼と袂を分ち、現在の「川柳塔からつ」を創刊、彼とは交渉が絶え遠い人となった。その後、彼は虹川柳の名の下川柳塔にも自選句を送り、地元新聞柳壇の選を続け、句集を出すなど、病をも顧みず川柳に心魂を傾けていた。そして「心不全」の重病を再発し久しく療養されていたが、遂に家族の手厚い看護の甲斐もなく「川柳」に熱い熱い思いを残しつつ不帰の客となられたのである。

虹川柳時代は彼が印刷屋であったので、プリントなども自弁で作製し、常に経済的援助を怠らず、川柳に対する情熱は益々旺んなものがあった。享年七十七歳、惜しい人を失い川柳のために悲しいことである。どうか安らかにお眠り下さい。回天子さんよ、さようなら。

白砂に佇てば五色の虹も消え　義　美

合掌。

水煙抄追加

大阪市　清水康恵

母の樹がゆれて聞こえる笛の音
缶ピース話の好きな父の顔
気まぐれな風が私について来る
母の部屋私の椅子が見当らぬ
亡父の墓きざみたばこを買いに行く

『夜市川柳』募集

第五回　「薬」　藤岡花梢選
締切　10月末日

第六回　「その後」　柳楽　鶴丸選
締切　11月末日

吟　題　課

揺れる

鈴木節子選

多少揺れましたがなどと旅馴れる　佳　雲
カーテンが揺れて昼寝の顔を撫で　麻　黄
揺れる灯に心の憂さを捨てにゆく　紀　雄
風が出て漁火揺れる父の海　正　敏
精一杯生きて満員車に揺られ　赤木和子
揺れる度噂大きく輪を拡げ　ただし
せせらぎに揺らぐ湯煙下駄の音　新一郎
未だ少し揺れる心が隅にある　勝　美
ぶらんこに揺れて日暮れの母を待ち　代仕男
核を持つ国が揺れてる恐しさ　与呂志
イヤリングちらちら揺れている打算　文　平
七夕のたとえに心揺れてくる　静　雄
揺れている本音鏡に見抜かれる　木魚文子
水中花揺れることさえ出来ませぬ　玉　恵
動揺をかくすつもりの深呼吸　赤とんぼ穂先で揺れる秋日和　房　子
陽炎が揺れて涼しき金魚売り　高　明
涼風にゆったり揺れる水墨画　寿　馬
漁火が揺れる大漁を待つ仲間　理　恵
今日の憂さ晴して揺れる縄のれん　たず子
弥次郎兵衛揺れるドラマの風の中　多賀子
吉報にやはり動揺してしまう　重　人
減反へ瑞穂の国が揺れ始め　芳　仙
写経して揺れる心を静まらせ　綾　珠
大揺れを乗り切る妻の丸い知恵　克　枝
揺れ動く心へブレーキ子がかける　千　秀
再婚の話に揺れる寡婦の胸　右　近
鍵っ子がのるブランコはよく揺れる　三　吉
吊橋が揺れふる里の風になり　笑　風
山小屋のランプが揺れてロマンめく　森脇和子
ぶらんこの揺れに童心甦える　千世子
見送ればテールランプが霧に揺れ　満津子
逢うて来た余韻の中で揺れている　寿　美
少年の進路が揺れる模擬テスト　吟　平
新風へ老舗ののれん揺れ動き　テルミ
ライバルが追い越すたびに揺れる胸　恵美子
動揺を見抜いた妻のポリグラフ　公　一
飛行機が揺れて偽名がうろたえる　静　雄
祝日の旗は平和な風に揺れ　軒太楼
家計簿を揺さぶり続け子は育ち　悟　郎
揺れ動く心は見せぬ床柱　雄　々
誤字当字揺れる心がそのままに　つくし
妻と母の谷間で揺れる月見草　道　子
決断が鏡の中で揺れている　天　彦
見解の相違に揺れるやじろべえ　景　子
男なら地球が揺れるほど怒れ　本蔭棒
葦揺れて生きる力を風に問う　婦美子

軸
小さい城築きローンに揺れている

身近

佐々木　裕選

あまりにも身近で異性と思われぬ　赤木和子
手の震え傍の女に見破られ　豊
市議選となれば身近な票を読み　軒太楼
妻の嘘身近の背にかくしてる　洛　酔
身近にはなれぬタイプの兄の嫁　サワ子
身近すぎ愛の深さが解らない　弘　朗
三分の理身近な人も知らぬ顔　堕　駄
有名になると身近な人が増え　幸　一
身近い人から本当を知らされる　つくし
泣き虫にさせる身近に母が居る　克　枝
身近みな深しあぐねた保護願い　悠　泉
どん底で知った身近な愛のムチ　和　子
身近すぎ見えぬ短所のまま育て　雅　風
ライバルを身近に感じた日のあせり　雄　々
身近には老母の知恵も置いている　博　友
福の神身近へ寄って引返し　秀　峰
身近には財布の中を先に見せ　明　水
庇う人が身近にあって反抗期　公　一
子も孫も身近な円の中に置き　たず子
退屈な人に身近く寄り付かず　与呂志
手身近に子が居て便利とは言えず　司

身近からもれる良いこと悪いこと　かすみ
正直者が身近に集って来る安堵　玉恵
子等皆んな身近に置いて愚痴を買う　多賀子
ご注意が肝心身近に青い鬼　天彦
バイブルを身近に置いて肥えられず　枯楢
想う人身近にありて葉鶏頭　宵明
身近ではないが気になるスキャンダル　文江
八起目は身近を避けて出る背広　文平
好きだから身近にすわる大男　三和
羽振りがきだして身内が名乗りだし　吟平
降ってきた火の粉の意外に大きくて　景子
文机と一番身近な広辞苑　荒介
大切にせねば身近に住む他人　克子
八ッ当り身近な茶碗飛んでいく　高明
一億の中でえらんで読む誓詞　優佳
その歳になって身近になった亡父　正坊
補聴器を身近に置いて口げんか　里風
問題が身近い事で手古摺らせ　木魚
教訓が身近すぎます父母離婚　あやめ
再婚の話に姉の座りだこ　はじめ人
身近とはスープの冷めぬ距離の事　章久
地
欲呆けて身近な倖せ摑めない　米朝
天
何時も身近に妻はアロエのように生き　寿馬
軸
身近からポロリ零れて掬われる　かすみ

若い

井上　柳五郎　選

まだ若い叱られる時ほめる時　晴彦
まだ若い若いと乗せられ使われる　満津子
まだ若い自分ひとりで思うだけ　三和
まだ若い気が再婚考える道子　枯楢
お若いと言われて馬鹿にされている　克枝
お若いと言われて飛んで溝に落ち　博友
花柄を着たい若さで嫁きおくれ　笑風
若やいで一寸噂の中で居る　三五島
一つでも若いと言うと喜ばれ　静雄
許される若さはとうに過ぎている　はじめ
正論を若い若いともみ消され　どんたく
堂々と肌見せつけている若さ　雲水
随分とお金をくった肌若い　分校
悟るには尼僧の肌の青すぎる　六十
物思い若い尼僧にあるニキび　やり場
若い気の口笛妻に叱られる　人
冗談に妻が恋びと持てと言う　返事
若いのに般若心経知っている　地
カラオケに乗せ年金が若がえり　若いから
ポケットに拳を持っている若さ　天
打たれてもよし直球で行く若さ　ゼロへ
吊橋の揺れを走って行く若さ　兼治郎
ボーナスは素っからかんという若さ　三吉
体罰の手が出る先生まだ若い　静子
あれこれと長期ローンで買う若さ　圭介
若者の大志を案じる年となり　弘朗
若い日の大志儚なくスラムの夜　柳影
若い頃苦学したのに出世せず　冬子
疑問符を叩き正論を吐く若さ　京子
若人の船は真直ぐしか漕がぬ　寿馬
伝言板大きくはみ出ている若さ　宵明
伝言板若さ匂わす丸い文字　よし津
砲煙の彼方に消えて若い日々　新一郎
戦争に埋めた若さに悔い残す　倫子
メフィストよ若さを売ってくれますか　みつ子
ロボットに横どりされている若さ　カズエ
若禿でシルバーシートに招じられ　七面山
教室でガム噛んでいる若いママ　高明
片足は何時も若さにかけている　章久
佳
雲水の若い瞳にある悟り　静歩
分校の若い教師の眼がもえる　明水
六十の手習い水着を干してます　たず子
水色に少女の恋はすけている　〆女
やり場ない若い心を攻める核　与呂志
人
返事する声と一緒に来る若さ　伊津志
地
若いから矢印の無い道も行く　正敏
天
ゼロへ戻る勇気を持っている若さ　赤木和子

初歩教室

題 ― 計 算 ―

本田恵二朗

市場籠計算ばかりの品を入れ　つや子
（市場籠計算通りに詰め込まれ）
平凡な積木崩さず足していく　同
（平凡な積木コツコツ足し続け）
年金と余命の計算くいちがい　サワ子
計算に強い女がラッパ吹く　同
子の笑顔計算済のねだり物　同
（子の笑顔計算したげなねだり振り）
（計算済らしい笑顔で子がねだる）
算盤は知らない指の計算器　よし津
（算盤を知らぬ指です計算器）
特売場女計算忘れてる　同
（特売場女は計算忘れ果て）
（パーゲンセール計算忘れるのも女）
（バーゲンが女に計算忘れさせ）
計算器頭より指先が冴え　キ　ミ
（頭より指が冴えてる計算器）
計算が外れ愚妻と共白髪　同
（計算が外れたまんま共白髪）
オリンピック計算つぎつぎ崩れ去り　ちよ
（メダルへの計算崩した五輪の灯）
社運伸び計算通りでほくそ笑み　同
（計算通り伸びた社運へほくそ笑み）
身についた打算で友を計算する　たかし
電卓で計算すると赤になる　同
（電卓で計算すれば赤くなる）
計算通りにゆけば戦争起らない　あや子
計算違いで浮世の底を這い続け　同
（計算違い浮世の底を這わされる）
計算は出来ても死金使う人　理恵
（計算高いくせに死金よく使い）
電算器のおかげで暗算出来ぬ子ら　同
（電算器暗算知らぬ子に育て）
坊さんも計算がつく緋の衣　章久
（計算がちゃんとしてある緋の衣）
世の中は計算足って銭足らず　同
（世のならい計算足って銭足らず）
借るときは利息の計算つい忘れ　勝美
計算に弱くて体よく太り　同
（計算に弱い男でよく太り）
計算器買って算盤遠ざかり　小愛
（計算器買えば算盤カビがはえ）
点数の差に一喜一憂する選手　同
（一喜一憂体操選手点数え）
計算のうとい分だけ勘が冴え　吉子
レジ計算きれいな指がおどるよに　同
（白魚が飛んで跳ねてるレジ計算）
計算器ガリガリチンと割っている　やすお
ロボットの方が計算間違えず　同

川柳塔社常任理事会（9月3日）

出席者＝栞・薫風・彤水・紫香・太茂津・敏与呂志・萬的・鬼遊・雀踊子・岳人・凡九郎重人・寿馬・笛生・天笑・史好

〈議事並に報告事項〉

▽9月2日の西日本川柳大会は出席三百名の盛会だったと薫風、鬼遊両氏から報告。

▽高島屋ローズカレッジが10月下旬から堺東で川柳教室を開講、薫風・天笑両氏が交替で講師を担当することになった。

▽来年は西尾栞主幹の喜寿・金婚・句碑建立5周年に当り、記念行事開催につき了承。準備にとりかかることとする。

▽北川民子さん（島根県）の同人推薦了承。

▽常任理事会終了後、59年度二賞選考に入り別稿の如く路郎賞、川柳塔賞が決定した。（史）

■**10月**の常任理事会は**1日**（月）

（ロボットの方が計算あやまたず）
マイホーム計算通りには行かず　同
（マイホーム計算通りにはかどらず）
電卓に押されそろばん隅にいる　山久
（電卓に押されそろばんちぢこまり）
計算の通りにゆかぬローカル線　同
（机上計算あざ笑ってるローカル線）
頑固ですパチリパチリとはじいてる　みつる
（父頑固パチリパチリと五ツ玉）
計算器指太すぎて役立たず　同
（指が太過ぎると計算器に言われ）
計算通りいったためしのないくらし　紀久子
一千万溜ってた筈の胸算用　同
計算ずくめで育て似て来たロボットに　同
（計算ずくめで育てロボットめいてくる）
金勘定させたら誰れにも負けません　同
（金勘定なら人後には落ちません）
金を積み愛の深さは崩せない　寿子
（電算器で愛の深さは計れない）
噂だけの恋に計算などいらぬ　同
計算する素顔の裏で舌を出す　同
計算をし過ぎて花弁堕ちてゆく　同
計算に入れてた人に断られ　千代女
うちのパパ計算だけは几帳面　同
少年の夢も組み込む計算器　幸泉
計算を狂わす夜の妻の顔　同
お銚子の底を計算する女将　豊太
計算を見越して廻るポチ袋　同
計算の出来ぬ命を長らえる　久子
無情にも赤字ですよと計算器　同
（また赤字ですよと計算器は無情）
老人病計算された食足らず　芳水
計算が先に済んでる恋果てる　同
計算はマネージャー委せとスターの弁　保夫
ベテランのハイミスに計算委せきり　同
計算をするとこわれる人の愛　克子
計算の弱い男にある温み　同
計算をしいしい踊る背の指輪　同
計算通りゆけばこの世はパラダイス　實
計算に無かった風のホームラン　同
計算の結果に学んであきんどう　同
時の利という計算に味方され　忠広
計算に強い女の薄笑い　同
計算が外れて不貞寝する男　同
好きだから計算しないことにする　武太
計算をすると赤字怖くなる　同
商談や頭の中の計算器　同
家計簿の計算あきずやっている　同
器量良し計算高い鼻になり　歌子
ふところをちゃんと計算してた敵　同
結構な膳で計算された席　同
人間を馬鹿にしてゆく計算器　同
計算が合ってますなと腹を指し　兼治郎
酔ってても金の計算だけ確か　同
計算をして子作りをする若さ　同
計算になかった交通事故に遭い　同

第8回 寝屋川市民川柳大会

日時　**昭和59年11月3日**（土）13時
会場　寝屋川市立総合センター4階
京阪電車寝屋川駅下車、バスターミナル③乗場より総合センター前下車
柳話　礒野いさむ氏
兼題　「童話」　江口　度選
「散歩」　井上　信子選
「伸びる」　小林　敬山選
「怪物」　大路　美幸選
「冴える」　岩本雀踊子選
「ラブソング」　森中恵美子選
「泣き笑い」　橘高　薫風選
各題2句・締切午後2時
席題はなし

題―**相談**―　**10月10日締切**（12月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
㊥七一一　**本田恵二朗**

柳界展望

集録・板尾岳人

日・59年10月28日（日）
正午開場
所・尼崎市西御園町・阪神尼崎駅南側西へ3分
講演・「川柳と古銭」
中村　東角氏
兼題
「煙」　かなもりかず枝選
「儲け」森田栄一選
「人情」石井冬魚選
「沈む」鳥本泰選
★川柳はこだて・四〇〇号記念誌上大会
課題（別紙各記名三句詠）
空　想　白井花戦選
さわやか　野村圭佑選
鵜呑み　越郷黙朗選
うってつけ　長沢としを選
お見送りした。合掌手軽西村知葉選
★兵庫県芸術文化祭県民川柳大会発表会
投句料　五百円
賞　一位より十位迄呈賞
投句締切・10月30日着便
発表　川柳はこだて四百号
投句先・函館市青柳町十八
函館川柳社
★九月九日井上剣花坊五十年忌句会が句碑の建つ鎌倉の名刹建長寺で開催。
★黒川紫香さんの喜寿を祝う句会が尼崎公民館川柳グループによって開催。代表が記念品を贈り「米寿、白寿まで長生きして、いい川柳を作ってください」と励ました。
★中島生々庵名誉会長の三男孝之氏は8月4日ホテルプラザで挙式、花嫁純子さんを迎えられた。また9月15日には、お孫さんの佐和子さんが東京で結婚式を挙げられて二重のおよろこびだった。
★川柳京かがみの会主催の川柳忌の集いが9月24日京都蓮金山・華光寺にて福永清造川柳碑建立除幕供養句会が開催された。
合わす掌の
中から幸せが生まれ
★番傘わかくさ川柳会では同人総会において次の新役員を決定。
（会長）亀山恭太、（副会長）片山湖風・志水浩一郎

▽お便り△

★青森で甲吉さんに会い、連絡船に乗るのが目的で、函館に足を伸ばす。往路摩周丸、帰路十和丸といった代表的なのに乗れて良かった。竜飛岬も見えた。日の永さ半島の山続きつつ
（橘高薫風）

▽句会案内△

■南海電鉄川柳会
日・10月18日（木）夕6時
所・南海会館・地下食堂
題＝非常口・満期・あいさつ

■南大阪川柳会
日・10月19日（金）夕6時
所・寺田町・高松会館
題＝迫力・独り・風船
減らず口

■もくせい川柳会
日・10月15日（月）13時半
所・豊中市立中央公民館
題＝川・煙・自由吟

■東大阪川柳同好会
日・10月20日（土）夕6時
所・東大阪市社会教育センター
題＝まかす・ふんわり
ねらう・まがる

■駒つなぎ川柳会
日・10月22日（月）夕6時
所・寺田町・高松会館
題＝ポイント・沿線・剃刀
年長

■菜の花句会
日・10月10日（水）夕6時
所・八尾神社内西郷会館
題＝絵・浄土・出口・相談

■堺句会
日・10月16日（火）夕6時
所・堺青少年センター
題＝安らぎ・空気・灯・芋

■富柳会
日・10月18日（木）13時
所・富田林市中央公民館
題＝味方・港・出口

新同人紹介

北川民子
―薫風・白汀・清泉・芳枝推薦

本社九月句会

会場　なにわ会館
七日　午後六時

夕方から雨模様、前日までの猛暑がウソのように気温がぐんと下がり、冷房のきいた会場は半袖では肌寒い。

今月のおはなしは西田柳宏子氏。生々庵名誉会長をお訪ねした近況報告に始まり、近ごろ元警察官の連続射殺事件など話題に事欠かない昨今だが、こうした世相のゆがみは、その根底に教育の問題があるのではないか。親子の断絶が言われながら子供部屋をつくってやるという風潮。昔は子供部屋なんか普通の家庭ではなかった。これでは子供の教育を満足に出来るはずはない。

今の子供は塾通いで遊ぶ時間がない。遊ぶ時間があっても遊び方を知らない。昔はガキ大将がいて、こいつがいろんな遊び方を教えてくれたものであるが、ガキ大将という存在が今はなくなっている。

カギのかかった子供部屋から子供を解放しもっと自由に遊べる時間をつくってやってほしい、と熱の入った教育論を展開された。

今月の月間賞は田中隆二氏（羽曳野市）が獲得された。

（史）

（受付―与呂志・重人）
（進行―天笑）（記録―健司・射月芳）

出席者―天笑・与呂志・春蘭・只士・狸村・千代三・柳伸・勝美・三男・凡九郎・雀踊子・薫風・岳人・隆二・水客・健司・千秀・紫香・白渓子・覚然坊・寿美・英子・景子・喜風・トメ子・佳秋・節子・智子・重人・章久・武庫坊・年代・悦郎・はつ絵・雀露・古都路・柳宏子・史好・萬的・晴風・あいき・山久・勝晴・射月芳・度・白兎・鬼遊・泰子・洋敏・敏・冬葉・久子・登志代・太茂津・シマ子・三十四・美代子・彤水・奈々・正坊・頂留子・楓楽・小路・幸生・笛生・文秋・みつ子・寿子・月子・規不風・吸江

席題「ラーメン」　**内海幸生選**

即席のラーメン続く隙間風　健司
ひとり旅の気軽さラーメン屋へはいり　萬的
ラーメン屋窓の明りへ吹くラッパ　千秀
汚ないがうまいラーメン食わす店　紫香
風邪の床ラーメン運ぶ息子の手　みつ子
ラーメン党と言うたが因果新世帯　蕉露
即席ラーメンいつでも祖母に叱られる　智子
脱サラのチャルメラ気恥しそにひびき　頂留子
ラーメン屋ネオンへ遊んだ客を待ち　白渓子
ラーメンが延びるあたりで運が逃げ　寿子
ラーメンがこんなにうまいアルバイト　重人
目くばせでチャーシュー一つまけてくれ　英子
即席ラーメン妻の情がよくわかる　雀踊子
チャルメラをテープで流すラーメン屋　萬的
妻病んで何とラーメン味気ない　柳宏子
一徹を通しラーメン食わぬ父　太茂津
妥協するつもりラーメン共に食う　悦郎
すすきのでラーメン食べる予定組む　美代子
料亭でラーメンねだる子にあわて　敏
ラーメンで二人の恋が歩き初め　小路
二死満塁一瞬ラーメンのコマーシャル　吸江
チャルメラの辻はふたりのわかれ道　年代
即席ラーメンひと匙そえる母の味　寿美
カップラーメン少年心開かない　智子
ラーメンを食べてロビーで待ち合せ　天笑
人間不信ラーメンが冷めている　水客
寝たはずの子が起きて来るラーメン屋　シマ子
ラーメンを食べて大志を口にする　智子
ラーメンの笛人生の灯のゆらぎ　凡九郎
西部警察ラーメンの出前くる　千代三
ラーメンで緊張を解く捜査二課　柳伸
ラーメンの足らずビタミン飲んでおく　度
社長室昼ラーメンとメモが来る　三十四
デートした最初はラーメン喰っただけ　三男
ラーメン屋男の愚痴を聞きながら　岳人
病院を抜けてラーメンやを探す　鬼遊
ラーメンのうまい店なら知っている　鬼遊

ラーメンが好きやからあの人だまってま　小路
妻多忙即席ラーメン切らさない　楓楽
ラーメンが二つ小さな幸せで　水客
地の果てへラーメン提げた商社マン　幸生

席題「抱く」　荻田千代三選

仲直りしたがしこりを抱いている　文秋
ランドセルもう夢を抱く親のエゴ　隆二
疑問を抱くとひやかな風にあう　度
少年の肩を抱いたら陽のにおい　智子
抱き寄せるまでは神秘な雪おんな　柳伸
顔のねじみんな外して孫を抱く　楓楽
疑いを抱いてひびを深くする　吸江
抱いて逝くつもり通帳放さない　三男
奔放に生きて女は愛を抱く　只士
抱き心地良い方をとるぬいぐるみ　英子
抱いてから危険と知ったバラの棘　英子
骨壺をしっかり抱いた不幸者　佳秋
まだ夢を抱いてる振り子止らない　悦郎
ふん切りのつかぬ女をそっと抱く　武庫坊
少年が大志を抱く地平線　寿美
秘密抱く女コロコロよく笑い　月子
自転車を睨んで犬を抱きあげる　鬼遊
花束を抱くと女は油断する　月子
疑問いっぱい抱いて大人になりました　智子
星月夜淡い期待を抱く外湯　蕉露
抱いている心の玉の彩と寝る　凡九郎
争いを起す女が火種抱く　悦郎
抱きしめて呼吸をとめた甘い罠　寿子
抱かれて罪は承知の道を選り　寿子
掌中の珠抱きしめて叛かれて　重人
白旗を抱いて女の貌になる　柳伸
他人行儀になって疑いを抱いている　白兎
哀しみの解る女が過去を抱く　雀踊子
名乗れない母に抱きたい子がひとり　英子
孫の抱く人形悲しい詩を持つ　只士
希望抱く船出へ鷗低く飛ぶ　萬的
埋れ火を抱いて残り火匂わせる　吸江
大望を抱いて鈍牛のごと老いる　勝晴
優勝の瞬間身近な人を抱く　規不風
再婚に燃える火種を抱く女　悦郎
親の夢抱いて子供の灯がともる　山久
抱き上げて祭囃子の方を向く　武庫坊
抱いていた夢がくずれた日の誤算　正坊
言いたいこと言って不満を抱いている　水客
悲しみを抱いて桟橋まで戻り　笛生
夢二集抱くとリボンがして見たい　千代三

兼題「屋根」　西出楓楽選

傾いた屋根に家紋がすがりつき　滋雀
鬼瓦借金取りが気に入らず　妻子
仏とも鬼とも一つ屋根の下　幸生
屋根瓦一枚槐樹の切符買い　洋敏
プライドを守りつづける屋根の反り　太茂津
トタン屋根雨の楽譜はドラムの音　古都路
裏町の屋根にも太陽いっぱいに　みつ子
屋根裏の貧乏神が出て行かぬ　赤木和子
寺の屋根鳩も雀もランデブー　敏
ペンペン草屋根の歴史がドラマめき　千秀
中流意識カラフルな軽い屋根　重人
藁屋根にごん太の行方問うてみる　はつ絵
屋根まではまだ届いてもないローン　小路
さざ波は覚悟の一つ屋根の下　小路
低い屋根連ねて路地の人情味　射月芳
アンテナとにらみあってる鬼瓦　度
山ろくに散らばる屋根にノスタルジャー　勝晴
由緒ある屋根は半分朽ちたまま　紫香
芋のつる食べて夢みた赤い屋根　隆二
瓦屋根ビルの谷間で意地通す　隆二
屋根と屋根重なる町が性に合い　寿美
盛り場の屋根はネオンの媚に馴れ　白渓子
ペンペン草屋根の居心地よくはない　文秋
新築へ老父の譲らぬ瓦屋根　英子

59年本社句会全出席者（9月現在）

福本英子・飯田悦郎・北勝美・桑原喜風
山本規不風・笠原吸江・橘高薫風・玉置
重人・黒川紫香・松下蕉露・岩本雀踊子
長谷川春蘭・正本水客・板尾岳人・天崎
只士・野村太茂津・河内天笑・藤田頂留
子・稲葉冬葉・春城年代・小出智子・高
橋白兎・松原寿子・西出楓楽・神谷凡九
郎・阿萬萬的・堀端三男・奥田みつ子・
春城武庫坊・児島与呂志・津守柳伸・西
田柳宏子・芳地狸村・江口度（34名）

三百年老舗の屋根が重すぎる　只士
茜雲静かに屋根も明日を待つ　凡九郎
一つ屋根長屋に残る人情味　シマ子
明け渡す城とは知らぬ屋根瓦　健司
因習の屋根の重さに耐えかねる　形水
風下に情けを分かつ低い屋根　規不風
犬小屋の屋根ぐらいなら造れます　智子
緑青が重みつけてる城の屋根　勝美
屋根瓦一枚一枚にも父の汗　節子
鬼瓦の牙へ三日月引っかかり　あいき
屋根のシビ大仏殿の道しるべ　古都路
退職金で建てた屋根へ書いとこう　三男
屋根伝うてきてもへチマに罪はない　英子
トタン屋根帰りが遅い雨の音　雀踊子
天平の甍落日引き寄せる　萬的
父が逝き屋根のかしいだ音を聞く　楓楽

兼題「そこそこ」　塩満敏選

挨拶もそこそこ領収書書き始め　堕駄
そこそこな住まい地球のしわに建て　妻子
そこそこにあしらうそこそこにからまれる　笛生
宿題をそこそこにさす蟬が鳴き　度
夕飯もそこそこテレビは巨人阪神戦　吸江
遅刻やそ朝餉そこそこ突っ走る　晴風
そこそこといつまで背中掻かす気か　千秀
そこそこの願いなら聞く閻魔さま　はつ絵
そこそこの値幅で売りにふみきった　武庫坊
そこそこに妬いてる妻がいじらしい　千代三
そこそこの暮しを保険屋見逃さず　萬的
茄子の苗そこそこ植れて秋になる　鬼遊
二回目の結婚式はそこそこに　勝晴
そこそこの値段がついた小犬の瞳　年代
そこそこが秀才になる披露宴　幸生
そこそこにしてよ真夏の高気圧　度
そこそこに聞くと噂はおもしろい　重人
千円そこそこでどんなおかずが買えますか　吸江
そこそこの利息が恐い顔になり　鬼遊
そこそこに帳尻合うた岩田帯　美代子
そこそこにして置きなと急かされる　覚然坊
家事育児そこそこ女翔んでいる　英子
里帰りそこそこにして追い立てる　規不風
そこそこの願い神様聞き漏らす　喜風
そこそこの生活が欲しい労働歌　射月芳
そこそこに骨を抜かれてひざ枕　寿子
灘高でそこそこにいるたのもしさ　洋敏
そこそこの値札に壺は欠けていた　岳人
言い訳はそこそこにして出る女　与呂志
そこそこに咲いても花は燃えている　悦郎
そこそこに暮す夫婦のかぞえ唄　悦郎
四十そこそこお尻はまだ青い　智子
天国へそこそこ行ける善を積む　赤木和子
乗りかかった舟そこそこで降りられぬ　楓楽
そこそこにおきばりやすと先に往に　柳宏子
そこそこに聞いているのは左耳　雀踊子
そこそこに酒も煙草もやってます　英子
五割引してもそこそこ儲けてる　千代三
そこそこの夫婦で今年真珠婚　正坊
軍備費よそこそこにしてくれないか　敏

川柳塔まつえ
復刊15周年記念川柳大会

日時　昭和59年10月14日(日)　午前10時開場
会場　松江市殿町　むらくも会館
宿題　「丸」　橘高　薫風選
「与党」　大森風来子選
「美人」　中尾　藻介選
「小咄」　河内　天笑選
「鈴」　八木　千代選
「吉報」　津川　紫吻選
「紅白」　尼　緑之助選
各題二句。当日席題3題
会費　二、五〇〇円(小宴を含む)
欠席投句は投句料五〇〇円を添え10月7日(必着)までに左記へお送り下さい。
投句先　〒690　松江市雑賀町一六八六
恒松叮紅方
川柳塔まつえ

兼題「腰」　高杉鬼遊選

腰のないウドンをさます扇風機　正次
セールスが脈ありと見て腰を据え　幸一
爆弾を抱えた腰が麦を打つ　武庫坊
牾山へ行く足腰を鍛えとく　楓楽
腰掛けのつもりかOL強いこと　美代子
腰抜かすほどのよいことないものか　吸江
観音像腰の丸味にある気品　みつ子
セクシーな腰に浮かれているどじょう　寿子
丸腰の男に一途な眉がある　滋雀
阿波生れさすがと思う腰を振り　三十四
おばはんのジャンボな腰で割りこまれ　敏
やんわりと話の腰を折りにくる　英子
フラダンス腰の動きが不思議なり　与呂志
バスト・ウエスト・ヒップ同じサイズの服探す　泰子
ユーモアにやや近くなる妻の腰　智子
腰上げてからの話が本音です　三男
古のれん腰の低さを子にゆずり　勝美
どんぐりの腰浮いたまま冬になる　はつ絵
忘れてはならぬ選挙の低い腰　山久
キューピーの腰に貼ってるサロンパス　赤木和子
万歩計腰の曲らぬ人が提げ　白渓子
したたかに生きる女の二枚腰　隆二
京言葉腰の線まで様になる　紫香
囚人の眼が離れない腰の鍵　柳伸
腰の線気になり出したレオタード　三男
内職へ隣の愚痴が腰を据え　晴風
軽い返事で腰は坐っている女房　シマ子
杉サマと呼ぶ時だけは伸びる腰　健司
腰のない筆で商売用の文字　柳宏子
ジャズダンス効きめが見えぬ妻の腰　寿美
道化師の腰のふらつく時素顔　雀踊子
ああ中年腰の線から崩れ出し　隆二
モンロー忌甘いあまーい男たち　英子
孵化をする蝶の健気な二枚腰　幸生
妻の腰だんだん重くなってくる　智子
パチンコの時は落つく腰になり　千代三
宝もの背負うと腰がしゃんとする　規不風
腰軽う動くと安く見られそう　文秋
これはなにか裏があるぞ低い腰　健司
腰すえて天に唾すること思う　水客
おんなへは腰の拳銃火をふかず　鬼遊

兼題「位置」　阿萬萬的選

無派閥のはっきりしない位置にいる　正次
中流の位置の自覚のアンケート　どんたく
その位置になればなったで人変る　喨駄
すんなりと受けたが位置の重さ知る　庸佑
定位置に女房が居らぬ虚ろな日　幸一
流されて落ちつく位置のない小石　滋雀
四面楚歌動けぬ位置と知る悲哀　軒太楼
抜擢の位置でストレス溜り出す　形水
位置変えて女を誘う花言葉　悦郎
テスト中机の位置をかえただけ　健司
会長の位置へすんなり天下り　晴風
秋風が女の位置を変えさせる　只士
昼と夜の位置変えてやる植木鉢　泰子
きっちりと明日へ揃えた靴の位置　笛生
粗大ゴミ僕には余る位置がない　千代三
ネックレス微妙な位置で揺れている　史好
エリートの位置には遠く積むつみ木　寿子
四捨五入切り捨てられる位置に僕　三男
意地悪なバンカー越えのピンの位置　章久
禅問答めく石庭の石の位置　楓楽
拿捕された位置で日本の弱さ知り　洋敏
台所天ぷら鍋の位置があり　岳人
どの位置で見ても絵になる異人館　赤木和子
新築に下駄箱の位置ふさがりて　冬葉
人形の位置をずらしに友が来る　幸生
海のように夫婦の位置が深くなる　水客
胎動をやさしく包む帯の位置　吸江
位置かえて見る盆栽捨てられず　節子
汗入れる位置で野仏のありがたさ　太茂津
変な夢　枕の位置がズレていた　史好
二枚目の役は持たない妻の位置　笛生
日本の位置がずれてる世界地図　英子
妻の位置家紋を負うて意識する　美代子
星空に人間の位置低いこと　みつ子
守備位置はちゃんとこしらえてある妻で　小路
借り物の言葉の位置を埋め惑い　太茂津
置く位置によって絵になる石である　隆二
定位置に父の軍手を干す安堵　重人
石仏かわらぬ位置にある安堵　健司
幸せを感じる位置に妻がいる　隆二
その位置がここと教える石の庭　萬的

（清記・楓楽）

締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
整理・板尾岳人

川柳ペン皿　鈴木　節子報

夕立へあんなに早く走られた　勝子
再会の機会となった俄雨　満智子
夕立が晴れて父子の声帰る　年代
はりつめた糸夕立が切って行き　田鶴子
夕立に思わぬ人に傘を貸し　いく子
夕立がやむのも待てず濡れて行く　好子
探しあぐねて夕立に遇っている　いくの
夕立へ天神祭りひとやすみ　智子
夕立が止んではなしがまた続き　節子

富柳会　藤田　泰子報

想い出の人よみがえる遠花火　金太
青春の夢を雑魚寝で温める　喜酔
正直な男で長い傘を持つ　岳人
あまりにもその正直が哀しすぎ　美代
初めての雑魚寝ながいながい夜　花楢
正直でない鏡がひとつほしくなり　森子
花火席クライマックス子は眠り　美緒
散髪屋で命あずけた顔で寝る　富久一
正直に何んでも言える母がおり　治郎
雑魚寝では収まりそうにない空気　文治
遠花火すぐに忘れる男の名　冬二
遠花火過去のロマンがよみがえる　雑久子
正直で融通きかぬは父ゆずり　千代女
散髪屋丸刈と聞いて念を押し　勇
雑魚寝して浮世話の種つきず　幸一
剃刀の切れ味試す散髪屋　憲太郎
正直が取り柄で人生の片隅に　美津子
正直が採用された丁稚どん　喜代
散髪はしない付が逃げるから　山久
山小屋の雑魚寝を守る山の神　弘生
正直な男で夢の続き見る　狂虎
正直に馬鹿をつけたり外したり　章久
二DKの雑魚寝で太くなる絆　優
胸底に花火を抱いている女　泰子

YFC川柳会　人見　翠記報

梅雨晴を笹舟浮べ無にかえる　房子
蘭の根を分ければ梅雨にぬれた土　絹子
梅雨晴に働きものは洗濯機　忍
紫にぬれて絵になる菖蒲園　よし津
雨もよしと開き直って読書する　紅葉
日落ちて一枚羽織る菜種梅雨　節子
五条袈裟梅雨の衣桁にかけてあり　幸太郎
挨拶は毛布を出した梅雨の冷え　翠記
梅雨空に重い返事を書き終える　たず子

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

西雲明日に誓いをたてている　亜成
限られた事しか出来ぬ傘の下　聖地
洗濯が雲のあいまを盗みとり　亜也子
雲が出て気象庁手を合わせ　安竹
一滴も呑めない家に洋酒棚　博泉
雲晴れて心も晴れて朝を出る　秀泉
持つ持たぬ傘一本でもめる朝　てまり
昼休み雲を眺めて過去にいる　一扇
雲海に富士の頭が浮いている　形水
落ちて行く女に洋酒の口あたり　入仙

川柳ねやがわ　高田　博泉報

つめを切る母の手だけがなつかしく　撰子
待てど来ぬ人に紫陽花ぬれている　たず子
吉報がタブルで届くよい日柄　司
一人臥すあの日々悔いる物思い　静江
絵を書いてその絵の中に日が昇る　柳歩
マネキンが笑ったままで倒産し　求芽
ボルテージあがって逸話また一つ　鉱平
籠の鳥も退屈そうに昼下り　朴的
のどぼとけ観音様のループタイ　勝美
かたづいた新居へ春の風通す　よしひろ
逆しまにマネキン人形かつがれて　一菁
むきむきと力が出るとこわいなあ　正彦
親と子の視線が違う肩車　こう礼
政治家の濁り吸ってる赤絨毯　幹子
濁り酒振舞う山里温み沁む　佳子
新居には馴染まぬ花器が多過ぎる　春子
自己満足してる豌豆のみどり色　君子
新居から夜明けが早くなりました　まさお
タテマエの裏に濁った渦がある　あやめ
手を振って心を里へ置いて来る　かすみ
不景気へどなたが住んでいる新居　山久
濁りゆく心がこわく写経する　光子
昼下りこの一刻は妻のもの　シマ子
昼下り濃い目のお茶がほしくなる　てまり
欠点がとてもかわいいお姫様　冬葉
嘘作る話は何処か抜けている　一途

雨降りにいそいそゴルフに行く夫　博　泉
昼下り植木が水を欲しそうに　まさ乃
不和続く家庭へ金魚の水濁る　亜　成
川濁り河童見合いで嘘をつく　勝　一
濁れども澄む時があるきっとある　一　笑
辞書にない言葉が通う故郷の母　晴　風
逢えぬ日の時間空しい昼下り　明　代
入梅に忘れた傘を思い出し　亜也子
昼下り儲かりまっせという電話　亜　鈍
欲のないエリマキトカゲただ走る　英壬子
倒産の日に社長の新居出来上がり　度
昼下りむこうもここも又麦茶
朝刊を配る濁りの消えた街　小　路
娘の呉れた新居で背伸びする孤老　鼓　城
夜を曳く屋台を洗う昼下り　覚然坊

倉吉川柳会　**渡辺菩句報**

来年の盆は仏で来るのかも　紫　香
里帰り敷居跨げば眠くなる　しづ江
里帰り三日天下の明智様　あや子
客で来た娘は喰べて寝て寝ては喰べ　寿　朗
水いらず星を数えに外へ出る　満　春
許されてケロリとしてる孫の茶目　康　子
送り火の河面にゆらぐ向う岸　碧　水
句読点忘れた客の長ばなし　律　子
方言にとけて甘える母の海　みなと
代々ののれんが客を離さない　松　女
盆踊りの太鼓を遠く二人いる　とめ子
嫁きし娘も祭りは客の顔で来る　紫　泉
突然の客に慌てる家の神　民　子
盆灯籠貰うは虚礼とは言わず　秋　人
大臣が四年に一度帰郷する　柳　風
招かざる客が掘り出す不発弾　観　洋
親の樹を伐ってしまった子を許せ　まさる
国体の客へ道路が作られる　ゆり子
煩悩を捨てる水辺に月といる　文　子
ふるさとの水がこんなにうまい朝　やえ
水つかう音で女の面が割れる　秋　女
父のいない実家でペンペン草が待つ　石花菜
毒舌の客からもらう良い薬　瑞　枝
客として潜る生家の庇かな　御　前
彦星を一夜の客として送る　荒　介
許す気の一度は雷様になる　千　代
許されるなら長生きがしてみたい　独　歩

川柳しんぐう　**川上渓水報**

冗談も言えて和んできた会議　菩　句
平和にも飽きたと増やす防衛費　大　輪
和を叫ぶ裏でせっせと兵器売り　渓　水
亭主折れ我家の平和保たれる　勇　太
夫婦共和服のんびり利子で食い　正　
腹這いでマナーの原稿書いている　十　郎
原稿紙詰める言葉を練り上げる　正　博
原稿に正論通らぬ朱が入る　まさ子
黒白に書き替えてある原稿紙　だるま
筆が立てば直訴がしたい原稿紙　武庫坊
倦怠期ペンキで心塗り替える　里　美
思い出も一緒にペンキ塗り替える　狂　虎
はげ落ちるペンキそろそろ倦怠期　柳宏子
幸せな暮しへペンキ塗り替える　富　子
妻の色に合わすペンキは売ってない　山　久
窓口へ採点に来た親子連れ　よしほ
人生の採点逝ってから決り　花　泉
採点のミスへ母親飛んでくる　三千代
採点のミスに運命狂わされ　金　太
愛の視野互いに満点つけて居る　武　雄

わかあゆ川柳会　**小砂白汀報**

大きな木大きな根まわし考える　すみれ
便り出したとたんに返事待ち　敏　明
赤い布ふって純情派をだまし　朝　子
愛情を注いで非行の芽をつぶし　三　和
三年の孤独を梅酒の色に出す　秀　穂
電話口返事のたびにおじぎする　輝　水
親爺よりゆうべの雨がよく効いた　世　似
もう返事など要らない仲となり　ヒデ子
そして両肩を濡らして逢いにいく　清　泉
雨上り虹四次元へ橋を架け　はるみ
鈴蘭へ雨ころころと雨の詩　歳　栄
返事などくれぬが母は裏切らぬ　民　子
爽やかな返事くださる朝の道　美　栄
雨足がけむりを立てる逃げようか　鈴　江

川柳わかやま　**堀端三男報**

花火師へ闇が味方になってゆく　白　汀
雰囲気に合う粧いでうち解ける　裕　美
最高に粧い妻の座をもらう　正　子
粧いの虚無を鏡に見透かされ　英　子
化粧して寡婦の背を刺す後指　萬　的
妻らしい粧い親の目にまぶし　忠　雄
粧うて見ても所詮は蛙の子　光　代
粧った母さん急に優しなり　豊　太
爆弾にどんな化粧をしてみても　信　子
粧いを乱さず扇子の風送る　狂　虎
天国へ往くなら今だ虹の門　天　彦
門に止まると生臭い蟬の声　武　雄
門限が無いので早く帰ろうか　道　夫
太茂津

あるときは過去から逃げる仁王門　緑良
押せば開く門で仔犬がじゃれに来る　公子
耳打ちをしたらその門開けときま　凡九郎
罪一つ女人高野の門に捨て　信秋
校門を出る時一線だったはず　正博
門外漢の意見が妙に的を射る　柳宏子
軍門に下る爽やかなる握手　白光子
衝撃を与えて見よう古時計　和子
与えるものないから笑顔与えとく　稚代
ひと赦す平手打ちなら与えよう　幸
与えては先を見落す親の馬鹿　きみ
与え過ぎあの子もこの子もやせている　照子
さり気なく与えた助言効いてくる　紫香
青空を描いた絵本を与えよう　芳朗
この道は神が与えてくれた道　克子
お返しを当に与える味気無さ　千寿子
遠花火それは女のもだえかも　栄美子
遠花火ふと甦る胸の鈴　紀美女
なんとなく肩のあたりがさむい門　久子
粧えどころ貧しきことば吐く　三男

京都塔の会

空蟬を楓に残し夏を鳴く　美穂
虫食いの廊下がきしむ臨池亭　笑女
風わたり鯉とゆれてる夏の雲　葉子
黒いのが正統派かも池の鯉　弘生
樹々みどり人間の嘘はげやすし　麗水
枳殻邸の襖の銀に蠅動く　紅陽
夏草を背負う見事な大銀杏　鬼遊
キャラバンの夜はらくだもよく眠り　冬子
砂嵐らくだのこぶは失語症　はつ絵
人間は拒否国境こえていくらくだ　和友

松川　杜的報

木屋町の路地を潤す水を打つ　如洲
思春期へ髪も潤う仕草みる　春江
一言を聞いて潤い増す女　武庫坊
潤いを隣に分ける茄子を摘み　佳丹子
ふる里へ心潤す旅仕度　芳子
愛に潤うおんなの肌は透けてくる　年代
ふだん着の中にもうるおいもつ女　ひろし
柿の花落ち重なって雨続き　笛珠
本降りへ一時しのぎの傘を買い　花代子
嵐峡の雨水墨の山にする　萬的
夕立に駈けゆく犬と郵便屋　花村
近江路の雨で比叡がまだ見えず　紫香
雨の底に沈んで生きる灯をともす　水客
懺悔しに来た人も見る寺の庭　白渓子
池の主跳ねて涼しい今日祝う　静江
石一つ一つに無駄のないお庭　飛鳥
大自然の中で庭など要らぬもの　求芽
巡り会い人もお庭も嬉しくて　英子
庭づたいのはなれに住んでいる安堵　栄
桔梗一輪鶴島亀島ひた眠る　杜的
瑞鳥が降りて来そうな庭の松　潮花
積乱雲はぎの青さに触れてみる　笑雪
庭の鳥語る言葉も京なまり　宗悟
庭値打というお屋敷が売りに出る　栞

川柳化粧櫓

植村客遊子報

なまじっか技術があるから嫁きおくれ　岳詩
転居地へマダムがつけを持って来る　秋月
不器用なくせに盃うまく受け　越山
逢える日の月はきれいに見えてくる　実男
又のぞく時計女にはずされる　大鷹
色瓦使うてナウイ家が建ち　葉香
ロボットが人間の首締めにくる　紅月
新婚の旅をたどって阿蘇の山　秋信
どろんこの子に公害などはない　礎石
子供には見せぬ仮面を持っている　悲子
釣られてやろうか餌が大きいから　とし
新緑に一際冴える卯の花よ　みつ子
花火見る一人の留守も悪くない　輝月
翔んでいて男女二十で平等よ　みね子
蔵陰に紫陽花ひっそり咲いている　永楽
梅雨明けの無いまま続く熱帯夜　サワ子
くすぶりを詰めて消したい火消つぼ　はつ子
ボーナスのニュースへ緑のない暮し　信夫
ゲート外れ球涼風に従いて行く　まさ子
月が出てデートの声が高くなる　客遊子

佳句地10選（前月号から）

小林　由多香　選

さくらんぼ構図の中に二つ入れ　春子
ビール一本ほどの幸せなら続く　蘭幸
北方の叫び流氷とは悲し　芳泉
地下鉄に勤めて鰯雲を恋う　英千子
おしゃべりの妻がだまると雨になる　あいき
扇風機八方美人の風で良し　糸葉
もう一本打てばよく効く釘さがす　良征
割勘で不運な話などはせぬ　浩一郎
汗かいてかいてパートの五百円　康子
輪の中で叱ると風が吹きぬける　昭二

川柳藤井寺　赤木　和子報

顔うかがう猫の目娼婦のそれに似て　哲　朗
母星を決めてる雨の夜の長さ　与呂志
モナリザの微笑もゆがむ夏の午後　美代子
花時計午後の陽射しに首もたげ　治　子
星くずが降って来そうな北の旅　つや
ほたる狩り今では都会のショーと化し　律　子
適当にならべ無難な順不同　喜代志
シーレーン何処迄守れば済むのやら　清　心
主婦の知恵午後の昼寝も組んであり　作　秀
午後の五時潮が引くよう丸の内　一　香
ひまわりのみな南向く昼下り　吸　香
どしゃぶりの旅を終えれば星が出る　昭　子
いたずらな星が空から落っこちる　美恵子
山深い宿に二匹の百足出で　一　屯
旅に出て星と親しく話し合う　伴　子
一ページも読まず居眠る昼下り　秋　園
結婚の次は離婚の記者会見　みのる
雨の午後つんどく本を整理する　正　人
星祭り幼きメルヘン銀の馬車　繁　男
田植歌消えて田植機が走る　本蔭棒
伝説を今日まで信じた天の川　うめ
七夕の笹の隙間に星が見え　末　一
取入れを忘れ物干し星の空　和　美
佳人哀史古城の蔦は語らない　雅　美
午後の駅待つ人も無く鳩あそぶ　麻　雄
朝顔に午後の日射しは眩し過ぎ　かな女
熱帯夜クーラー暑さかきたてる　義　一
小咄を抜け出たコキュの白い指　和　子

菜の花句会　高杉　鬼遊報

蠅たたき握れば蠅も身構える　庸　佑
人相も心も変えたサングラス　優
割り算を知らずに西瓜切っている　武庫坊
ゴキブリに間に合っている蠅叩き　春　蘭
計算をしてるがみんなひとの金　勝　美
一匹の蠅が舞台に穴をあけ　蕉　露
職場結婚妻の椅子が高すぎる　雀踊子
一汁一菜こんな膳にも蠅がくる　章
向日葵もうなずいているサングラス　度
計算機よう使わぬと言えもせず　みつる
失敗の数ほど知恵はついてこず　射月芳
気の毒な人やナ椅子に負けてはる　凡九郎
聖書読むその手を蠅よ知ってるか　紀美代
良い知恵の出るのを待った生ビール　健　司
負け犬の心はみせぬサングラス　シマ子
冷房の効きすぎ蠅が病んでいる　鬼　遊
つじつまの合う計算を妻がする　柳　伸
とうさんの椅子に皆んながかけたがる　冬　葉
そのうちに蠅取紙にとまる蠅　悦　郎
サングラスかけて女でない歩幅　美　幸
アルプスの絵が大好きな車椅子　糸　葉
計算ができ怒るまい怒るまい　幸　生
知恵つけたばかりに足をすくわれる　頂留子
パチンコ屋の椅子は廻り椅子である　栞

川柳大阪　井上　喜酔報

二枚目と言われ財布のひもゆるめ　しげお
二枚目になって見たいよメロドラマ　晃　山
二枚目もやっぱり同じチャンコ鍋　弘　雄
二枚目はキッチリ金に縁がない　天　兵
二枚目でめしは食えない労働者　謙　翠
親の顔すてて整形二枚目に　キ　ミ
二枚目はすっきりしてて夢がない　だるま
二枚目もピストル打たれ死んだふり　和　世
二枚目も一人ぼっちで飲みたい日　本蔭棒
ごみごみとした都会に有るぬくみ　みつる
大都会人の心は荒れたまま　金　太
いっぱいのチャンス都会でものにせず　比呂志
路線図を見ても分らぬ大都会　伸　子
大都会ねずみと成って今日を生き　洛　酔
スラム街目印となる通天閣　司
夜の顔昼の顔あり大都会　鉄　心
風見鶏錆びて風向き無頓着　喜　楽
負け犬に冷たい風が攻めてくる　喜　酔
調理師の資格はないが母の味　敏
資格さえ取れば明るい定時制　重　人
母になる資格は神に授けられ　道　子
二日酔い大根おろしにのぞかれる　与呂志
大根をうまいと知った父の汗　笑　風

川柳塔まつえ　恒松　叮紅報

人生の穴場ねらってまだ長屋　正　朗
軍靴ではさけて通れぬ落し穴　雄々勇
一攫をねらって大きな穴をあけ　友　子
陽が届く穴にひたむき蟻の列　満　江
蟬の穴七年の夢やっと醒め　鳳　人
善人が浅く掘ってる落し穴　嘉寿子
いつかポッカリ等身大の穴が待つ　鶴　丸
穴場探して鈍行の一人旅　舞　吉
男意地落し穴から這い上り　正　江
許された罪を活字があばき立て　芳　枝
招待の活字紋切り型でくる　芳　子
活字でっかく嫌な記事ばかり　代仕男
独房で未決活字に飢えている　由　郎
ささやかな不満活字になって問う

夏だから涼しい活字喜ばず　三和
妻の手の朝の活字は匂うなり　荒介
活字離れ本当だろうか本屋の本　渡
剣よりも強い活字が躍動す　春楠
誇りもつ女と言われまだ独り　寿美子
いい友を持ち幸せの中に居る　巡歩
子を持って親子の絆しかと知る　愚童
逢わないですむお守りを持っている　千代
不満持つ兵もいるだろ蟻の列　壮樹
紐の端持つと絆が音を出す　昭二
情け持つ人が涼しい風をくれ　多賀子

夜市川柳大会（59・7・31）

（人・地・天・軸の順）

「二」　玉置重人選

二心額の汗を拭き給え　狂虎
ニニンガシ信じ切ってもいいのかな　楓
二階から母も仏壇もおろす　恵美子
二の舞はごめんだ髭を剃って出る　重人

「笛」　西山幸選

笛が吹けますと山賊には言おう　藻介
真夜中の笛いとしいか恋しいか　栞
笛一管逢わずに死んでゆくために　恵美子
鬼の耳くすぐる笛がまだ吹けぬ　幸

「缶」　大路美幸選

蹴った缶がこちらを向いている真昼　夢成
缶が転んで男はふるさとを思う　冬二
悲しみをおもてに出さぬドラム缶　かずお
缶蹴って遠いロマンを取り戻す　美幸

「上」　八木千代選

記録保持明日から一秒との戦さ　きみえ
スター離婚仕掛け花火に火が這入り　与根一
平和とは斯くも花火の色彩やか　遥児
2DKに住み馴れ銭湯へ通いなれ　孤呂二
水が湯になる灼熱の百日草　町紅

川柳高知　川竹松風報

短足の家計に夢をくれる嫁　佳風
変身の一歩女は髪を切り　康子
美人妻あれこれあった裏ばなし　千鳥
禁断の木の実を夢の中で食べ　千鶴
アフリカの蛸が見抜けぬ舌になる　弘生

川上の螢を誘う未練かな　恵美子
ふるさとを持ちてのひらを上にする　冬二
仰臥して待つのは男仏さま　新子
いつかは風に逢える屋上から降りない　千代

「星」　江口度選

笹の葉が揺れると星の子が宿る　狂虎
ミサイルへ不満を抱く星の私語　喜酔
ヘソに星見せて男の夏にする　狂虎
古里の陽気な星に逢いにゆく　度

「宵」　門脇かずお選

待ち呆け宵待草は咲いたのに　あいき
宵は宵とてしたたかな紫陽花よ　新子
小しずつさだめは変る宵の月　夢草
宵闇にふわっと浮いてくる蛇口　かずお

「店」　重谷重比呂選

ぽん太の店とおんなじ店を大切に　恵美子
赤提灯の店ならキリストに遇える　冬二
夢はありますか初秋の帽子店　夢草
駄菓子屋の壺から海が近くなる　重比呂

日雇の身に多すぎる祝祭日　登舟
ゆっくりと苦もなくのぼる遍路笠　岩男
先生の表情ひとつで子も素直　和興
表情を見せぬ女の厚化粧　幸泉
表情も変えずに嘘を聞いている　竹萌
炎えるもの秘めて女の無表情　菊野
表情の奥に真意は読みとれず　節子
能面の裏で表情出すおどり　松風
無罪釈放明るい顔よ空の青　三吉

尼崎いくしま川柳会　角野かず子報

淋しくて陽気な連れを放さない　礼子
八月の闇がめぐったいくさ跡　かず子
裏方で生きた字引の父が好き　正一
夕立が晴れて父子の声帰る　年代
植木屋がチラリと覗く裏座敷　牧郎
爺ちゃんの恋人婆ちゃんかと聞かれ　伊三郎
風向きが変わって亭主席を立ち　正秀
熱帯魚悪女のように身を躱し　堕駄
翔んでいる女の好きな自由席　美智子
覗かれているとは知らぬ蟻の穴　伊升
妻の灯へ帰る歩幅が広くなる　はじ芽
老いらくの恋が実ったハネムーン　玉子
夢だけは煽ってくれる旅の本　紫香
かりそめに座った席がぬくすぎる　晴子
雑巾が乾いて妻の軽い咳　かすみ
向う岸の亡兄が振り向いてもくれぬ　郁栄
市役所で離婚届を覗き見し　きよみ
瞳の奥を覗く母にも罪はある　貞子
月末の財布妻から覗かれる　定人
昼寝時ピイピイうるさい孫の笛　保蔵
置手紙裏で男が糸を引く　歌子

誘われてみたがその日は寺参り　一利
老いらくの恋がまぶしい夏の雲　君子
打ち水にこころの靄も晴れてゆく　恒三
裏切った女に路銀せがまれる　良征
調子良さ女は裏を見抜いてる　佳秋
日本にまだまだ見たいとこがある　一郎
温泉に何度もはいり若返る　常子
里帰り惚気みやげにおいてくる　静枝
八月の末は静かな子供部屋　みつ
エリマキはないが我が家に蜥蜴いる　幸子
里の味手造り守る父の意地　美代子
孟蘭盆会バイクで走る早い経　春子
めんどうなことが嫌いで爪を咬む　誠一郎

川柳サークル卯の花　辻　白渓子報

碁敵へ余裕を見せたうちわ風　千歩
梅雨が明け仏と話す渋うちわ　たかし
盆踊りうちわの波がよく揃い　里子
思い出の破れたうちわ捨てて去る　鐐太郎
ライバルの儲け話をきく団扇　如洲
必勝の揮ごううちわに甲子園　伊三郎
逢いに行くうちわを帯の背へはさみ　鼓城
母さんが送るうちわはまるい風　柳影
ギャル御輿腰のうちわも揺れにゆれ　志津
これしきの肩書仲人頼まれる　杜的
お隣の中元ばかり頼まれる　一郎
頼むぞと言われた方が先に逝き　よ志子
廊下まで追いかけ私用頼まれる　紫香
頼もしく想うた人に妻がいた　栄
仕合わせは留守を頼める嫁と住み　白渓子
お頼みに来たのにビールまでよばれ　まさお
泥舟に乗ってやろう子の頼み　〆女

氷山の下に怒りがたまってる　武庫坊
やすらかな寝息に氷嚢はずしおく　春子
宵山をハモと氷が盛上げる　美津枝
人寄せにエリ巻トカゲ彫る氷　潮花
宇治氷ふたりの仲は何もない　年代
氷金時とけて泣きごと聞いてやる　静江
氷やの鋸さわやかな音を立て　鬼遊
過疎まもる店で昔の氷旗　和友
縁日の氷の旗がなつかしい　逸
氷壁に立って墓参の許し待つ　節子
花氷うそ言う顔を見ていたり　水客
学友に会うたら保険に入らされ　河瀬芳子
再会は鼻の黒子が物を言い　梅風
再会に過去の炎はもう燃えず　あき子
より戻す再会梅雨はもう明けた　眉水
再会の度に話題も年をとり　嘉子
再会はどなたも体の痛い年　花代子
再会が縁で息子に嫁が来る　もも子

翠洋会　中西兼治郎報

有難やめがねかければ別世界　綾子
能面を泣かせて舞わす笛静か　照子
笛吹けど踊りたくないピエロの眼　みつ子
反省をしすぎためがね重くなる　宏子
バーゲンのめがねは何でこう安い　登志実
何もかも捨てても針を腕にさす　風童
まためがね眼鏡眼鏡と言う小ボケ　いつを
おじいさんの笛それなりの味を出し　光子
権力が吹く笛なぜか尖ってる　兼治郎

東大阪川柳同好会　斉藤三十四報

若者の中途半端を的にする　三十四
忘れものないかと妻に念おされ　良京

噂背に歩調くずさずゆく男　かずを
執念が中途半端にしておかず　柳伸
盆栽の中途半端へ客が来る　雅風
中途半端な掛声ならせぬが良い　綾珠
どっちとつかぬ話で茶をにごし　右近
推敲も中途半端な生噛り　勝美
農政の中途半端へ米が泣く　金太
背丈だけ伸びて心はまだ子供　孤舟
もう一寸習えばよかった免許状　千代子
中途半端が嫌いで左遷地を歩み　公一
再職で中途半端な役につき　春蘭
中途半端な資産を睨む五人の子　滋啓
プラモデル中途半端でほっとかれ　慶三
中途半端な知識が命とりになり　美子
人生に中途半端が多すぎる　頂留子
長電話中途半端で切らされる　柳影
中途半端な大工の釘がよく曲り　雀踊子
酔えばすぐ中途半端に妥協する　柳宏子
鬼瓦中途半端の城守る　喜風

南大阪川柳会　中川　滋雀報

財産は二の次気楽なとこへ嫁く　あいき
財産があるからバカになっておく　浩一郎
財産も借金もない朝の靴　千里
財産はあっても小づかいまならず　久子
金もろて他人の財産護衛する　晴風
財産が無く平和で達者です　善信
財産がないので誘拐してくれぬ　千代三
無欲こそ財産なりと今わかり　円女
財産は無いが子供が有るほこり　綾珠
財産はすくすく育つ子供です　山久
辞書にない言葉をヤングからもらう　柳伸

辞書を開くたびフレッシュな風に逢う　楓楽
辞書ある日枕に丁度よい厚み　重人
辞書ひいてまだ納得のいかぬ顔　庸佑
つぎはぎの父の辞書から花名刺　勝美
隠居部屋に入り考えずれてくる　文秋
最後まで半拍ずれたまま歌い　柳宏子
我を少しずらしてうまを合わせとく　好一
親と子の絵がどうしてもずれている　白兎
情に脆い女の帯がずれている　慶三
焦点がずれると闇が深くなる　冬葉
スカートがずれて悲しい片思い　やよい
ずれかけた眼鏡の奥にある笑顔　ハル子
感覚のずれてる父の小銭入れ　雅風
要点がずれて終らぬ長談義　喜美子
老人のパワーずれたと言わせない　章久
鬼の面つけると前進したくなる　智子
父親になるんだ前進考える　恒明
前進の気持ばかりでまならず　覚然坊
のろくても後ずさりせぬ亀の足　頂留子
後退を知らぬ男が吹くラッパ　寿美
前進をつづけたあげくの肩叩き　秋子
前進の夢ばかり見る司令官　眉水
リハビリー一歩歩けた日の日記　蘭
寝返りが出来這いはいの日を待つ　弘生
前進に暗い過去あり戦中派　公一
俗化した村の人情が枯れてくる　雀踊子
俗名で書かれる小さな墓でよし　滋雀
俗以下で浮かぶ日のない釜ヶ崎　滋啓
これ以上なら風俗営業法に触れ　春蘭

打吹川柳会　**奥谷弘朗報**

記憶度を子に試されている平和　紫映

反抗期へ意見乾いた声になる　川楽
下町に住んで痛みを分ち合い　規仔
金メダルテレビ釘付けこげ臭い　梅朗
真白く干して女の蒼い空　繁代
宝くじ煎じ詰めれば慾で買う　文子
母と子の間を財布脈を知る　一心
上下のはざまで中年糸を織る　康子
あたたかくネジをゆるめて日記とず　みをき
耐え抜いた女の覗く水鏡　節子
ごみ取りに暑させめても冷いお茶　高代
苦労して探した嫁にいびられる　吉朗
地下街は方向音痴をあわてさせ　亮二
慕う親老けてしまえば鼻に付き　孝美
縁談が決まり惜しがる男親　ミヤ子
休みなく廻る時計に歩を合せ　興一
夢にまで見る川柳の心意気　孝彦
悩み事言い出せぬ程母は老い　喜美子
青い鳥探す気持の趣味に生き　弘朗

城北川柳会　**野呂右近報**

若人の祭典熱闘甲子園　午郎
ふる里はまだまだ遠い里帰り　山久
老人は若い時代を思い出し　茂樹
長い髪揺らして女らしく見せ　三和
眠り誘う電車の揺れに身を託す　節子
若鮎の姿涼しき床料理　八重
暑さには老いの仕事もはかどらず　炉斉
砲煙の彼方に消えて若い日日　新一郎
惜別に揺れる心を僕は見た　重彦
海水浴もぐり上手が西瓜取り　星斗
若かりし頃よみがえるクラス会　茂一郎
孫というオモチャを神にあてがわれ　正之

岸和田市文化祭参加
第34回市民川柳大会

日時　**昭和59年10月28日**（日）正午
会場　岸和田市民会館地下会議室
おはなし　西田柳宏子
兼題　「絞る」　梶川雄次郎選
「手探り」　野村太茂津選
「曲り角」　榎本聡夢選
「透明」　橘高董風選
「忘れる」　西尾栞選
席題　当日2題　各題2句　締切2時
会費　五百円（大会誌呈）
賞　市長賞、市会議長賞、教育委員賞、文化協会賞、操子賞、きしせん賞

主催　岸和田川柳会

紅バラに乙女心が揺れて居る　すみれ
イヤリング揺らして女よく喋り　テルミ
大揺れの心嬉しく師と出会う　達一郎
大臣の一と言マスコミ揺れに揺れ　悟郎
燈明に亡母が揺れてる三回忌　麻黄

惜しみなく陽に焼く若い白い肌　静子
大ジョッキ皆んな弾んで居る若さ　笑風
実盛が老いかくそうと髪染める　仙吉郎
ぶらんこの揺れに童心よみがえる　千世子
ルンルンとマリンルックの細い足　ただし
心もう郷里へ着いた汽車に揺れ　道子
きらめきの浜の若さがまぶし過ぎ　達子
イヤリング揺れる女のエゴに触れ　圭介
熱帯夜せめて演歌を歌おうか　静歩
打たれてもよし直球で行く若さ　右近
若い血が騒ぐと冒険したくなる　綾珠
冷え切った筈の心が揺れる夜　倫子
揺り椅子で幸せを編む一目ずつ　満津子
若い娘の話がはずむアメリカン　公一
ポケットに拳を持って居る若さ　婦美子
お若いと言われても一度鏡見る　ふみ
証言に揺れる心を見透かされ　三十四
一日を遊んで悔やまない若さ　弘生

ハワイ川柳ウイロー社　市岡　暁舟報

東京に憧れ持った頃恋し　公女
大都会油断が出来ぬネオンの灯　拝山
出世の道はないかと街歩き　十吉
都会宿病院程に金使い　蒼生
都会住まい便利最高有り難さ　梨花女
停電に忽ちお手揚げ大都会　香夢女
憧れた都会で知った郷里の良さ　張賀
都会より古里訪れ盆供養　虹宵
パチンコ屋開店町を飾り立て　一牛
ストリップ都会話に見に行こう　秀山
地下商店四方八方人の山　万里歩
粥の味都会暮しで母思う　暁舟

川柳ささやま　河原みのる報

寝冷えでもさせよもんなら恐い妻　ひか平
お互いの気配りあって丸う住み　(円)貞子
忙しいただそれだけを支えにし　きしる
何喰わぬ顔で支える父母が居る　久子
淋しさに負けて山彦呼んでみる　さかえ
返り血の中で三の矢研いでいる　文平
陶工の十指に土の詩がある　テル
習慣を守る近所を誘い合い　可住
口コミの年期の味へ客が寄り　(奥)貞子
叱られているうちいつか腕を上げ　みのる
ロボットが気くばりもなくこき使い　越山
山彦と二重奏してみかん売り　かおる
三代の知恵浅漬けの味を継ぐ　孝
農夫みな五風十雨を祈る顔　秋子
欲深い祈り賽銭十円で　愛子
背広着て村習慣を切り捨てる　百合子

川柳ペン皿　鈴木　節子報

民宿のような我が家の夏休み　いくの
八月も終りのビタミン剤を飲む　智子
鎮魂の形で雲が西へ行く　田鶴子
先ず友に電話してから考える　いく子
夏休み民族移動の一人なり　妙子
八月の海に刹那の恋を捨て　年代
八月十五日を知らず子は育ち　勝子
夏の雲遠い戦を忘れない　節子

サークル樗欅　田形　美緒報

髪切れば歳よりずっと若く見え　千代女
薄くなる髪へ貴重なアデランス　千代
マドンナの髪は季節の恋の彩　森子
逢いに行く日の髪型が気に入らず　今日子
髪を剃る女の命にある未練　美緒
階段を二段とばして行く若さ　三四子
黒々と長い髪欲し四十過ぎ　泰子
日本間に髪落ちていた蝉しぐれ　岳人
アデランス虚しい時がきっと来る　恵
髪染めて第二の人生旅鞄　雅子
洗い髪目をそらしてる扇風機　登美子

富柳会　藤田　泰子報

黙禱の静けさの中蝉時雨　章久
夏美人パラソル不要の恋が好き　森子
火あそびにかくれる傘の彩を買う　美代
若い日の日傘の柄を思い出す　トシエ
登校時黄色い傘が波を打つ　勇
風ないが唄ってみたい風鈴よ　美緒
美人らしい人が傘さす夾竹桃　今日子
三面記事太郎と花子離婚する　千代
傘返し又借りて来るにわか雨　千代女
予報官傘がいるかと妻に聞き　文次
抜けがらの蝉の命へ風抜ける　美房
二本目の傘を女と買いにゆく　岳人
蝉取りの父が帰らず子が案じ　富久一
新聞で包んでくれるぼくの首　冬二
思いきり汗をかけよと蝉時雨　憲太郎
老いの身に感動を呼ぶ声の欄　荘次
一応はテレビ番組に目を通し　きぬ
気まぐれな風と風鈴よく遊び　美津子
取りあって読む新聞の裏表　喜代
前をゆく傘は美人ときめている　山久
風鈴の音を絵にするやさしさよ　狂虎
風鈴の詩情を捨てぬ母の部屋　優
風鈴に掻きおこされし思いあり　多紀子

寝てる子を起し風鈴鳴り続き　泰子

西宮北口川柳会　妹尾春江報

ストレス解消今日快い蟬しぐれ　千世子
五時起きの蟬のお経のありがたさ　幽香
捕われて鳴かない蟬の哀れなり　眉水
せがまれて捕えてみれば鳴かぬ蟬　保蔵
森林浴ゆっくり蟬の声もきき　好江
三回忌法衣に蟬の声通る　江美
何事も三番がよい風当り　伊三郎
酒やめて三日浮世はつまらない　東洋男
三回忌あの日の涙信じとく　和友
数え唄三つめあたりこぬか雨　はつ絵
三界に家ない旅の遍路鈴　三笑子
三役をこなして女業深し　隆子
数え唄三つぐらいで消えて行く　よし津
豆腐屋へ三キロ新築出来上がり　君子
三角の底辺にある母の愛　かすみ
三叉路に亡父のざんげが落ちている　美智子
三人の一人が少し横を向く　美幸
奉賀帳一応本家の顔をたて　春蘭
金ピカの背文字は親の安心用　てる
童話本むかしむかしが死語になる　文平
本好きな割に世間にうとい人　庸祐
本当は言えず咄嗟の嘘が出る　半歩
ベストセラー枕に夏の白昼夢　礼子
経本をめくると父母の声がする　〆女
一葉が好きな老母は文学者　佳秋
失恋の日から哲学書に凝り　(梁)春子
六法の深さに眠くなってくる　婦美子
雨情詩集返さぬままに娘は嫁ぎ　郁栄
坂道が思い出させる心電図　水声

下り坂いとかんたんに転ぶなり　いわを
息切れの坂で情けが身にしみる　(伊)春子
教育費ローンに暮れる四十坂　園歩
ざんげする気持で上る寺の坂　右近
売り声もとぎれとぎれに坂の町　春江
上り坂必ず空に続いてる　みつ子
昇り坂にも下り坂にもなる道中　凡九郎
美しくゆっくり降りる老いの坂　静子
坂の上人種が違う街がある　堕駄
坂の上いつもと同じ灯がともる　水客
敗戦の体験少し彩があせ　冬子
八月は戦争体験記事ばかり　きよ子
教師という体験談は鼻につき　シマ子
初体験ずばりタレント悪びれず　杜的
体験の中に戦争ある不幸　一郎
ケロイドに母の悲しい体験記　柳影
一度なら体験したい燃える恋　よ志子
体験を知らぬはたちの向う意気　笑女
体験が不足で女に騙される　武庫坊
色事も体験談のつまに入れ　紫香
体験談運のこわさを知らされる　花村
いつまでも苦労ばなしをせぬことだ　鬼遊
言うなれば体験談は大げさに　年代
相談の最後は体験談になる　まさを
体験談だけで売れてる保健食　紀雄
体験は背なの丸さにしもてある　しげお
台湾行きの体験談は粗末すぎ　栞

三幸川柳教室　桜井千秀報

結局は嘘の言い訳身をせめる　千枝子
言い訳は胸におさめて草むしる　千香子
言い訳のしない背中が意地を見せ　文子

激流に流されそうな鮎の群　美子
野仏を洗い流して雨しきり　愛子
速すぎる時の流れに溺れそう　靖子
満身創痍急流ばかりに身を委ね　千秀
小石でも積めば流れは変えられる　桂香
流される心に堰の杭を打ち　つゆ子
気がつけば静かな川に流れ着き　ふく代
てのひらを離れてまりは自我を持つ　敏子
球形の荒野に一人立つ思い　静子
熱血が意気が非情のボール追う　智水庵
十年もすれば電柱消えている　隆行
いにしえの柱の跡はほじくられ　重次
発車ベル柱のかげでいう別れ　孝子
柱組み出来たやぐらに祭の灯　三千子
乳ばなれせぬ児を杖とも柱とも　静
スマートな大黒柱で荷が重い　当代

尾浜川柳会　上田佳秋報

妻の日記にオレが頭を下げている　牧郎
うぬぼれを駅のホームに捨てて出る　保
つっかい棒はずして故郷の駅に降り　光重
二度三度会えば会う程口説けない　よしを
会う度にたくましさ増す孫の顔　いわを
時の人徹子の部屋で今日も会う　すみ
酔えばすぐ校歌を唄う友と飲む　武庫坊
ハンカチを二度と会えない人に振る　智水庵
健やかに今年も行ける薪能　紫香
スーパーの笹に短冊吊ってくる　清太
反核の祈りに厳し夏の塔　貞吉
鬼瓦たまには笑顔みせてくれ　歌子
部のリーダーいつも家来をつれている　弘
ジャンケンで敵の家来になっている　すゑ
　礼子

家来など持ったことない三太夫　良征
光秀のような家来が社にもいる　佳秋
飲もうかと言えば家来が増えてくる　江美
蝶てふに子守たのんでひとやすみ　昌子
これからも二人で渡る長い橋　よしつぐ
用意した祝言すらすら出てこない　夢之助
共稼ぎ日曜の朝は女です　弘治
このハガキどうも政治の匂いする　貞男

駒つなぎ川柳会　里　小路報

分別の中へ未練をしまい込む　寿美
控え目な性でブームに乗り切れず　弘生
善人で愛の汚点が隠せない　あおい
分別を弁えぬまま玉の輿　春蘭
控え目な男奥の手ありそうな　東雲
タンクトップもう半袖で耐えられず　一二三
正論をつないでロマンに遠くいる　勝美
風化する汚点を知っている議員　雅風
分別盛りの息子を母はまだ案じ　文秋
半袖に背広かかえた御堂筋　律子
社長から半袖笑いのある会社　度
控え目な抵抗黙って座を外す　萬的
現代はシミある人が肩を張り　覚然坊
分別に欲の一字が割って入り　善信
控え目がときどき核心ついてくる　藤子
マンがにもならぬロマンを抱いている　美代
分別をあっさり捨てた五カラット　甘平
半袖にいくさを憎む傷のあと　柳影
鳩時計鳴るとロマンが甦る　冬葉
控え目が妻の機嫌をそこねてる　恒明
男気が出て分別を忘れかけ　天笑
あきらめがにがい汚点を忘れさせ　円女
ちちははの浪漫は漢字で書いてある　美幸
半袖で飾った言葉など言わぬ　浩一郎
カラフルに染め替えましょう人生も　美津枝
線香花火小さな分別消えました　洋子
控え目にするから矢面から外れる　悟郎
回り舞台がまわると汚点消えていた　智子
セーヌ河四季それぞれにあるロマン　千代三
半袖の肱の辺りに宿る老い　楓楽
他人のものだから許せぬ染み一つ　美房
分別が書いた辞表を破りすて　不二夫
控え目でいつでもくやし涙持つ　笛生
半袖の哀れネクタイしめている　重人
森へ行けばロマンがあると信じてる　健司
分別が堪忍袋縫えという　頂留子
控え目な女が持っていたふくみ針　雀踊子
半袖で勤め出世に遠い職　恭太
三つ目のロマンを探す霧の中　柳伸
毎日の汚点の中で育つ僕　凡九郎
闇に目がなれて分別ついてくる　信治
絵日傘が一つピアノのそばにある　白兎
控え目でいつも噂の外に居る　真砂
これ程の汚点をコピーされている　小路

岸和田川柳会　植山　武助報

雲の上ほんとにかみなりいるのかな　七歳　あつし
泣き言は言うまい寡婦のひとり言　ひで
いたいけなかまきり草引く手をはねる　こう
飲み仲間いいな今夜も梯子酒　ゆづる
猿山の仲間はずれは自閉症　楽天
昆虫のお墓がふえた夏休み　さよ子
大いなる暑さ過ぎたり甲子園　希久志
代筆をせがんだ父はもう居ない　礼子
代筆とは知らずに文に惚れた人　冨志子
代筆でない母の便りにホッとする　幸代
手拍子のリズムに燃える甲子園　狸村
かいかぶられたまま一年の役を終え　武助
仲間から異端視されるはぐれ鳥　白光子
スズ虫は九月の風を知っている　甘平
放映の座談の庭に蟬の声　操子

川柳たけはら　森井　菁居報

ぬりえきれいにぬろうよたのしいよ　5歳　ふみこ
ゆびでたしざんできました　小一　あきみ
さんすうはえんぴつなめなめかんがえる　小一　はるみ
八メートルおよげてプール休めない　小四　純平
夏休みきょうだいげんかたえない　小五　美保
ねがいごとかなえてほしい七夕さん　小三　方昭
今日雨がふるかしいちゃんに聞いてみる　小五　亜貴子
台所母せんようの部屋みたい　小六　早代
約せない期末テストの感触よ　中一　仁昭
肝心なとこで鉛筆ポツリ折れ　中一　恵子
夏休みプランはピンクに塗りましょう　中三　紀
住吉祭ボーイフレンドがほしくなる　高三　愛
のほほんとしてカマキリに隙がない　菁居
給料日ぐらいと本を二冊買う　笑子
日々好日笑顔がテスト持ち帰る　令子
すこしずつ少しずつ子が離れ　淑子
姉らしく妹らしく絵本読む　蘭幸
潮騒と禅問答をくりかえし　節夫
夕焼けへ夫は鎌を研いでくれ　房子
あの時のひと言キラッと亡父の齢　洋之祐
鐘が鳴る鳴る病気は気からとおっしゃった　静水
ご飯の炊けるにおい一家の平安よ　比呂子
旅行けばささやくような風に会い　鈍舟

写経むなしく天に召されし伯父惜しむ　敬子
ひろしまの苦しみ時効は許せない　のばら
忍耐の女が異議を申し立て　貞子
手を上げる子に止まらない対向車　一路
太い声出すと乱れる標準語　博子
お社の鳥居父の名生きている　シゲヨ
母の白髪へ僕はなんにもしてやれぬ　白狐

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

夫が子があがないくれたこの平和　しず
この平和知らずに逝きし母いとし　房子
防衛費平和をよそにピッチ上げ　明吉
この国に戦争なんてあったのか　博史
独立と平和を願う墓石あり　登志実
健康で一男一女ある平和　英子
ひげ生えた迷い子巷に満ちあふれ　隆
一の矢を放ちながらもまだ迷い　正坊
迷う程数もないのに服えらぶ　賀代
夕立を追いやって行く市場篭　美祢子
夕立へ濡れて帰った反抗期　きく子
犯人の母に語らす心なさ　冨子
焼酎が好きパチンコと下駄が好き　寿美子
灰皿もその小心にあきれ果て　薫風
よく曲る道でときどき城が見え　紫香

むらくも川柳会　藤井　明朗報

クーラーはかけたし冷房病はいや　清祥
クーラーの中で暮らすモグラ族　ヤス子
面影を追えば追う程波が消す　福子
一枚のハガキ絆を太くする　巡歩
一言の悔いが重たい夜の足　マサコ
一枚の切符が誘う旅心　よし子
冷房などいらぬと明治は汗をふき　克子

額ずけば声なき声に灯が揺れる　はじめ
面影のやさしさを追う盆の月　文子
災害に一から出直す無一物　吉野
一刻をはげしく燃えて揚げ花火　百代
面影を捨てた女は蝶になる　ふさえ
冷房を出れば地獄の亜熱帯　鶏生
声聞けばはたちのような電話口　芳子
寝たきりへ風鈴愛の音で鳴り　はる代
風鈴に誘われまろい夢を見る　蚊声
両親の面影を抱く原爆忌　竹乃
初盆へしのぶ面影灯がゆれる　藤子
風鈴を聞きつつ昼寝するわが家　峰雪
うだるような暑さへ輪をかく蝉の声　秀子
亡き人の面影うつる盆の月　きよ子
初盆へ一番星がよく光り　孝華
金メダル声にはならぬ嬉し泣き　林蔵
一声でよしきたほいと飲み仲間　正朗
面影をしのんで句座の和む友　明朗

川柳はびきの　塩満　敏報

これしきの暑さ原爆忌に思う　美代子
右に剣左に聖書もつ平和　憲太郎
軍神がお出まし平和乱される　みつる
終戦の記念日平和な昼寝する　一屯
ケロイドの肌は平和の語り部に　隆二
八・一五平和な夜のビヤホール　白水
豊かなる平和は母の乳房なる　与呂志
涙から生んだ平和もすぐこわれ　只士
ああ平和けつねうどんと冷やっこ　敏
道連れにねぎを選んで串になる　伴子
そろばん玉が動いて娘の荷増え　隆
ママの手を離れて弾むランドセル　司

道連れの旅に出逢った萩の道　末一
ロス五輪人魚のモデル水中花　石橋義一
あの日から秘密が出来て胃が痛む　忠宏
フライパン姑が堪えていて平和　寿美
寺の鐘平和の音で鳴り渡り　喜代子
老母への便くろねこの手を借りる　吐来
桐の下駄久し振り履き盆踊り　隅谷義一
鬼灯を祖母が鳴らした宵祭　繁男
道連れも河内弁なら親しまれ　胡村
我が家では一泊二日夏休み　重樹

堺川柳会　河内　月子報

ペンの手のぬくもり冷めぬ母の文　道女
先代のぬくもりだけで生きてます　真柳
ふる里の役場で謎が解けました　天笑
ひぐらしが秋の気配をもってくる　武庫坊
夏休みすんで昆虫ほっとする　山久
鈴虫と月で舞台は秋となり　甘平
黄昏れて昨日の謎がまた疼く　柳伸
山の虫街で悲しい声を出し　金三郎
ぬくもりの消えたあたりにつむじ風　度
台風が小さな秋を置いてゆき　冬葉
謎解けて大きな心配事が出来　千万子
謎を解く鍵は夫婦の和の中に　妻子
湖の謎は語らぬ水の碧　柳宏子
この森にいくつの命虫すだく　年代
ボロを着て仕事の虫はバカにされ　東雲
すぐそこに冬が待ってる足の冷え　月子
女の肌秋の気配に光りだす　素灯
ひと言が冷えた心を温うする　秋風
苦虫をつぶした方が素顔です　凡九郎
ぽっくり寺で虫の好い願かけてくる　紀美女

60年1月句会から会場が変ります!!

なにわ会館改築工事のため60年1月から本社句会の会場が左記に変ります。

◇新会場

メンズファッションセンター（MFC）3階

大阪市東区内本町1―1
電話（06）941―1918
地下鉄谷町線谷町4丁目下車。（2番出口）
谷町3丁目交差点西南角

★会場・附近見取図など詳細は追って発表

川柳塔社

10月の兼題は表紙裏に掲載

11月の本社句会は7日（水）

若柳潮花追悼
卯の花句会

日時・10月17日（水）13時
場所・高槻市市民会館
（阪急電車高槻駅下車東へ10分）
兼題　花　竹内花代子選
　　潮　辻白溪子選
　　師匠　黒川紫香選
（席題一題当日発表）
会費・三百円　投句二百円（切手可）
連絡先　〒569　高槻市明野町一五―二七
上原逸

●募集●

十二月号発表（10月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「感謝」渡辺独歩選
「捨てる」竹中綾珠選
「欲」川上渓水選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

一月号発表（11月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「米」時末一灯選
「けじめ」垂井千寿子選
「言い訳」内海幸生選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をご使用ください。

10月の常任理事会は1日（月）

定価五百円（送料50円）
半年分三千二百円（送料共）
一年分六千三百円（送料共）
昭和五十九年九月二十五日印刷
昭和五十九年十月一日発行
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六　ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六二九―六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

☆九月二日の西日本川柳大会は麻生路郎先生の句碑が弓削駅前に建って35年の記念すべき年であるところから、大会の記念品として、「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」の先生揮毫の色紙が参会者に配布された。

☆その色紙は大坂形水さんの秘蔵の色紙からのコピーで、まことに墨鏃とした筆勢のものであった。

☆九月九日には鎌倉建長寺での井上剣花坊50年忌句会に鬼遊さん覚然坊さんと馳せ参じた。先覚者の50年忌とあれば「知っておかんことには話にならん」の気持からで、編集雑務に追われての、とんぼ返りの旅だった。そこでも故人揮毫の色紙「どっしりと坐る一萬二千尺」（富士山）を頂く。両師ともに王羲之の筆法を好まれていたというのも因縁のように思えた。建長寺境内の鐘楼脇にある有名な「咳一つ聞えぬ中を天皇旗」の句碑も初めて見た。想像していた以上に大きい碑だった。私は故人を殆んど知らないけれど、知れば知る程、大きい存在になる人物に違いないと句碑を見ながら感じたことである。明治生まれの指導者達に較べ現在の川柳人は概して器が小さくなったが、その因って来る所以のものを考えた。

☆一つは、不退転の闘争心反骨精神である。徳川太平の世を覆えした萩藩出身者らしい江戸者阪井久良伎に対する草魂でもあったろう。今一つは、底知れぬ川柳愛である。次女の大石鶴子さんは「川柳の魅力を大衆に認識させ、次代を継ぐ人材を育てることに腐心した父は、参会者の皆さんが同じ目的に尽力されるのを望んでいるでしょう」と挨拶の言葉を結ばれたが、私も又川柳界の発展向上に絶大な加護のあらんことを祈念したのだった。

☆師路郎と剣師とに共通した所の多いことを痛感する☆懇親宴も失礼して帰途についたが、剣師夫人井上信子女史と同名の京都の井上信子さんを道連れに、新幹線の人となった。（薫）

▼文字にすると大げさだが〝炎熱地獄〟とも言える苦痛の夏も、九月となれば句日を経ずして秋の気配となる。校庭のポプラの樹々も秋風を呼んでいるように梢の揺れも爽やかだ。ポプラを眺めていると銀杏の大木へ想が連なり、ぎんなんの季節だと思う。日記を繰ると去年は十月七日、一昨年は九月三十七日に、ぎんなん拾いに出掛けている。いつの頃からか、ぎんなん拾いがわが家の行事のようになった。豊かな自然に囲まれた人々には見向きもされない、ぎんなんであるが、都会に育ち、都塵に住んでいる者にとっては、季節との鮮やかな出合いである。

▼銀杏には、雌雄株が異りぎんなんの成るのは雌とされている。扇型の葉の円辺に深い切り込みのある方を俗称ズボンと云い、これは雄株で実がならない。切り込みのないのを俗称スカートと云って雌株で実の成る方である。自然に遠い都会人には、この分類方法が面白く、銀杏に出合うとそんな目で見たりする。

▼わが家では専ら天王寺公園を採取地にしているので、公園のどこにスカートの木があるかは探さなくても知っている。しかし木になっているのを採るのでなく、落ちているのを拾うので、その時機が難しい。夜半、雨風の激しい朝を待って始発に乗るが、ライバルに先を越されて、季節を拾えない。今年はどうか。（き）

☆修学旅行の帰途とおぼしき小学生の一団と電車を乗り合わせた。旅の疲れも見せず、はしゃぎ回っているのを眺めていて、オヤと気がついた。殆んどの子供がピンク色の同じ包装の包みを持っている。伊勢名産「赤福」である。それも一箱や二箱でない、中には十数個はあろうと思われる包みを抱えている子がいる。

☆ぼく個人の遠い記憶を手繰ってみても修学旅行の土産といえば、たいてい自分自身のためのものを買った乏しい小遣いだから、せいぜい絵葉書とか、そんなものだったと思う。

☆赤福餅を五箱も十箱も買ってくるというのは、察するにご近所への土産なのであろう。子供心にそこまで気がつくはずはなし、きっと親に言いつけられたに違いない。こんな年頃から、大人の渡世の義理におつき合いさせられるとは、今の子供たちは大変なんだナと思ったりした。

☆旅に土産はつきもののようで、荷物恐怖症のぼくなんか、そのことを考えると出かける前から気が重い。あっちにあげて、こっちにあげなんだら工合が悪いし、義理を果せば荷物はふえる。不機嫌にもなろうというものだ。

☆この号が出る頃、中国旅行から、土産をどっさり持って帰ってくる。今から楽しみにしている。（史）

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十九年九月十五日印刷
昭和五十九年十月一日発行（毎月一日発行）

日刊
電波新聞

投稿欄案内

川柳　選者・橘高薫風
（掲載日）毎週水・土曜日

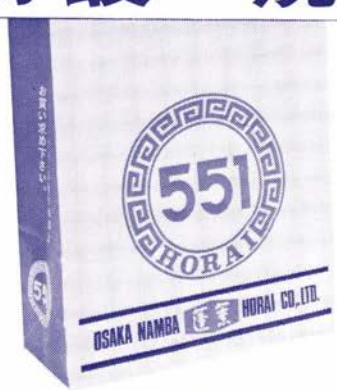
俳句　選者・小寺正三
（掲載日）毎週火・金曜日

短歌　選者・佐々木信夫
（掲載日）毎週月・木曜日

〈投稿規定〉
はがき一枚に三句（首）以内（川柳・俳句・短歌と明示すること）。投稿随時。
自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

〈投稿先〉
〒五三〇・大阪市北区中之島三―二・朝日新聞ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

ボリュームたっぷり　スタミナ満点!!
豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ

551 HORAI

ほうらい
蓬莱
TEL641-0551